
君にまたこいねがう

みなたけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君にまたこいねがう

【Nコード】

N8298P

【作者名】

みなたけ

【あらすじ】

なにげない楽しい日々が続くものだと思っていた——あの時までは…。大好きな姉の死。久遠院陸が失ったものはあまりに大きすぎた。また彼の世界のすべてが色あせてしまう。そんな絶望の折、不思議と彼の心を引き付ける神秘的な少女が彼の前に幽玄と現れ、信じられないことを甘く囁きかける。「あなたの願いをかなえてあげてもいい」その妖しい誘いに彼はすべてを投げ打つ覚悟ですがりつく。たった一人の姉のために。

無事完結しました^^

第一話 起・夏蝉（前書き）

彼女の追憶・？

この願いが胸の中だけで終わりませんように。
この夢が泡沫の儚い幻と消えませんように。
この祈りがあなたの心まで届きますように。

——そうわたしは久遠に希われてきた。

ならば。わたしはいつたい誰に希えばいいのだろう？
天から降り落ちる雨はなにも答えてくれない。

でもこの地を久遠の時の間見守り続け、
人々の願いが叶うように祈り続け、
望みが叶えられるよう尽力し、
その結果がこれだというのなら“神”とはなんと残酷な存在なのだろうか？

雨に濡れた肌さえ、渇きのあまり鈍痛を覚えるような熱風が吹き付ける。

燃えさかる紅蓮の炎がまたも建物を舐めていく。
されど、この猛火は寧ろ当然の報いなのかもしれない。
この結果はあるべき正しき姿に逆らった、正しく“天罰”なのだから。

第一話 起・夏蝉

くそ暑いある夏の日だった。

いったいなにが楽しいのか、生き生きと太陽は輝いていた。
いするぎ

石動中学校一年生の久遠院陸は、こんな中、

グラウンドで全校集会を開く校長の気持ちさがこれっぽちもわからなかった。

校長の大事な話もいまの陸にはろくに耳へ入らない。

陸の成績はあまり思わしくないから……という理由だけではないだろう。

ただ。 セミが鳴いていた。

セミだけが、泣いていた。

悲しくもないくせに。

「えー。 くれぐれも皆さんも水の事故には気をつけてください」

……風の悪戯か。 話の締めくくりに、そんな夏恒例の訓辞を校長が告げたのが陸の耳にも届いた。

なにがあってもプログラム化された常套句が言える校長は、いつも通りだ。

周囲はなににも変わらない。 それが陸にはひどく理解できなかった。

「まったく。 やつと太陽とハゲ頭の殺人光線の二重地獄が終わったぜ」

と。 陸とは別のクラスの男子生徒が伸びとともに軽い皮肉を囁いた。

陸たちはクラスでも背が高いほうだから、実際はそんな被害も微々たるものだったが、そんなジョークにチラホラと軽い笑いが巻き起こる。

しかし、陸だけはそんな空気についていけなかった。

陸だけではなかったのかもしれないが、暗くうつむく彼にはわからない。

まるで自分だけが冷凍室に閉じ込められたような感覚。

隔絶され、氷のように心が凍てついていた。

だから、周囲の憐憫の視線も。 同情の眼差しも。 腫れ物を扱うような態度も。 陸はまったく気にならなかった。

——どうしてオレなんかが生きているんだろう？

ただ、そんな暗く苦い思いだけが陸の胸を占めた。

何度も何度も衝動的に、暴力的に、胸を暴れまわった。

オモイを振り払うように首を大きく振り、陸は空を見上げた。

誰の顔も見ないですむ空を見上げた。

それなのに、どうしてもひとりの顔が陸の頭から離れてくれない。

どんな傷よりも深い、ぽつかりと空いた胸の空虚さが理解できない。

「ほんと、ばつかじゃねえの」

知らず、陸の口端から苦々しい言葉が漏れた。

陸は誰に対してばかりと言ったのか？ 言いたかったのか？

それは人どころかきつとすべてにだ。

今の陸には世界のすべてがまた色あせてつまらないものに感じられた。

自分の姉が唐突にいなくなってしまうて以来、なにかもがどうでもよくなってしまった。

緊急の全校集会をするまでもなく、そんなことわかりきったことだ

つたはずなのに。　オレは大好きな姉ちゃんを失ったのだ。

物心がついたころには久遠院陸の母親はいなかった。

陸を生んでから三年後、病気で死んでしまったらしく、

そのため彼は母親のことをおぼろげにしか覚えていなかった。

また、いわゆる仕事人間で家にほとんどいない父親と陸はあまり折り合いがよくなかった。

たまにいわせた時に交わす言葉といったら、始めたばかりの英語の教科書に出てくるような基本的な挨拶が二、三言ぐらいだった。

そんな陸が成績はあまり芳しくないものの、捻くれずに中学まで進めたのはひとえに彼の姉、久遠院紫織くおんいん・しおりのおかげだったのだろう。

のんびりしている癖に、陸の記憶にある限り毎日欠かさず温かいご飯を用意してくれた。

馬鹿なことばかりしているのに元気がいいのねと逆に大らかに誉めてくれた。

その代わり、本当にいけないことをした時にはきちんと叱ってくれた。

隠しているみたいだったが、自分のことよりも常に弟のことを優先していた。

そんな紫織は陸にとって自慢の姉であり、大切な心の支えだった。

石動中学一のバカップルと周囲から揶揄されるぐらいの仲のよさだった。

そんなことを言われてもなにも気にならないほどの仲のよさだった。

そんな陸の姉——紫織は九回目、

中学校生活最後の夏休みを自由に過ごすことができなくなってしまった。

七月二十三日。

奇しくも彼女の誕生日に近所の川で溺れ、帰らぬ人となったのだ。それはあまりにも唐突で、あまりに理不尽すぎる出来事だった。

つい昨日の出来事のはずなのに、その時のことを陸はほとんど覚えていない。

……今回は自分の馬鹿さ加減に陸はほどほど愛想が尽きた。ただ、ぼんやりと彼が覚えているのは川辺で青ざめて横たわる紫織と、

どうやら自分なんかを助けて、彼女は死んだんだということだけだった。

今までは姉に悪態をついたことさえなかったが、

今回ばかりは陸も紫織を思いつく限りの言葉で罵倒したかった。

どじ。のろま。泳げないくせに川に飛び込むなんて、ほんと、ばっかじゃねえの。と。

だが、そんな拙い思いを伝えることさえ永遠に叶わない。

第一話 起・夏蝉（後書き）

ということではじめまして。

普段は読む専門なのですが、色々な作者さんに刺激され、自分でも何かを発信してみたいと思い筆？を取ってみました。

拙い文章をさらすことになりましたが、精進しますので温かい目で見守ってくれと嬉しいです。

誤字脱字文法の誤り等のご指摘、感想お待ちしております。

第二話 起・悪友

一学期最後の登校日。

緊急の全校集会も終わり、生徒は蟻のように整然と校舎に戻る。集団はひとり欠けてもきちんといつも通り機能する。

……よく周囲からは馬鹿とからかわれるせいか、陸にはそれがとても納得できなかった。彼にとつて、太陽の沈んだ海が熱くならないのと同じぐらい不思議でならなかった。

走った。流れに反発するように真っ先に陸は四階の教室に戻った。

突発的に訪れた凶暴な衝動に身を任せ、目の前にあった壁を力の限り殴りつけた。鈍い衝撃。

「——っ!!」

拳が痛かった。それがどうしようもないぐらい陸は憎らしく感じた。

死んだらきつと痛いという思いさえなくなってしまっから。

足りない。自分が同じになるにはここから飛び降りればいいのだろうか？

普段は浮かぶはずもないような自虐的な考えばかりが陸の脳裏を占める。

「うつしや。アムナンバーワン。」

……んん？　あー、陸が先だったか」

陸が半ば本気で窓辺に手にかけてところで、男子生徒が一人教室に入ってきた。

葛藤はなかったはずなのに、陸はなぜか思いとどまってしまった。目の前で死なれるのはツライからだろうか？

……ろくに覚えてもいないくせに。

あかぬけた声の主は五十嵐悠也いがらし・ゆうやだった。

今の陸に話しかけてくるヤツはいないのに、図々しくも話しかけてくる

——気にかけてくる、陸の小学校時代からの友人だ。

授業参観の時に陸の親が誰も来ていないことをからかわれて以来、喧嘩に喧嘩を重ね、互いの悪いところも良いところも認め合い、

いつの間にか陸は悠也とつるむ様になっていた。

男の子の特権というヤツだろう。

「……………」

朝方、柄にもなく陸が上級生に絡んだところをわざわざ仲裁に入ったような男だ。陸が先に校舎に戻ったのを見かねて悠也は追いかけてきたのだろう。

でも陸は、そんな悠也の珍しい気づかいに感謝の言葉の一つも返す気になれなかった。

なにも言わずただ窓際の自分の席に腰を下ろし、悠也を無視するように陸はただ外を見上げた。

青い絵の具で一色に塗りつぶしたように澄んだ空。

浮かぶ大きな雲はただ遠い。

雲のずっと先にはいつたいなにあるのだろうか？

……どんな答えであれ。今の陸はなにも考える気にはなれなかった。

トンチンカンな発言に、静かに笑ってくれる存在はもういないのだ

から。

そこに彼女はいないのだから。

ベルが定刻通り鳴り、陸の担任が機械的に現れ、すぐに恒例のホームルームとなる。担任の話はろくに耳に入らず、陸は足の裏に付いた砂を陸は机の下のパイプで削り落とす。

自分からこうも簡単に離れていく。 あっさりと零れていく。

知らなかった。 オレが確かな毎日だと思ってたものは、こんな砂粒みたいに呆気ないものだったなんて。

「おーい、陸。 お前、成績どうだった？」

「……………」

いつの間にか、放課後になっていたらしい。

生徒のほとんどは教室からいなくなっていた。

まるで大事なネジが抜けて壊れてしまった時計だ、と陸はぼんやりと思った。

時間がとても早く。 そして、とてもとても遅く感じる。

ある時はすっぽりと抜け落ちている。

あの時はずっとぐるぐると繰り返される。

自分は五体満足なはずなのに、暗い牢獄に鎖で繋がれている気分だった。

イヤな時間だけがずっと脳裏を占める。

「むう。 これで三回目の問いかけになるけど、ワンスモアチャレンジ。

二度あることは三度あるになるか。 三度目の正直となるか。 レッツ。

おい、陸。 お前成績どうだった？ ダンマリだと勝手に見ちまうぞ」

「……………ん」

悠也が陸の隣の席に腰掛けていた。

机の上に置いてあった通知表を陸は黙って悠也に押し付ける。

叱られることも、誉められることもない紙切れなんて、

彼にはもうなんの価値もなかったから。

「……………うわっ。 あはは。 なんだ、この小学校を上回る偏り具合。

美術、音楽、体育、家庭科。

実技はオール5と完璧超人なのに、どおして君のオムツは主要五科目じゃ残念なんだ。

つか1なんてマジであったのか。 陸、これは新たなレジエンドですぞ」

「……………」

ほら。

「…よ、よし。 こうゆう時こそ気晴らしだ。

せっかくの夏休みだし今から遊びに行こうぜ。

駅前のゲーセン。 リニューアルオープンとかなんとかでワンプレイ五十円でできるそうだから、せっかくだし行っって見ねえか？」

「……………」

「む、むう。 まったく反応しないとは陸くんもアダルトの階段を上がったのか。 …… ああ、階段といえば商店街にあった例の長い

階段の神社。

大雨ん時にブレイクしたそうだけ。

昔埋めたタイムカプセルも気になるし、ちよくら見に行っってみね

えか」

「……………」

「う。 や、やっぱここは部活だよな。 あのムツサイ防具が俺たちを待ってるもんな。 まったく君も生真面目だねえ。」

「しゃあない。 臭いが染みついちまう前に、とつとレギュラーの座奪っちまおうぜ」

「…………… 今日通夜」

憎らしいほど陽気な悠也の声に、陸は鬱陶しそうに短く返す。
あれほど好きだった剣道も、今ではなにが楽しかったのかまるでわからない。
棒切れを振り回しているだけで、結局なにも護れなかったじゃねえか。

「そ、そつか。 じゃあしゃあねえな。」

… 陸、あんまり落ち込むなよ。 俺も…」

「—— ああもう、うるさい。 ほっといてくれよ。」

悠也には関係ねえだろ」

「——っ！」

なにもかも壊れればいい。

そんな気持ちで机を思いつきり叩きつけ、陸は立ち上がった。

その時、陸は初めて自分の友人の顔を見た。

悠也は泣きそうだった。

陽気な仮面が割れたような、ぎこちない笑みだった。

「—— ああもう、ガッテム！ やめだ、やめだっ。」

いい加減にしろよ、お前！ 一日経ったら自分の苗字の漢字さえ間違えちまうようなノー天気や口ウが似合わねえんだよ。

せつかく俺が心配してやってるのにその態度はねえじゃんか」

しかし、そんな表情は錯覚だったとばかりに悠也は目付きを鋭くし、語気を荒げる。

「だれも心配してくれなんて頼んでねえよ」

自然、陸と悠也は胸倉を掴みあい、睨みあった。

陸と悠也。既に二人以外誰もいなくなった教室で彼らは睨みあった。

「はんつ、だいたいよう。聞いたぜ。あの事故、馬鹿みたいに溺れたお前を助けようとして紫織さんは死んだんだって」

「……。なにが言いたい？」

ぎちりっ、という歯が強く擦れる音がどこかで聞こえた。

初めて悠也から姉が死んだことについて触れられたのに、陸の声は冷たく平坦だった。

ただ、爪が皮膚に深く食い込んだ。

「だったら、お前が紫織さんを殺したようなもんじゃん？」

なのに八つ当たりなんてすんじゃねえよ。

みつともないったらありやしねえぜ」

その鋭い言葉に、元々我慢強いほうではない陸は簡単に弾けとんだ。白くなるほど握り締められていた陸の左の拳が唸るように動く。

「……うる…さいっ、黙れ！」

そんなコト、オマエに言われなくてもわかってるっ。

オマエにバカにされるまでもなく、バカなオレでもわかってるん

だ！

でもな、オマエなんかオレの姉ちゃんのいったいなにがわかるっていうんだよっ！！」

激情と共に、悠也の右頬に陸の拳が炸裂した。

たった一度腕を振りかぶっただけなのに、陸の呼吸は乱れきっていた。

欠けた歯を悪態と共に吐き捨て、吹き飛ばされた悠也は起き上がる。

その瞳には陸と同じくやり場のない激情が渦巻いている。

「——っ！ わかるかよ、この馬鹿。

なんにもわからなくさせたのはお前じゃんか」

悠也の言葉は正しすぎて、陸はイヤになる。現実的で夢も希望もない。

でも、こんな喧嘩を鮮やかにとめてくれる人はもういない。

ずっとずっといない。

そのことを認めてしまうことのほうが陸はもっとイヤだった。

だから今は目の前にいる小憎らしい男を泣かせることだけを陸は単純に考える。すべてを忘れたいがために猛然と体を動かす。

がむしゃらに振るった拳はただ痛かった。

……そんなことさえ、

すぐに彼女が喧嘩をとめてくれていたから、陸は久しく忘れていた。

第三話 起・遭遇

「……久遠院も大変だろうから今回はこれで終わりにしとく。

五十嵐も友達なんだ、こんな時まで喧嘩しないように」

「……」

「すいやせんした」

「……ふう。二人ともくれぐれも気をつけて帰るんだぞ」

一人分だけの反省文の書かれた用紙を手に、担任は生徒指導室を後にした。

陸と悠也が教室で喧嘩していたのを担任に見えられ、今まで説教されたのだ。

二人が開放されたところには、時刻は気温が最も高い時間になっていた。

冷房のない密室に長時間いた彼らの額には、玉のように汗が浮かんでいる。

「ったく。ゴリゾーのヤツぐちぐちとしつけえんだよ。」

先に保健室に連れてくもんじゃないか、ノーマルのに」

担任が狭い指導室を出て行った直後、反省の色もなく悠也は悪態を毒づいた。

右目に大きな青あざを作り、唇は切れ、血が汗と混ざって既に消毒液を塗ったようになっていようなひどい有り様な顔の割には飄々としていた。

「……」

対して陸は、指導中終始無言だった。 否。 外界に無反応だった。

悠也に唯一殴られた左頬を時折思い出したように汗と共に擦り、空をぼんやりと見上げていた。

密閉され、差し込む強い陽射しでもやつとした空気の感触。安っぽい光沢の黒皮のソファー！。

青すぎる大きな観葉植物。

なにも置かれていないガラス張りの机。

物はあっても無個性な空間の中、なお陸は空虚だった。

悠也は紫織を失った陸にどう接すればいいかまったくわからなかった。

思いだけが空回り。

このままだと陸までいなくなってしまういそうで悠也は怖かった。

「さあて。 腹も減ったし帰るかねえ」

何気ない別れの挨拶が永遠の別れになるような気がして言えず、そう独り言のように呟き、威勢だけよく悠也は立ち上がった。

「……悠也。 さつきは悪かった」

そんな悠也に窓の方を向いたまま陸は声をかけた。

数時間ぶりに聞いた声だった。

もう聞くことはないかもしれないとも思った声だった。

「いんにゃ。 俺もさすがに少し言いすぎだった。 だから今回はドローだ」

- と - をかけたら+になることを鮮やかに証明してみせたチンパンジーでも見たかのように悠也は目を大きく見開いたが、すぐに嬉しそうに破顔した。

そんな悠也の顔が窓に反射して陸にはうつすらと見えた。

「あのさ。明日学校で纏まって告別式に行くってことになってっけど、

俺も今日の通夜にも行かせてもらっていいか？」

「……。おう。その顔を見せて姉ちゃんを笑わせてやってくれ」

陸は振り返り、今度は悠也の顔を直接見て軽口を叩いた。

「おいこら、お前。このイケメンフェイスを台無しにしたのちゃんと反省してんのか？ マジでいてえんだぞ」

本当に傷に響くのか、悠也はしかめっ面で陸のことを窺めた。

「くふっ。オレは今のほうがパンダみたいで可愛いと思うけどな」

「な。お、お前まさかとは思うが。」

ずっと外向いてたのって実は俺の顔見ないためだったのか？」

「さあな」

ぎこちないけれど、悠也ひとのためといったニセモノだけど、

陸は事故から初めて笑えたと思う。

元々陸はあれこれと難しいことを考えるのは得意じゃないのだ。

ならば、塞ぎこむのはもうやめだ。それこそ“いつも元気いっぱいな陸くんが好きだ”と言っていた紫織に顔向けできないだろうから。

放課後から二時間以上経過した校舎にはほとんど生徒の影はない。置き忘れられた傘や内履き袋がぶら下がる、リノリウム張りの廊下。

グラウンドから部活動に勤しむ運動部の掛け声や、吹奏楽部の演奏の音。

そんな明るくもどこか物悲しさを漂わせる空間は、ほんの数日前までの楽しい日々を陸に懐古させた。

無理だった。悠也の手前では取り繕えたけど、ムリだった。

「——はあ」

用事があると言った悠也と別れた後、陸は悲痛な面持ちで俯いた。干からびかけたカタツムリのように重い動作で帰り支度を済ませ、陸は校舎を出た。

歩きたての赤子よりもおぼつかない足取り。

明日から夏休みだと言うのに、陸はこれっぽっちも心が踊らなかった。

なににもする気になれなかったし、なにをすればいいのかもわからなかった。

当然だ。

今まで陸の隣には常に紫織がいて、彼女を中心に世界は廻っていたのだから。

その軸がなくなった今の陸はただの抜け殻。

与えられた役割をそれでも以前と変わらずこなそうとする空しいボンコツだ。

深緑の濃い匂いを含んだ夏風が悲愴感を漂わせる陸の頬を通り過ぎた。

抱かれるように優しくそつと撫でる風に、陸は自分の姉の姿を幻視する。

「——あ」

そして、今いる場所に陸は気がついた。
この道だけは通りたくなかったのに、体が覚えている通りに勝手に
帰り道を選んでいたのだ。

滔々^{たうたう}と移ろう奔流にかかる八宝橋^{はっぽうきょう}。

あの日も姉ちゃんと一緒に歩んだはずの場所。
最期に姉ちゃんと言葉を交わしたはずの場所。

ただオレはなにも覚えてない。覚えている。

誰かを助けたかった。どうして？

誰かに助けられた。如何して？

誰かを助けられなかった。ドウシテ？

「——ぐっ」

眩暈がして、視界がぼやけた。

暴力的に襲ってきた吐き気に、陸は耐えるように口を押さえてうず
くまった。

グリーンのペンキが塗られた鉄柵に手をかけ、陸は浅い呼吸を繰り返す。

胃が痙攣し、激しい嘔吐感。

吐くものがないから、代わりに胃液が出てきた。

蒼白な顔。冷たいイヤな汗が止まらない。

車だけが、陸のそばをただ通り過ぎていく。

一分。 三分。 八分。 十五分。

陸は口の中の酸っぱいものをありったけぶちまけ、ようやく呼吸だけは落ち着いた。

しかし、額から溢れる脂汗がとまらずひどく気持ち悪い。

「——え？」

風に当たろうとにじむ視線をふと橋の下に向けたとき、川の縁に誰かいることに陸は気がついた。

花が供えられている場所で、独り人影が川面を見つめていた。

紫織が死んだ場所に、黒い影が幻のようにぼんやりと立っていた。

橋の上からは少々遠い上にチェックの黒い傘を日傘代わりに差していたため、

陸からは顔がよく見えない。

だが、華奢な体つきと黒のワンピースという服装から陸と同年か、もしくは少し上の女の子だろう。

暑い日差しが差し込む中、

身も心も魂までも凍り付いてしまいそうなほど白い肌だった。

死んでいるように鮮烈なまでの白さだった。

「あ——」

陸は目が奪われた。

呼吸も忘れ、体調も忘却し、黒い少女に釘付けになった。

夏なのに暑苦しく黒一色の服装をしていたためとか、

そこだけ別世界に切り離されたように幻想的な彼女の雰囲気吞まれたためとか、そんな下らない理由ではなくて……その者が持つている傘に陸は見覚えがあつたのだ。

「陸」

と。軽いクラクションが鳴るのと共に、錆びついたような低い声で名前が呼ばれた。

陸が振り返ると、目の前に停車した黒のセダンの窓から陸の父親――

久遠院愼一が顔を覗かせていた。

通夜のある今日まで会社に行っていたのか、愼一は折り目正しいス
ーツ姿だった。

「これから家に帰る。 車、乗ってくか？」

紫織が死んだ川辺で嘔吐を繰り返していた陸にかけるには、あまり
に配慮がなく平坦な言葉。

だが、真人間の愼一にとって、これがかけられる精一杯の優しい言
葉だった。

愼一の不器用な優しさを陸もわかっているのか、促されるまま車の
後部座席に座った。

「前、姉ちゃんが使ってた傘」

後ろ髪を引かれる思いで陸は窓から顔を出し、もう一度川辺を振り
返ったが、

白い人影は幽霊のように跡形もなく消えていた。

ただ。 発進した車の下にはマフラーから落ちた水滴が、
アスファルトに大きな水溜りを作っていた。

第四話 起・父親

深緑。 生命力溢れる濃い夏の景色が流れていく。 色あせて、おぼろに流れていく。

冷房の効いた車内と外は別世界だった。

陸が愼一の車に乗ったのは、小学四年生の頃、仙台の祖母の葬儀に行った時以来だった。

やめたはずのタバコの吸殻が車内用灰皿から溢れ、ヤニ臭かった。オヤジの母親が亡くなった時は、こうじゃなかった、と陸は思う。

無個性の、民間タクシーと呼んでも差し支えない清潔な車内だった。陸の他にもう一人、乗っていた。

あの頃から既に甲斐甲斐しく愼一の健康も気づかう紫織が、乗っていた。

ハンドルを握る愼一の腕は、寝たきりの少年のようにか細い。

… オヤジの体ってこんなに頼りなかったっけ。

陸はぼんやりと昔の父親の体格を思い出そうとして、顔さえろくに覚えていないことに軽いショックを受けた。 こんな風に姉の顔まで忘れてしまうのかと戦慄した。

ルームミラー越しに陸は今の愼一の顔を窺おうとして、視線が合った。

一秒。 二秒。 四秒。 愼一は何も言わず、視線を前に向けた。

ただ。 その隈のできた虚ろな目は無言で陸を批難しているようだった。

「——っ！ 何だよ。 言いたいことがあるならはつきり言えばいいじゃねえか。」

姉ちゃんじゃなくてオレが死んだほうがよかったって」

陸のその自虐的で衝動的な叫びに、ブレーキが悲鳴を上げた。暴力的に体が宙に投げ出されそうになる。

「陸——！ 二度とそんなコトを言うな」

それ以上に振り返った愼一から繰り出された張り手が痛かった。悠也に殴られた左頬より熱かった。力強かった。

「…たのむから、…たのむから。オマエまでいなくなったりしないでくれ。」

私をひとりにしないでくれ」

そして、愼一の絞り出すようにか細い哀切な声は泣いているように弱々しかった。

バカだ。つらいのはなにも自分だけじゃないのに、最低のことを言ってしまった、と陸は後悔する。

「…だったら安全運転心がけてくれよ。危うく車の外に放りだされるところだった」

父親との距離感がわからない、うまく謝れない自分が陸は嫌になる。言いなおそうとする前に、後ろの車からのクラクションが陸の意見を勝手に援護した。

「シートベルト、しておけ」

先ほどの激情が嘘のような仏頂面の愼一の言葉に、心の中でありがとうと陸は呟いた。

でも、そういうことはもっと早く言って欲しかった、と彼は思った。

もうちょっと仲良くして欲しいと常に言っていた姉ちゃんの前で喋って欲しかった。

そうすれば、もう少しオヤジに歩み寄れたかもしれないのに。仲のよい三人家族にはついになれなかった。もう男だけだ。

車に揺られながら、陸はぼんやりと考える。

拒絶する体を無視してなんとか思い出そうとする。

紫織のことを。あの日のことを。

七月二十二日。同じ中学生になって初めての姉の誕生日であって、中学生最後の誕生日であって、最低最悪の誕生日になってしまった日。

あの日。一体オレは姉ちゃんとなにを話していたのだろう。なにがあつたのだろう？
わからねえ。

去年と同じなら、いつものように校門の前でオレより早く待っていてくれた姉ちゃんに喜んで駆け寄っていったのだろう。

（小学校と中学校と学校が違っても必ず紫織は陸より先に待ち合わせの場所に待っていた）

姉ちゃんの誕生日なのにどんなケーキが食べたいかと逆にそれとなく聞かれて、買出しに出かける予定を立てていたはずだ。

そんな些細な、でも大切なことを陸は覚えていない。なにもかも忘れてしまっている。

……すべてが終わり水の滴る蒼白な顔しか覚えていない。

……赤い影が脳裏を掠める。

そもそもどうしてオレは川の中に入ったのか？

いくら考えても物事を単純にしか考えられない陸にはわからない。八宝橋は通学路だが、いくら暑いからって川に飛び込むほど陸も馬鹿ではないつもりだ。

ぼんやりとしている姉を護るために鍛えてはいたけど、決して命知らずではない。

ましてや、あの日は期末試験期間の初めから続いていた長雨で川は増水しきっていたはずだ。

どちらにせよ、死ぬほどのバカが死なずに、死ぬほどのお人よしが死んでしまったことだけは確かだった。

神さまなんて昔から——あの日から——ぜんぜん信じていなかったけど、そいつの頭は確実に腐ってやがる。

「——陸。着いたぞ」

陸を思考の淵から引き戻す錆びついた声。

その愼一の声に、決められた命令に従うロボットのように淡々と陸は車から降りた。

閑静な住宅街の一角に建つ陸の家は、昼間なのにお化け屋敷のようにひっそりとしている。

車のエンジン音よりも、セミの鳴き声の方がうるさい。

余計なもののない広いガレージにセミの死骸が転がっていた。

脆い、儚い、呆気ない命。

わからねえ。せつかく生まれたのに、どうして死なないといけなのだろう？

「ただいま」

待つものがない、男の声のみが反響する自宅に陸は入った。

紫織がいなくなる前と違い、6LDKの広い家の中は散らかっていて狭苦しかった。

葬儀の準備で慌しく、床に衣類や書類などが無秩序に放置されたままになっていたが、陸はとても片づける気になれなかった。

陸は普段から家の掃除や洗濯などの家事を率先して手伝っていたが、負担を減らしてあげたいと思っていた紫織がいなくなってからは、なにひとつ手につける気になれなかった。

そもそも気持ちが悪くということ自体希薄だった。

負の感情は陸に重い鎖となって巻き付き、身動きを取れなくした。

「……………」

紫織の聖域であった台所は更に酷い有様だった。

いつでも料理が作れるように清潔に片付けられていたのに、今では食い散らかされたカップラーメンの容器が流しにつかったままだった。小さな虫まで集っている。

でも、勝手がよくわからない上に、否が応でも紫織との楽しい日々が思い出され、とてもではないが陸は台所に長い時間いられなかった。

笑いの溢れる場所だったのに、そんな安らぎの地はもうずっと訪れない。

なにもかもオレのせいだ、と陸は自棄になって周囲に当り散らしたくなった。

先ほど慎一に殴られてなければ陸はきっとそうしていた。

このままではいけない、と陸はぼんやりと思った。

でもそれでも、とまったままならなんも考えないですむ。

それはなんて楽で、なんて……

「…情けねえ」

こんな時でさえ空腹を訴える腹の虫に陸は苦く口元を歪めた。
同時に、こんな時でも貪欲に生きようとする身体が頼もしくも感じ
だ。

冷蔵庫に残っていた食パンをバターも塗らずに陸はそのままかじり
付いた。

美味くも不味くもない。 特になんの味もなかった。

庭にある力キの木の影が家の中に差し込んでいた。

「そろそろ斎場に行くぞ」

腕時計を見た慎一がぼんやりと台所を眺めていた陸に声をかけた。

「……。 ちょっと待って。 片付けるから」

それを、理由をつけて陸は先延ばしにしようとした。

家をこのままにしておくのはダメだと思ったし、陸は紫織に会う勇
気がなかったのだ。

どの面を下げて会えばいいのかまるでわからなかった。 あまりに
も情けない。

「駄目だ。 帰ってからでいい。 陸は長男なんだから遅れるわけ
にはいかない」

手を引かれ、半ば強引に陸は車に乗せられた。

慎一のこうゆうところが陸は嫌いだった。

人の心がわからずユーザーの効かない堅物の性格のオヤジから、ど

うやれば姉ちゃんのような気配りの仙人のようなヤツが産まれたの
だろう？

どうやれば、オレのようなヤツが産まれるのだろう？

本当に同じ母親から産まれてきたのだろうか？

「…そういえば琴音おばさんとかは来るのか？」

「……。……。ああ」

「…そっか」

短い間。 ハンドルを右に切ってガレージから出た後、慎一の短く
返答した。

それに合わせるように陸は素っ気なく返して会話を切り上げた。

死んだ母の姉で伯母にあたる——久遠院^{くおんいん・ことね}琴音のことが陸は苦手だ
った。

その見かけによらず、オヤジと母さんは大恋愛の末の駆け落ち同然
の結婚だったらしく、母方の親戚とはあまり折り合いがよくなかつ
たのだ。

手の届かない遠くに行くよりは慎一が婿養子に入ることで一応決着
が付いたらしいが、三年前の父方の祖母の葬儀には最低限の人しか
来なかったことから、その関係は冷め切っていた。
できれば、陸は伯母と会いたくなかった。

第四話 起・父親（後書き）

あけましておめでとうございます。

ということでは今回は予約掲載という機能を使ってみて第四話投稿。

いやー。 便利なものです。 パソコン音痴なわたしにもなんとか使えていますよね？

閑話なども残っています。 まあとりあえずこれで起のパートは終了です。

感想などもらえると作者のモチベーションがあがるのでお待ちします。

閑話・一昨日（前書き）

うう。

改行がうまくできない。

o r z

閑話・一昨日

その日は朝から雨が降っていた。ジメジメと蒸し暑い。そんな中、小さな古本屋の軒先でぼんやりと“わたし”は雨宿りしていた。

曰く。雨とは天から零れ落ちた神さまの涙だと言う。

確かにその通りだろう。

何があっても無慈悲に振り続けるその様は彼らの荒ぶる性質を現し、天から雫を落とすだけで何もしてくれないその様は、ただ悠然と坐すだけの彼らの本質を表しているのだから。

……そんなカビが生えてきそうな狂信者のような考えが浮かぶほどこの長雨にはウンザリしていた。

憂鬱な心の色と同じような鉛色の曇天の空は日の光がまったく差し込まず、既に夕暮れ時になってしまったように周囲は薄暗かった。

前を通り過ぎた車が豪快に泥水を撥ねた。

元より雨除けには頼りない狭い軒先だったのだ。

おかげで“わたし”は全身濡れ鼠だった。

……お似合いなのかもしれない。

それでもまだここに留まり雨を凌いだほうがましだ。

今の“わたし”にはどこにも行くあてがないのだから。

「うわー。さっきよりすごい雨ー。滝みたいで気持ちいいなー」

古本屋から出てきた“そいつ”は、信じられないことをのんびりと言ってくれた。

雨垂れの中、人工の大輪の花が咲く。 チェックの黒い傘が嬉しそ

うに回る。

蒼穹の空を見上げるように本当に楽しそうに、雨に濡れることも構わないで傘の隙間から天を仰ぎ、“そいつ”は柔らかに微笑んでいた。

笑顔の似合う人だった。

そんな変なヤツと目が合った。

「あれー？ どうしたのー？ あなたひとりー？」

“わたし”は雨が嫌いだ。

嫌いな水に濡れるから。

そして、動けない“わたし”は人から憐憫の目を向けられるから。とても相手にする気がなれず、灰色の空を見上げた。

雨が落ちてくる。天が落ちてくる。誰かの涙が落ちてくる。

でもほら。高みから憐れむだけで何もしてくれない。だから報われない。

「——？」

不意に涙が止まった。雨が止んだ。

……変わった人だ。

“そいつ”は屈んで“わたし”に傘を差し出していた。自分が濡れることも厭わずに。

「もう、めーだよー。せっかくこんなに可愛いのに濡れたままなんてー」

“そいつ”はそう言って有無を言わずハンカチで“わたし”の体を拭き始めた。

……暇な人だ。でも、こんな人が神さまなら世界はもっと穏やか

なのに、と、半ば本気でそんな莫迦みたいなことを“わたし”は思った。

雨垂れは穏やかに世界を潤す。

「まだ居やがったのか。 そいつ」

どこか心地よい静謐な世界を邪魔するように古本屋の店主が顔を出した。

いや。 邪魔者は“わたし”か。

「あれー。 おじさんこの子知ってるのー？」

「ああ。 最近ここらをうろついてるんだ。

どっか行ってくれないかねえ。 商売の邪魔だよ」

「えー。 可愛いし、福を招きそうだよー？」

「まさか。 愛想悪いし、そんな赤い目のやつ。 気味が悪いだけだろ」

……そろそろ立ち去ろう。

この地に縛られるだけの謂われはもうないのだから。

弱くて惨めであることは、蔑みと哀れみの対象であることは、やはり耐え難い恥辱だから。 そう思って“わたし”は立ち上がろうとしたが、

「もう、おじさんー。 そんなこと言っちゃダメですよー」

“そいつ”は垂れ目を吊り上げて指を突き出した。

口調は柔らかい。 だがどうやら本気で怒っているようだった。

……おかしな人だ。

そこまでの縁もないのに、どうして真剣になれるのだろう。

「すごく綺麗じゃない。バラの花びらみたいでわたしは好きだけどな」

“わたし”の頭を勝手にわしゃわしゃと撫でて、“そいつ”はそう微笑む。

雲の隙間から差し込む太陽のような暖かい笑顔で。とても笑顔の似合う少女だった。

「はあ。紫織ちゃんの優しさには敵わないよ」

店主は見当違いのことを言う。

己の是と思うことをそのまま為せるこの娘は強いのだ。敬われるのではなく、憐れまれるのでもなく、畏れられるのでもなく、こんな風に対等な立場で接されたのは久しぶりだった。それにこの娘は…

雨が好きらしい“そいつ”は、濡れながら去っていった。

傘が力強く雨を弾く音が耳に残る。

わたしの元にはチェックの黒い傘。

“わたし”は雨が嫌いだ。

嫌いな水に濡れるから。

——そして動けない“わたし”は、数奇な因果に絡めとられることになるから。

「——、あまてらす。」

分厚い雲から光が差し込み、雨の代わりに蝉時雨が煩く鳴いていた。ただ——煩く泣いていた。

“ うそつき ”

それはひとつの心残り。

だから “ わたし ” はこの場所から動いてみることにした。

閑話・一昨日（後書き）

第五話 承・少女（前書き）

彼の追憶？

いち、にい、さん。 ひとつ、ふたつ、みつつ。
それよりおいしいものはたくさん。

幼いころはそれだけで世界は十分だった。

たくさんのかいだんをのぼって。

たくさんの木々のあいだを通りぬけて。

きょうもそこで、ばんばん、と手を合わせた。

たくさん誇らしくて。 たくさん楽しくて。 たくさん嬉しかった。

あれからたくさん手を合わせた。

幼い自分は母さんのためにそうした。

そいつはすごいヤツだと教えてもらったから。

手を合わせたあと、静かに頭を下げたのだ。

けれど、そんな幼い期待はあっけなく打ち碎かれることになる。

——ひとつたりない。

ずっとみつつだと思っていたものは自分を含めてよつつだったのだ。
だからよつつめがなくなったとき、どうすればいいか自分にはまっ
たくわからなかった。

第五話 承・少女

——可愛そうに……——

——どうしてあの娘が……——

街路樹の日陰で涼めるぐらいには影が伸びていた。

沈黙。車の音だけがウルサイ。

アクセル音やウィンカーの音などが静寂な車内に響き、意味のないはずの音が陸には呪詛のように聞こえたところ。

ようやく通夜の会場——北石動斎場^{きたいするきやうじやう}に車が着いた。

空気そのものが停滞していて、世界から忘れ去られてしまったような閑散とした場所。

いくら学生の正装が学生服だからといって、陸はこんな日常的な服装は場違いのような気がした。

七時に開かれる通夜にはまだ二時間強の時間の余裕がある。

こんな場所になにもせずにそれだけの時間いるのはつらい、と陸は思った。

それでも、既に何人かの陸の親族は黒い服に身を包み、遺族の待合室に集まっていた。

それが陸にとつて目を見開くほど意外だった。

そのほとんどが前は最後まで来なかったのに。

わからねえ。血が繋がってるから家族なのだろう？

それとも大切だから家族なのだろうか？

「このたびはたいへんお気の毒でございました」

お悔やみの言葉が淡々と交わされる。

大人の会話は陸にはよくわからない。

ただ。姉ちゃんの通夜には来てくれてよかった。
これ以上、大切な人の悲しそうな顔を見ないですんで本当によかった、と陸は安堵する。

立てかけられた古い時計の長針の指す数字が変わることに人が集まってきた。

遺族の待合室に待つのはほとんどが母方の親戚だ。

談笑し、思い思い過ごしていた。

父方の親戚は面倒ごとを避けてか待合室に入ってこない。

酷い温度差。前と違って賑やかな通夜になるだろう。

時計の針が五時を指す頃、久遠院琴音がやって来た。

黒い喪服の似合う妙齡の美女だった。

皺やシミがなく、とても四十代半ばだとは思えないほどの若々しく瑞々しい肌。

朱色の女性として理想的な口元や整った鼻筋などは陸が写真で見た母親に似ていた。

だけど徹底的に違った。

泣いたことがないのではないかと思えるほど冷たい瞳。

笑ったことがないのではないかと思えるほど鋭い眼差し。

目元だけを切り抜けば、凶悪殺人犯の眼光が霞んで見えるほどだ。

実際。彼女に会うと、昔の陸はすぐに泣き出してしまっていたらしい。

久遠院の人にはなぜか冷たい人が多かった。

古く格式のある家柄だからだろうか。

「ほら、男の子なんだし元気出して。

陸くんがそんな顔していたら紫織ちゃんも心配で起きてきちゃうわよ」

琴音は慎一に黙礼を済ませた後、そんな見かけに似合わない優しい言葉を陸にかけてきた。

「——はい」

ウソだ。死人は生き返ったりしない。生き返るならとつくに姉ちゃんを苦勞させた母さんが生き返ってるはずだ。

あれだけ紫織を可愛がっていた琴音に他人を気づかえるゆとりがあるのが、陸は嫌だった。

自分よりも知らない癖に、紫織のことを語られるのが陸はイヤだった。

姉ちゃんが大好きだった母さんのお姉さんなのだ。きつと悪い人じゃない。

でも陸はこの人とは根本的に反りが合わず、なにもかも否定的に捉えてしまう。

その全てを見透かしたような冷徹な眼で見られたら、まるで獰猛な爬虫類に睨まれたように上手く動けなくなってしまう。

子供のいない琴音に養子に出される話が母さんの死んだ頃に上がっていたなんて、考えただけでも陸は寒気がした。

これ以上なにか言葉をかけられる前に、トイレに行くと言って陸は待合室を後にした。

斎場にはいくつもの盛り花が送られていて、お花屋さんのようだった。

この花の数だけ姉ちゃんは好かれていたんだ。

この花の数だけオレは悲しみを与えたんだ。

いっそ狂ってしまえば気が楽なのに、理性はなくならない。

オレにはそんなことは許されないから。

なかなか遺族の待合室に戻る気になれず、あてもなく斎場内を陸はうろつく。

「——ん。 じっは…」

独特の線香の匂いに陸は顔を上げた。

いつの間にか斎場の中央、祭壇の間に陸は迷い込んでしまっていた。

部屋いっぱい整然と並べられた座席。 中央で柔らかく微笑む遺影。

制服姿の紫織が縁の中で永遠に優しく微笑んでいる。

「——っ！」

陸は眩暈と共に声もなく呻いた。

なにも変わらない姉ちゃんがいる所よりオヤジやおばさんのいる場所の方がいい。

少しずつ彼女の死を受け入れ始めている。

今まで考えるまでもなかったはずの選択の答えが逆になってしまっていることに軽い恐怖を覚え、陸は逃げるように祭壇の間を後にしようとした。

「…ふしぎ。 とてもおぼれ死んだよーには見えないわね。

水をたくさん飲んで苦しかったでしょうに………どーしてこんなおだやかに眠ってるよーな顔ができるのかしら？

やっぱりモータルの自己満足ってわからないな」

不意に。陸の背中から清廉な鈴の音と共に不思議な声がした。淡々と、物事の真実のみを告げるような冷徹で平坦な声音。それなのに、不思議を聞く者を引き付ける蟲惑的で甘美な声の囁きだった。

「え？」

通夜まで時間があつた。当然まだそこに人がいるはずがない。

……いや、いた。

祭壇の前に棺が安置されている。

紫織の骸が安置されている。

その前に遺体の様子を窺うようにぼんやりと人影が立っていた。

先刻は明らかにいなかったのに、祭壇の間に入るには今陸のいる場所から入るほかにはずなのに、幽霊のように、されど確かに白い少女がいた。

彼女の纖手に握られた見覚えのある傘が、無意識のうちに一歩後ずさつた陸の足を引きとめる。間違いない。川で見たあいつだ。

「おい、オマエいつたい誰だ？ 姉ちゃんの知り合いか？」

通夜に訪れた者に対してあまりに不適切な不躰な質問。

そんな言葉が陸から漏れるほど、彼女の存在は異常だった。

現実離れた少女は纖手に握られた傘を億劫そうに狂る狂ると回し、ゆっくり振り向いた。

目が合った。無感動の紅い視線。

ぼんやりとやる気がなく眠そうな眼差しなのに、陸は身が凍った。

伯母の目が獰猛な爬虫類なら、この目は玲瓏な劔。ツバキ

同じ生物でさえない。

人の皮を被っているだけで、本当は得体の知れないカイツを前にしているような、そんなどうしようもない不安が唐突に陸を襲った。

「重畳。^{ちやうじやう}」

ちゃんとわきまえてるよね」

眼光に当てられ縮こまった陸の様子が満足なのか、少女は嫣然と口元を緩めた。威圧的な空気が解ける。

その言葉で陸は彼女の姿をきちんと見る余裕ができた。不思議と子供っぽさを感じさせない上品な黒のワンピースと動きやすそうな服装。

よほど気に入っているのか室内なのに黒い傘を右手に握ったままだ。そして——幻のように綺麗な女の子だった。

否、女の子と呼ぶには余りに妖しすぎた。

黒い衣服とは対照的な、空から舞い降りた粉雪がそのまま肌になったような染み一つないきめ細やかな白い肌。御伽噺の中にしかないような美しい紅玉の瞳。

伏せれば黄昏の中でも影を落としそうな長いまつ毛。

職人が墨を引いたような優美な眉。

外人のように程よい高さのある小さな鼻梁。

桜の花弁のような淡く柔らかそうな唇。

たおやかな女性的な曲線を残す華奢な肢体。

十代半ばの女性の妖艶さと少女の無垢さが絶妙なバランスで合わさった造詣。

稀代の芸術家が生涯を賭しても出会えるかどうかといった幽玄の美を持つ少女だった。

でもなにより、その髪が陸の目を見はった。

金属のような不思議な光沢を放つ黒銀の髪の艶もそうだったが、純粹に信じられないほど長かったのだ。髪の大半を鈴の付いた髪留めでアップに纏めているのに、それでも黒銀の髪は足元までかかり、

床を引きずりそうだった。
人が生まれてからずっと伸ばし続けても果たしてここまで長くなる
ものなのか？

——なら君にとって世界は……——

冷たく泣いている風。 冷たく泣いている空。
いや、泣いていたのは……

「——オマ…エ…？」

「…でも、同時にぶざま。」

通夜はもともと愛しい人の蘇生をねがい、夜通し死者の生前の徳
をたたえ、宴を開き、酒を飲み交わし、舞いをおどり、夜をてっし
て祈り続けたのがゆらいなのよ。

しょーねんまでそんな様じゃできることもできないじゃない」

不思議な声だった。

性別がまだはつきりしない幼い童のように舌足らずの口調ながら、
どこか古風な言い回し。

感情の起伏のない、鏡が音を反射したような平淡な声。
なのに、どうしてこんなにも耳朵に響き、胸をざわつかせるのだろ
う？

興味を失ったように不思議な少女が混乱する陸の傍を通り過ぎよう
とした。

清廉な鈴の音と共に長い長すぎる髪が彼女の後を従う。

「ちょ、待ってくれ。その傘どこで…」

白い少女の手を掴む前に、陸の右ポケットが震え音楽が鳴った。場違いに爽やかな音楽は陸のお気に入りの剣士アニメのオープニングソングだ。

悠也からのメールだった。

——通夜ってどんな服装？——

返事をせず電源を切るついでに陸は縁も切りたくなった。

白い少女は陸が目を放した隙に、またしても幻のように跡形もなく消えていた。

「ああもう、くそつ。なんなんだよ、あいつ？」

苛立たしげな陸の声だけが空しく部屋を反響する。

第五話 承・少女（後書き）

というわけで、どなたも待ってないかと思いますが承のお話がスタートです。

少し誤字などを修正しました。 本文の大まかな変更はありません。今回の話は謎の少女との二度目の遭遇になります。

彼女の目的や正体については今後の展開にご期待ください。
シリアスももう少し続きます。

…

……

………感想欲しいなあ；w；

第六話 承・葬儀（前書き）

…
うう。
うまく心理描写ができる文才が欲しい。

第六話 承・葬儀

またもや幻のように消えてしまった謎の少女。

彼女に紫織のことを問いたただすため、陸はしばらく斎場内を探し回ったが、初めから存在などしていなかったかように、その姿は影も形も見当たらなかった。

あれほど特徴的な姿なのに、見かけた人さえ皆無だった。

「……まさかオレだけに見える幽霊？　姉ちゃんでもないヤツの？　まさか」

陸は鼻で笑い飛ばしたかったが、斎場の静謐な雰囲気は彼の常識を揺るがした。

どうしてオレはこんなにも見ず知らずのあの少女に執着するのだろうか。

なにがオレをこれほどまでに引きつけるのだろう。

姉ちゃんの傘を持っていたから？

あの謎めいた言葉が気になったから？

それとも——ガムシヤラに行動することですべてを忘れてしまいたいから？

……おそらく、どれでもあつてどれでもない。

ぴったりと当てはまる理由が今はない。

説明が苦手な陸には自分の行動をつまく説明することができなかった。

よく理由がわからないまま、胸に巣くう混沌とした衝動が陸の体を勝手に突き動かした。

「——ああくそつ。わけわかんねえよ」

もしかしたら自分は、紫織を失ったショックでとくに狂ってしまったのか。

どれだけ親類に尋ねまわっても不審げに、もしくは気の毒げに見えるだけ。

とりあえず陸は遺族の待合室に戻ることにした。

……白い少女は当然いない。

代わりに僧侶が到着し、喪主の愼一と通夜の段取りについて話していた。

どうやら陸は接客係を任されたらしい。

弔問客が来るまで時間に余裕があるからちよいどいい。

「あの、琴音おばさん。うちの親戚に同年か少し上ぐらいの子っていますか？」

陸は思い切って苦手な琴音にも尋ねてみることにした。

他の人が知らなくても、女尊男卑である久遠院の一族の中でも宗家のまとめ役の彼女なら、なにか知っていることがあるかもしれないと思ったからだ。

「？ 今日通夜に来るのはみんな大人ばかりだけど、どうかしたの？」

「……。 い、いや。 誰か話相手がいないかなって思いました」

本当にいたかもわからない謎の少女のことをどう聞けばいいかわからず、とつさに陸は言いつくろった。状況が悪かったり、苦手な人が前だったりすると陸は不思議と頭が回った。

悪餓鬼らしく昔から悪知恵だけは働くのだ。

「ふーん？　そう。　なら、私でよかったら陸くんの話聞くわよ」
「あ…え…」

ただ、悪知恵の浅知恵である以上、働いても碌なものではなかったが。

「おばさんじゃちょっと年が離れすぎてるけど、だからこそ話せることもあるんじゃないかしら？」

悲愁を漂わせる淡い苦笑と共に琴音は陸の隣に立った。

自分に子供がいなかったからか、琴音は慎一と違い、陸たち子供には親身に接していた。

姉ちゃんもいい人だと言っていたのだ。

琴音おばさんは悪い人じゃない…と陸も思う。

（紫織はほぼ誰でもいい人と評価したので、この点だけは信頼がなかった）

だが、長年の先入観と言葉とは裏腹の冷徹な眼差しが陸をためらわせた。

……本当に、おばさんよりも怖い目つきだったのに、どうしてあんなヤツと関わろうとしたんだろう？

妙な熱が冷めてくるのを陸は感じた。

かわりに別の思いが胸にこみ上げてきた。

これまで胸の奥に押しとどめていた想いが、堪えきれずあふれ始めた。

「……………」

あれだけ苦手だったのに、気づけば、陸は琴音に訥々と胸の思いを打ち明けていた。

昨日まであんなに元気だったのに、誕生日を楽しみにしていたのに、オレのせいで姉ちゃんは今もう二度と微笑んでくれなくなってしまうた。

自分が許せない。自分が生きていることが許せない。

ドウシテ、こんなことになってしまったのか。

ドウシテ、オレはなにも覚えていないのか。

ドウシテ、姉ちゃんは死なないといけなかったのか。

…ドウシテ…ドウシテ…ドウシテ

当然琴音が陸の訴えの答えを出してくれるわけではない。

でも彼女は黙って、ただ静かに聞いてくれた。

気が付くと声は震え、陸の頬に止めどなく涙が伝っていた。

「ほら、陸くんも男の子でしょう。もう泣いたらだめよ。陸くんが紫織ちゃんを思い出すたびに悲しくなっていたら、きっと紫織ちゃんも悲しくて安らかに眠れないわよ」

無地の黒いハンカチを取り出し、琴音は陸の頬を拭った。

「——はい」

歪んだ顔をハンカチで隠し、陸は鼻を吸った。

でもその言葉が本当なら、ずっと悲しい顔のままでいいと陸は生地に顔を埋めたまま不謹慎にも思った。

「よろしい。じゃあお通夜では悲しいかもしれないけど、久遠院の人間として恥ずかしくないように、弔問客に対しては毅然とした態度で臨みましょうね」

「……はい」

琴音は未熟な男を叱咤する厳格な眼差しで、それでも我が子を慰めるようにそつと陸の頭を触れる。

そんな名家の体裁を重んじる厳しい言葉がその手の温もりとともに陸に安心感をもたらす。

だつて厳しいこの人がオレにただ優しい言葉をはいたら、それこそ姉ちゃんがもういないっていうことを、致命的なまでに受け入れざるをえないから。

……ほんと、ばつかじゃねえの。

夕刻。

黄昏。

誰彼^{たそがれ}。

夏の暑い日差しも、六時半を過ぎるとずいぶん和らいできた。

それでも黄金色の輝きは世界を紅く染め上げ、蒸し暑かった。

そんな中、暑そうな黒い服を着た人たちが北石動斎場に集まりだす。逆光を浴び、影法師のように顔がわからない。

のっぺらぼうのように無表情で、なにもわからない。

そんな中、一人だけ異質な存在がやって来た。悠也だ。

白い眼帯付きの腫れぼったい顔の彼に周囲は眉を顰めたが、誰も咎めなかった。

「お——。う……。え、えっと。このたびはほんとに御愁傷様でした」

陸を見かけるとなにか言いたそうにむつと悠也は口を開きかけたが、場を弁えて周囲に倣った定例の言葉を告げただけだった。

周りの雰囲気は吞まれ、ぎこちない動きで祭壇の間に入っていく。

さらに学校指定の紺のセーラー服を喪服に、女子生徒数人が固まってやってきた。

傍にスーツ姿の教員もいる。

何度か陸も顔を見たことがある、紫織のクラスメイトと担任だ。視線が合うと、軽く黙礼をされた。

「……………」

ただ。紫織と仲が良く、家にも何度も遊びに来たこともあった彼女の友人の一人は、陸をじっと見続けた。

虚ろで、暗くて、冷たく、濁った瞳。

姉ちゃんを殺したことを暗に批難しているというのはきつとこんな目だ、と陸は思った。

まるで生気が感じられないのは同じだけど、悠也やオヤジの目付きとはぜんぜん違う。

他人の感情の変化に疎い陸でさえわかってしまうほど、その目は悲しみに満ちていた。

——それはきつと錯覚。

オレにはそんな視線を向けられる資格さえない。

そんなこと、誰よりもわかってるんだから。

これまでの彼女の頑張りも、これからの彼女の未来もなにもかも、なにもかも台無しにしたのはオレなんだから。

……ほんと、ばっかじゃねえの。

弔問客で祭壇の間の席が埋められていく。

紫織を偲ぶもので席が埋められていく。

そうして僧侶が祭壇の前に立ち、いよいよ通夜が始まった。

前から順番に焼香が上げられ、死者の冥福を祈って経が読まれる。時折声を押し殺すもの。

無言で肩を震わせるもの。

他人のように冷静に見えるもの。

同じ目的のために集まり、同じ人物を偲んでいるのに本当に様々なものがいた。

先ほだあれだけ泣いたためだろうか。

そんな中、陸は不思議と涙も出ず冷静だった。

周囲を見渡す余裕さえあった。

……あの不思議な白い少女はいない。

——オレがそんな様じゃできることもできない？

ただ。去り際、彼女が残した言葉が陸の耳に残った。

あのわけのわかんないヤツはいつたいなにができると言いたかったんだろう？

……わからねえよ。死とは絶対だ。どれだけ姉ちゃんが苦勞していても母さんは帰ってきてくれなかったのと同じぐらい絶対のものなんだ。

それを前にできることなんてあるはずがない。

だから、これはもうじき覚める悪夢なんだと陸は思いこみたかった。

せめてそんな淡い幻想を心のどこかで抱きたかった。

あれだけ泣いたのに目頭からまだ熱くなってくる。

だって姉ちゃんのはのんびり屋の癖に、オレがちよつとでも困っていたらすぐに飛んで駆けつけるような——そんなバカみたいにお人よしなヤツなんだ。

だからみんなが泣いてたら、案外“あれれー？ みんなどうした

のー”と心配げな顔で、ひよっこりと起きてくるに決まってるんだ。

——だから。だから早く目、開けてくれよ。

今ならまだ怒らないでやるから、頼むよ。

「ほんと、ばつかじゃねえの。なんで…。なんで…」

そんな陸の淡い願いは叶うことなく、ただ、時間だけが無常に過ぎていく。

「——本日はお暑い中、娘紫織のためにご弔問においでいただき、まことにありがとうございました。何しろ突然のことで、私どももまだ受け入れがたく、混乱しているというのが実情でございます。紫織の十五回目の誕生日に水難事故に遭うとは誰が想像できたでしょうか」

一時間あまりの僧侶の読経後、喪主の慎一が通夜に訪れた者たちに挨拶をした。

……やめて欲しかった。

慎一はどうやら紫織が弟の陸を助けるために川に飛び込んだ結果、おぼれたらしいということを包み隠さず話した。

弟思いな彼女らしい最期だったと誇らしげに語った。

「——思えば私は仕事一筋で家庭のことは紫織に任せきりで、中学生ながら大変な思いをさせてしまいました。

満足に年頃の少女らしいこともやらせてあげられず、最期の瞬間さえ私に仕事に行っていて、息もできずに苦しむ紫織を助けてやれなかったのが心残りでした」

その錆びた声は障子紙のように簡単に破けてしまいそうな張りつめた気丈さだった。

…… やめて欲しかった。

今頃は先立つた妻と天国で再会し、案外のんびりと暮らしているそんな気がする。

もしかしたら、甲斐性ない男二人を心配して帰ってきてくれるような気さえする。

そんな未練の言葉を疲れきった眼差しで慎一は周囲を見渡ししながら語り、

「—— お聞き苦しいことを申し上げて失礼しました。

今日は紫織の供養のため、ささやかではございますが、隣の部屋にお食事を用意させていただきました。どうぞ、遠慮なくお召し上がりください。

故人と最後のひとときをお過ごしただけだと存じます」

そう真人間らしい型どおりの言葉で慎一は締めくくった。

…… やめて欲しかった。

だから、一つの式が終わった。

これでまた一つ紫織の死が確かなものとなった。

それなのに、陸は通夜が終わっても未練を断ち切れなかった。

ただ、立ち上る焼香の残煙が物悲しそうになびいていた。

第六話 承・葬儀（後書き）

長々と駄文が続きましたがシリ阿斯な展開はそろそろ終わり。
これからもうまくまとめられない駄文が続きそうですが、できるか
ぎり上手くなるよう精進しますのでお付き合い頂けたら幸いです。

第七話 承・月鏡

なびく霞の中に、まるで誰かの微笑みに似た儚い月が朧に蒼く浮かんでいた。

自動車。 街灯。 建物。

タクシーに揺られ、夜の景色は刻々と流れていく。でも、月だけが変わらず静かに付き従ってくれた。誰かを慰めるようにずっといつしよにいてくれた。そんな勘違いを抱いてしまうほど今夜の月明かりは優しかった。優しすぎた。

「着きましたよ」

事務的な運転手の声に陸は視線を夜空から落とす。

陸は慎一から渡されたお金を手渡し、タクシーから降りた。

大人たちばかりの空気に馴染めず、また食欲もなかったので通夜振る舞いの席から先に帰らせてもらったのだ。

「ただいま」

誰もいるはずがないのに、決められた習慣に従って陸は家に入った。

家の中は暗闇と共に静まり返っていた。

人肌のぬくもりもなく、夏なのにひんやりと薄寒い室内。

当たり前の光景。 紫織を失った今では当然の久遠院家の光景。

「ん？」

それなのに玄関の電気を点けたとき、指に刺さった棘のように小さ

な、だが無視できない違和感が陸に付きまとった。

「……疲れてるみてえだな」

今は寝よう。　なにもかも忘れ、泥のように眠ってしまいたい。

「——え？」

気のせいだと思って、自室に向かうために階段を昇ろうとしたところで陸は目を見開いた。

額にうつすらと浮かんでいた汗が、ぴたりととまった。

居間に人影があった。　長い、とても長い髪のシルエット。

暗闇の中にあの白い少女がそこにいた。

事故のあった川にいた謎の少女が家にいた。

紫織の亡骸の前にいた不思議な少女がここにいた。

幻影のように。　泡沫のように。　蜃気楼のように。

だけど確かに形を持って。

居間のすみ。　彼女は半紙で隠された神棚の前に佇み無言で手を合わせていた。

外から降り注ぐ仄かな光が小さなスポットライトとなり、彼女の横顔を映し出す。

窓から差し込むのはなんのこともない街灯の人工の光だ。

それなのに、その姿は額縁の中に収めればまるで魂を持った名画のように神秘的で、無私の祈りを捧げる彼女は女神のように神々しかった。

電気を点けるのも驚くのも忘れ、時が止まったように陸は白い少女を見続けた。

しばらくして陸の存在に気づいたようにゆつくりと白い少女が振り向く。

黒銀の長い髪が清廉な鈴の音と共に幽玄に流れる。
光源の乏しい中、彼女の紅い瞳が炯々と輝いていた。

「あら、おかえり」

すべてを見透かしたような透明な紅玉の瞳をぼんやりと緩め、闇を吹き払うような透き通った声で少女は陸に朗々と語りかけた。

「あ、ああ。　ただいま——じゃなくてオマエどうやってここに？」

彼女が言葉を発することによってようやくこの妙な緊張が解け、陸は間の抜けた言葉ながらもなんとか問いかけることができた。

明かりを点けることで、居間は日常的な景色に戻る。
独り佇む白い少女を除いて。

「玄関から。　カギ、開いてた」

「マジでか。　ドロボー入ってくるじゃん」

その言葉にさっきの違和感はそれだったのか、と陸は納得する。

「気をつけなさいよ。　葬儀ごろぼーって多いそうだから」

「おう、オヤジに言っとく——じゃなくってドロボーはオマエだっ——！」

この女はなに平然と人の家の中にいるんだ、と至極当然のことを陸

は憤る。

「…ぬれ衣ね。 久遠院の家なのに盗みたくなるよーなものなんて
なにもなかったわ」

「探してる時点でダメじゃん?!」

「ほんと、がっかりよ。 危険を犯してまで境界をまたぐ価値な
かったわ」

「なんで不正潜入されてここまで言われなといけねえんだよ！
わけわかんねえし」

白い少女に蝶の羽ばたきのような小さなため息を吐かれたが、文句
を言いたいの陸のほうだった。

だが、あんまり過ぎてこれ以上うまく言葉が出てこない。

元々突っ込むのは陸の本分ではなかった。

不法侵入を不正潜入と言い間違えている所からも本来ボケる方なの
だ。

「……」

「……」

「……」

「え？ こ、ここで急にダンマリ？」

「わからないって思考を放棄するような、ぱーに何か話してもムダ
じゃない？」

「お、オレが悪いのか……？」

これまでの人生の中でここまで意味不明なヤツを陸は見たことはな
かった。

先ほどの幻想的な風景も神秘的な様子もなにもかもぶち壊しだった。

「そもそもオマエなんでオレの家にいるんだ」

「外あつかったから」

いつもの設定温度から10 も下げて勝手にエアコンが使われていた。

汗も止まるはずだ。

こんな図々しい従姉妹がいるなんて話、聞いていないし、ホントにこいつは誰なんだ？

「だあもつ。 だからそうじゃなくって…」

体に悪そうな冷房を切って、陸は頭を掻き毟る。

うまく話がかみ合わない。

決められた言語を話すだけで、完璧には意思疎通のできない近未来のロボットを相手にしているような言いようのない不安が、陸を襲った。

それでも陸が騒ぎ立てたり、警察に連絡したりしなかったのは、彼女がああ傘を大切そうに持っていたからだ。

「オマエさ。 姉ちゃんの友達なのか？」

その問いかけに初めて白い少女は瞳を揺らし、無感情の顔色を崩した。

哀切や、悲愴といった負の感情が混ざったなんともいえない儚げな表情。

「…いいえ、それほどの縁はないわ。 ただこの傘かしてもらっただけ」

だが、それも一瞬。刹那の逡巡の間に表情を無に戻し、白い少女は淡々と言い切った。

「えにし？ よ、よくわかんねえけど、姉ちゃんから傘貸してもらような間柄なんだろ。 ならもう友達じゃねえか」

「……。 …… あ姉にしてこの弟ありかしら。

その図々しさにも似た善意の押しつけはやっぱり憎々しいわね」

言葉通り不快げに白い少女は目を眇め、陸を睨み付けた。

どうやらそこまで仲が良かったというわけでもないらしい。

「オマエさ……。 そんなこと本人の前で言うもんじゃねえぞ」

そう口に出したものの、不思議と陸は腹が立たなかった。

基本的に彼が図太いのもあったが、陸と彼女を結びつける共通点。それではじめて会話らしい会話が成立したのだから。

「^{かがみ}鑑」

「へ？」

唐突に。 白い少女は適当な言葉の羅列のようにぼつんと呟いた。

「わたしの名前。 しょーねんにオマエよばわりされるほどおちぶれた覚えはないわ」

感情が抜け落ちた声音ながらも、有無を言わせない鋭い眼光。それに陸は小さく頷く。

自己紹介は仲良くなるための第一歩だ。

まさか相手から歩み寄ってくれるとは思わなかった。

「わかった。 オレは陸だ。 で、鑑？
鑑はえーと……。 オレの家に勝手に入ってまでして、なにしに来
たんだ？」

大切そうに手に持った傘に視線を落とし、陸は聞く。

ここに来た理由は大体予想できたが、それはできれば本人の口から
言って欲しかったのだ。

「あら。 しょーねんにしたらやとちよつとマシな質問が出たわ
ね。

でもその質問は話すのがめんどいからやめとくわ」

彼女は相当自分本位な性格らしい。

そして、陸のことは“しょーねん”で通すようだ。

「めんどいつて……。 そこで面倒がるなよっつ？！ 三十字以内で
簡潔に答えろ」

「“借りた物は持ち主に返すのが人間社会の常識だから傘返しにき
た。 えへへ、抜け作な君と違って偉いでしょう” いったい字余
り」

彼女はツンとすまし顔でふくよかな胸を張ってどこか自慢げに言っ
た。

「なんで多分三十字以内に収まってたのに余計な一文付け加えたん
だ！？」

あと難しい言葉使いやがって、会ったばかりの奴をよく知りもし
ないでバカにすんじゃねえっつ！」

「……。 …。 あら、どーしたの？ あらい息してやらしーわよ」
「あんたのせいだ！」

「やだ、ほんとにわたしにほれたの？」

「どうしてそうなるんだ！　ばっかじゃねえの」

「てれちゃってウブね。　思わずしめ殺したくなるわ」

今度は冷酷な殺意を漂わせる虚無の眼差しで微笑を浮かべてみせた。

状況も状況ながら、己を鑑と名乗る少女のキャラが陸にはわからなかった。

チグハグとした、まるで話すことに慣れていないような安定感のなさ。

それでもようやくまともな答えが返ってきたことに陸は少しだけ安心した。

人の家に夜中勝手に入ってくるあたり全然まともじゃなかったけど、それでも彼女の思いは伝わったのだ。

「はあ、はあ、ふう。　まあ、わざわざありがとな。

姉ちゃん…きつと喜ぶよ。　その傘昔から大切にしていたから」

少しだけ。　ほんの少しだけ。　あんまりにもこの状況がメチャクチャすぎたから紫織はもういないことを陸は忘れていた。

悠也と紫織と三人でバカをやっている時のような心地よさがあった。

「しょーねんから借りてない。　わたしは本人に借りを返しにきたの」

が。　陸がさし出した手をぼんやりと眺めたまま、躁る躁ると物思いに鑑は傘を廻した。

「な…。なに言っただよ。鑑だって知ってるだろ。
あんまり変なことばっか言ってる女だからっていつても怒るぞ」

本人に返しに来た。死んでもういない紫織本人に。

あんまりな物言いに、陸は頭に血が上り、腕を振り上げて鑑を鋭く睨んだ。

「…けどそれもムリかな。しょーねんはあの娘のことを一番知ってるくせに、自分の行いをなげーてるだけだった。

生前も死後も、負担をかけるだけでなにもしなかった。

しょせん、守られるだけのややこにできることはなにもないってことね」

剣幕を立てる陸をまるで頓着しない様子で、鑑は自分の世界で言葉を完結させる。

花開いた黒い花弁に寄り添う白い百合のような少女は、初めからそこに人などいないように窓へと視線を流し、ぼんやりと何事にも無関心の表情で夜空を見つめていた。

第八話 承・魔女

自分の言いたいことだけ言い、外見に似合わず達観した様子で夜空を見上げる鑑。

その陸を完全に無視した態度に今度こそ、彼は頭に來た。

「この、いい加減にしろよっ！ さっきからわけわかんねえことばっか言いやがって。

からかつてるならとつと出てきやがれ」

陸は鑑の腕を乱暴につかみ、無理やりこちらを振り向かせる。彼女の腕は枝のように細く、簡単に折れてしまいそうだった。

「わたしは力ガミ。 あなたがそう望むならその願望に従うのもやぶさかじゃないわ。 でもほんとにそれでいいの？ このままだとあの娘、三途の川さえ渡れないわよ」

腕をつかんだ拍子に彼女の黒銀の長髪が乱れ、陸の頬を撫でた。ぞくりとした。 華奢な腕をきつく握られても、まるで痛みを感じていないような無感情さで鑑は陸を冷たく見つめていた。

ただ傘の下から覗かせる瞳だけが下火が燦るような静かで強かな眼光を秘めている。

まるでめつたに怒らない紫織が怒ったときのような凄味。

「さ、さんずの川？」

その冷淡で玲瓏すぎる美貌に陸はたじろぎ、思わず手を離れた。

「あら、知らないの？」

死者が生前の行いを裁かれる前に渡ることになる関門。

この世とあの世をへだてる境目にある果てのない大川のことよ。
ほんとは三通りの渡りかたがあつたから三途の川なんだけど、いまじゃ六銭を払って渡航するだけだから“一途”の川って呼んだほうがいいかもね。

ふふつ。でも死してもなお、次の生に執着する人の子のひたむきさって心打たれると思わない？」

口では笑いながらも淡々と語る鑑の様は楽しんでいるようには思えない。

寧ろ解れた黒銀の長髪の下から覗かせる透徹した紅い眼差しは、なにかを嫌悪して侮蔑している様子さえあつた。

「は？ マジでなに言つてんだ…。鑑つて頭おかしなヤツなのか」

しかしあまりに難解で意味不明な鑑の言葉に、陸は腹を立てる前に困惑する。

大事なことを言っているようだったが、彼の頭では半分も彼女の言葉を理解できなかったのだ。

鑑は小さく頭を振って乱れた髪を整え、かすかに吐息を吐いた。

「そうね…。どう判断するかはあなたにまかせるわ」

不思議な少女は鶴の舞のように雅に腕を動かした後、指を鳴らす。中指と親指で円がかたどられた後、小さな音が木霊した。

それによって部屋の明かりが唐突に消えた。壁にあるスイッチを切っていないのに電気が消えた。

世界に光が消える。世界が闇に包まれる。

日常が薄れ、非日常が露になる。

彼女の紅い瞳が夜行性の獣の瞳のように闇と輝いている。

「え。て、停電!？」

「――、みずかがみ。」

陸が驚いている間にもう一度、今度は鋭い音が中性的な声と共に木霊した。

鑑が再び指を鳴らし、言葉を発したのだ。

彼女が射抜くように突き出した指を向けた先、そこに変化があらわれた。

ブラウン管が独りでに明かりを灯し、暗い部屋をほのかに照らす。

「……ど、どうなってやがるんだ。今度はいきなりテレビがついた？」

啞然とした陸の顔をぼんやりと映すテレビ。

砂嵐の雑音を漏らすそれは気味が悪かった。

机に置いてあったリモコンで消そうとしても頑なに仄赤い不気味な明かりは消えない。

「黙って見てて。しょーねんの心を一番しめてる事から、映してあげるから」

鑑の言葉に従うように、テレビは意味のある映像を映し始める。

昔のテレビのような白黒のぼんやりとした人影の輪郭が露になる。

旅番組なのか、人が一人歩いていた。

「なっ」

ただ、場所が決定的に違った。出演者が致命的に違った。緑豊かな小道でもなく、水の溢れる楽園でもなく、映すことさえためらわれるような寂れた場所。

もし色があつたとしても、死に絶えた荒野にしか思えないぐらい荒廃しきつた土地。

そんな場所をあてもなく辛そうに歩んでいる様子の女性がひとり、陸の目に飛び込む。

彼女はしばらく歩いていたが、荒んだ砂場に足を取られて力なく膝をついた。

そして、砂嵐の音に混じって音声が届いてきそうなほど荒い息を苦しそうに零す。

陸が見間違えるはずがなかった。忘れるはずがなかった。

衣服や顔が砂埃で汚れ憔悴しきっていたが、それは間違いなく紫織だったのだ。

だが元々ビデオを撮るような家ではなしし、こんな映像を陸は一度も見ることがなかった。

「なん…だよ。なんなんだよ、これ」

呆然とした陸は平然と映像を眺めている鑑に説明を求めるように視線を向けた。

こんな不可思議な映像を見ておいてその横顔は変わらず、ぼんやりとした眠たげな眼差しに鉄面皮のように無表情。

ブラウン管の光を浴び赤い燐を放つ彼女は幽霊のように不気味だった。

「七日たってないし…三途の川にはまだ到着してないみたいね。」

親不孝な罪人らしく、けわしい闇穴道を渡ってる途中かしら」

鑑はひとり納得して、もう一度指を鳴らした。 部屋が再び暗闇に包まれる。

「ちょ、おい？」

部屋の電気も点けずに、ただの四角い箱に戻ったテレビを陸は一心不乱に叩いた。

もう一度彼女の姿を見ようと、リモコンを手に取り、電源を点ける。しかしどれだけチャンネルを変えても、ドラマの音楽やお笑い番組の笑い声が聞こえてくるだけで、さっきの色と音のない不思議な映像はどこにも現れなかった。

「オマエ……いったいなにしゃがったんだ」

若干恐怖を滲ませる顔をうつすらと映しながら、陸は鑑に問い直した。

さっきの不思議な映像はこの女が見せたのだとようやく理解したのだ。

「別にたいしたことしてないわ。

ちよつと見かたや考えかたを変えた先にある世界の法則を使っただけよ。

安っぽく言えば “超能力” とか “魔法” とかそんな感じのささいなじぎね」

鑑はそうつまらなげに言つて、アンテナのように大きく開いていた
チェックの黒い傘を閉じた後、指を鳴らした。

そのような近未来の電灯は家にはないのに、部屋の明かりが当然の
ように点る。

「ばっかじゃねえの。超能力や魔法つて…そりゃさあ、あればいい
なとは思うけど、そんなのありえるはずねえだろ。そんな子供
だましなこと信じられつかよ」

陸は目の前で不可思議なコトが起きていても簡単には信じられなかつた。

母を亡くし、姉を失った今、奇跡を信じられるには遅すぎたのだ。

「そ。ムリに信じろなんて言わないわ。

わたしもめんどいことはやっぱりやだし、話はもうこれでおわり
ね」

小さな嘆息。 鑑はなにかに見切りをつけるようにそのぼんやりと
した紅い瞳を静かに閉じ、部屋から出て行こうとする。

陸を置いて家から立ち去ろうとする。

その潔い姿は嘘や冗談を言っているようには見えなかった。

「ま、待てよ。じゃあなんだ。

姉ちゃんがこんなに苦しそうにしてるのは、その…、今のことな
のか」

陸はだからこそ鑑を呼び止める。

あの映像を現実のものと受け止め、認めるわけにはいかないことを
確認する。

紫織は死んだ後さえ安らかに眠れていないのか、と。

「そうだとしたらどうなの？　あなただけじゃ、どうにもできないわよ」

拳を握り締め、齒を噛み砕く陸に、鑑は色のない声を呟く。

振り向いた彼女は陸の激情になにも動じない凍れる美貌だった。

まるで子供が興味のないおもちゃを失望して見つめるような眼差し。

どこまでも無垢で純粹で綺麗な――ソレゆえの酷薄な瞳で鑑は陸を捉える。

「ふざけるな。　なんで姉ちゃんばつかが苦しい思いをしなきゃなんねえんだよっ！　姉ちゃんみたいなのはやんとしたヤツが地獄に行くなんてありえねえだろ！？」

苦手としている琴音よりも恐ろしい眼差しをもつともせず、陸は声を荒げて叫ぶ。

圧倒的な怒りとやるせなさで彼の体を支配していた。

「いいえ。　地獄にさえいけず、輪廻の輪さえくぐれず、さばかれることなくその靈魂は消滅するわ。　たとえどれだけ多くの人にしたわれていても、親より早く死ぬのはそれだけで大きな罪だから」

鑑は陸の激情にもなんの感情の変化もなく淡々と語る。

たどたどしい言葉遣いながらも残酷な声で。

「なんだよ、それ。　罪ってなんだよ。　そんなのってねえだろ。　なんで姉ちゃんみたいなヤツが死んであとまでそんな目に合わないといけないんだよ。」

姉ちゃんは優しくって、自分のことより他人のことを優先するよ

うなやつで、バカみたいなお人よしで…なのはどうして…」

護りたいのに。　護りたかったのに。　どうしてオレはなににもできないんだよ。

意味がわからなくて。　認められなくて。　陸の視界が顔と共に歪んだ。

「……………。それで、わたしを引きとめてしょーねんはどうしたいの？」

愛しい人の声をもう一度聞きたいの？

それともその温もりまた感じたいわけ？」

そんな陸の様子に彼女はもう一度ため息を吐いた。　小さいが長い吐息。

そしてその表情を若干人間味のある温かいものに変え、天使の慈悲のように優しく、悪魔の誘惑のように甘く囁きかける。

「もしも。　もしもしょーねんが世界を敵にまわす覚悟があるなら。

その天秤につり合う代償を支払うなら。

あなたの願い、かなえてあげてもいいわよ。

そのためにわたしはここに来ただから」

「え？」

願いを叶えてあえてもいい。

それはどんな願いでも？　また姉に会うことさえ？

冗談のように綺麗なヤツは、冗談のようなことをやってみせ、そして本当に冗談のようなことを平然と言った。

「願わくば。　あなたの選ぶ道が辛いものになりませんように」

鑑は電話の横に置いてあった紙を一枚破ると、掌に乗せ、木の葉についた朝露を祓うように静かに息を吹き込んだ。
家にあつたなんの変哲のないただのメモ帳だ。

だがそれは飛んでいる間にひとりで小さく折りたたまれる。

そして風に乗ってひらひらと蝶のように優雅に舞い、驚愕して固まっ
っている陸の胸元に正確に収まった。

首を振った後、陸は胸元の紙を恐る恐る手に取った。

折り紙の“ やっこさん ”の形を象つてはいるが、やはりただのメモ
帳だ。

糸もなにも付いてない。

ただし、いつの間にか赤く光る文字が浮かび上がっていた。

「おいこれ…。 ああもう、またいねえし。

あいつ実は現代に生きる忍者かなんかなのか？」

陸が顔を上げた頃には忽然と白い少女――鑑は清廉な鈴の音を残し
ていなくなっていた。

部屋を見渡しても、家中探し回っても幻だったようにその痕跡はど
こにもなかった。

しかたなく陸は人型に象られた紙をもう一度眺める。

人型の胴体の部分には丸い意外と女性らしい文字でこう書かれてい
た。

“ 少年はもう一度お姉さんに会いたい？ ”

YES / NO

YESならこの紙にサインして

今からあの川原に一人で来なさい “

「え、えーと……？」

ただ、陸にはこの四行の端的な文章が読解できなかった。

「ワイ、イー、エス、とエヌ、オー？」

最近見たことあるような気もするけど…。

ワエー？ う、うぐ。 やっぱわからねえ。

あいつなでなんで悠也みたいに中途半端に英語使っただよ。

つつか野球で使うやつをどうやってこれにするんだよ、おい」

彼は英語の成績がとても残念なバリバリの日本男児なのだ。

カタカナ語を嫌う昔気質な久遠院の家系がさらに陸の英語の成績を苦しめていた。

閑話・昨日（前書き）

黙々と投稿。

閑話・昨日

昨日までの雨が嘘のような澄み渡った青空。

しかし、雨上がりの川は大いに荒れていた。

普段は鏡面のように澄み渡っているはずの水面も、褐色に濁って水かさが増し、まるで大蛇がのたうっているかのように氾濫していた。

それも橋の上を歩く人にはなんの関係のないことだった。本来ならば。

橋の上を歩みながらにこやかに談笑する一組の男女。

恋人というには二人の顔立ちは似通っていた。おそらく姉弟だろう。

「あらー。何か聞こえなかったー？」

のんびりとした少女がふと立ち止まり、周囲に耳をそばだてた。

「いや。たぶん川の音じゃねえか？ にしてもすっげえ荒れてるなあ」

その問いかけに応じた活発そうな少年が橋の下を覗き、目を丸くした。

土手近くまで水かさが増し、見渡す限り茶色い荒波が立っていた。

「し。静かに」

真剣な眼差しとなった少女の視線の先。そこに茶色の毛玉があった。

大自然の暴力に取り残されたように、頼りない中州に一匹の仔猫が頼りなく鳴いていた。

「あのバカ。　どうやってあんなところに」

「ううー。　どうしよー」

「よし。　オレが助けてくる」

「ダメよ！？　危ないでしょう。　大人の人に連絡しましょう」

「だいじょーぶだって。　それに人を呼んでる間にチビが流されちまうかもしれねえだろ」

川の流れは異様に速く、刻々と砂利の中州を削っている。

少女は迷ったが結局少年の指摘に押し負けてしまったようだ。

「本当に大丈夫ー？」

「ああ。　思ったより水かさ深くねえみてえだ。

これだと流れに足取られないようにゆっくりいけばいけるよ」

どうして少年はそのような軽はずみな行動を取ったのか。

姉にカッコいいところを見せたかったからなのか？

単純に中州で震えている仔猫が放っておけなかったからなのか？

その理由はわからない。　シヨックで彼はこの時のことを覚えていないのだから。

「あともうちょイ。　——よし。　もう大丈夫だぞ、チビ」

足を乗せただけで崩れ落ちそうな中州に上がり、少年は手を伸ばす。大自然の脅威に脆弱に震える仔猫を抱こうとする。

だが、そんな微笑ましいはずの光景が悲劇に転ずる。

「え？」

仔猫に触れようとして少年は違和感を抱く。

仔猫が震えているのは恐怖ではなく歓喜によって。

そんな錯覚を抱くほど不気味に仔猫が口を歪めたように見えたのだ。

「まぬけ」

少年の違和感を確信に変えるような、不吉な嘲笑の音が少年の耳朶に届く。

——異変に気づくには、あまりに遅すぎた。

「——えっ？ うわっ？！」

なにが起きたのか、まるで少年にはわからなかった。

少年の重みに耐えられなかったのか、中州が砂上の楼閣のように突然崩壊する。

少年ごと濁流の中に呑みこむ。少年は混乱する。

息ができない。浅いはずなのに足が付かない。どこが上なのかもわからない。

「そんなつ。陸くん——！！」

少女の悲鳴が遠くで聞こえる。セミの鳴き声が近くで聞こえる。

——少年が気づいた時にはすべてが終わっていた。

もう動かない蒼白な女性が少年の目の前にいた。

頼りになる大人が今さら駆け寄ってくる。

抱かれた猫は一鳴きして呆然とする少年の腕から抜け出す。

その鳴き声は人一人が自分のために溺れ死んだとは思えないほど陽

気なものだった。

茶色の毛玉は人知れずどこかに走り去る。

水たまりに一瞬映った仔猫の姿は、血のように真っ赤な赤毛に朱い瞳だった。

第九話 承・夜影（前書き）

閑話だけでは短いので本編のほうも同じ日に投稿。

第九話 承・夜影

夏の夜は居心地が悪い。

蒸し暑い空気が肌にまとわりついて、じつとりとイヤな汗をかかせる。

ドアノブに手をかけて外に出た途端、陸は違和感を覚えた。

暗い。 儚げな月明かりの下に墓石のように寡黙に建ち並ぶ見慣れない町並み。

見知った民家に明かりは灯っている。 幸せな家庭は溢れている。

でも、それでも街そのものが眠りについていてるかのような静けさ。

誰もいない夜の学校のような。 隣にカイブツがいるような。 恐

怖そのもののような。

どうしようもないまでの深淵の暗闇が世界を満たしていた。

「――」

気のせいだ。

小さく首を振り、深呼吸して生暖かい夜気を肺に満たすと陸は駆け出した。

まるで早く引き返せと警告するように電柱の明かりが不自然に落ちた。

知ったことではなかった。 陸の決意は既に固まっていた。

たとえどれだけ信じられないことであろうと、万に一つの奇跡でも紫織に逢えるのなら、彼はなんだってするつもりだった。

左脇に抱える細長い黒色の革袋を力強く握り締め、陸は八宝橋へと急ぐ。

時刻は十時前。 夜は更けきっていない。

なのに、片田舎を訪れたように道には人気がなかった。

すれ違ふ乗用車さえ疎らだった。

せつかくすれ違つても、逆光を放つ乗用車は人を顔なき影法師という怪奇にしてみよう。

コドモのできの悪いアクム。まるで世界に人は自分しかないような息苦しさ。

車が獰猛な奇声をあげ、ライトが目在不気味に光らせ、月は空高くから嘲笑う。

あれだけ優しく見えた月さえ今では不気味だった。

漠然とした恐怖を振り払うように陸は指定された場所に向かってさらに急いだ。

「——どう、なってやがるんだっ——！！」

陸は呼吸を荒げる。

心臓が壊れそうなほど鼓動し、体が自分のものではないようだ。

それはきつと全速力で走つたためだけではない。

ここに来るまで、一人の人の姿もともに確認できなかった。

蝉も、野良猫も、その他の生物の気配までも絶無だった。まるで放棄された町。

そして、夏の暑さにいっそう雑草が生い茂る川原。そこにそいつはただ独りいた。

立ち枯れた柿の木の下。

仄かな月の光を浴び、長すぎる黒銀の髪を淡く輝かせる少女。

陸に背を向け、紫織の傘を差し、彼女はぼんやりと川面を見つめていた。

月光や街灯といった仄かな光源を全て飲み込み、川面は漆黒に染まっている。

底が見えない漆黒の水面は、まるで異界に繋がる穴のようだった。

「あら、いらつしゃい」

傘がクルクルと廻り、彼女はゆっくりと陸に振り向く。

「来ちゃったんだ」

くると。 淡い燐光を放つ黒銀の髪が流れ。

「それで選んだのね」

繰る繰ると。 透き通る白い横顔を覗かせ。

「この愚昧な道を」

狂る狂ると。 妖しい輝きを秘めた紅い瞳が陸をとらえる。

陸を見据え、静かに、聖母のように優しく彼女は微笑む。

悲しそうに、寂しそうに、なにかを諦めるように鑑は深く瞼を閉じた。

仄かな月光によってできる影が、彼女を幻ではない実体だということを示している。

されど、まるで別人だった。

その幻想的な姿は、あたかも羽衣を失って地上に舞い降りた天女のように見えた。

「でもいいのよ。 身の程を弁えない傲慢さは人の性。 その様を見捨てず愛でることが私の役目なんですから」

神秘さを纏う彼女の雰囲気はどこまでも神々しい。

臉をゆつくりと開け、鑑は感情の起伏の虚ろな瞳で陸を流し見る。
焦点の定まらないその眼は正気ではない。 およそ理性の灯がない。

「お、おい、なんか変だぞ。 大丈夫か、鑑？」

ようやく人に会えて安心していた陸は不安になる。 本能のうちに
一歩後ずさる。

「影絵の常闇の中。 よく恐怖に吞まれず此処まで来られました。
試練を乗り越え覚悟を示してもらった以上、今度は此方が誠意を
示す番ね」

妖艶な少女は静かながらも饒舌に言った。

目付きからぼんやりと焦点の定まらない様子が消えている。

その奈落に吞み込まれそうな伽藍の赤眼に見つめられ、陸は動けな
くなる。

彼女の声は穏やかなのに老練の魔女のように厳かだった。

「渡した紙をこちらに」

絶対的な、言葉そのものに抗えない力強さが感じられる冷厳な声。
声のままに、陸の半ズボンのポケットからひとりでに人型の紙が宙
を舞い始める。

巢に戻る親鳥のように精密に鑑に吸い寄せられる。

「――」

が。

手に取ってしばらく鑑はそれを眺めていたが、その綺麗な眉を顰めた。

同時に神聖で近寄りがたい空気が崩れ、困惑の面持ちで陸と紙を見比べる。

果たして彼女の受け取った人型の紙。

その頭の部分にひげ面のオヤジが帽子に手をかけている絵が描かれていたのだ。

陸の書いたものだろう。 渋みがあってやたらうまい。

陸の美術の成績が5なのは伊達ではなく、イラスト画は彼が最も得意とするものだった。

問題は――

「なにこれ？」

なぜここにこのような図柄が書かれているのだ。

もう一度姉に会いたいならこの紙にサインして川原に来いと鑑は指示したつもりだったのだが…。

「なにつて“サイン”。 盗塁の指示を出す監督のつもりだけどんなかまらなかった？」

「ちよつと聞くけど、“サイン”の意味わかる？」

「いや。 だから野球の監督とかが選手に出すアレだろ」

出会ったときの舌足らずの口調の鑑に戻ったことに陸は安心して、自分は言われたとおりやっただけだぜと胸を張って告げる。

「
……」

沈黙。 ビデオの停止ボタンを押されたように二者は綺麗に停止す

る。

「……………」

「……………」

更に沈黙。 生暖かい風がむなしく吹き、川原の草木がむなしく揺れた。

「え。 あ、あれ。 もしかして違った？」

さすがの陸も、呆れ返って物も言えない鑑の様子に恐る恐る問いかけた。

「むしろわたしは、どーすればそこまで自信持てるのか聞きたいんだけど…」

「だって監督サインするじゃねえか。 勝負を決めるすっげえ重要なことだぜ」

「しょーねんは野球してたの？ してないでしょ。」

契約するための自分の名の署名に決まってるじゃない。

どーするのよ、このばー。

こんなふざけたラクガキのせいで半分も呪がかかってないじゃない
「い」

陸と会ってから初めて感情も露に、鑑は頭を抱え半泣きだった。

彼女の計画も予定も威厳もなにもかもが、彼の無自覚の行動に台無しにされてしまったのだから、それもしかたのないことなのかもしれない。

「いやあ。大和魂を持つ日本男児たるもの英語はどうにもなあ。ちなみに実を言うと“ワイ、イー、エス”と“エヌ、オー”の意味もさっぱりだった」

当の本人は申し訳なさそうに頭を掻き、苦笑いを浮かべる。

バカにされたのに陸が笑みを浮かべたのは、特殊な性癖だからでは当然なく、こういう人間味のある表情もちゃんとできるんじゃないかと嬉しく思ったからだ。

「…よくそれで中学生名乗れるわね。

勉強にはげむのが学生の本分なんですよ。はずかしくないの？」

あんまりの有様に鑑も諦念と達観の入り交ざった複雑な表情を浮かべた。

「なんで？ オレは悠也じゃない。久遠院陸なんだ。

オレがオレらしくいることに恥ずかしいことなんて…最近はやっと腐ってダメだったけど…、もう悩まないって決めたから恥ずかしいことなんてなんもねえよ。

たとえバカだとしてもそれもオレの一部なんだから胸はって名乗れるさ」

負け惜しみではなくまったくの本心で陸はきっぱりと言う。

その瞳は力強い。

紫織を失ってふぬけていた様子はそこになく、希望に満ち溢れていた。

「なんかなまいき。そんなにいいことあった？」

「姉ちゃんにまた会わせてくれるんだろ。なら元気ださねえと。いつまでもいじけてて変に心配させるわけにはいかねえからな」

迷いや憂いが消えたせい、陸の声には本来の力強いはりがあった。姉にまた逢える。ここで死んだ紫織に。

そんな眉つばものの話を陸は完全に信じきっているようだった。希望を持った人間というのはこれほどまで変わるものなのだろうか。

「ひねくれるより殊勝な心がけかもしれないけど…。

でもせめてイエスとノー。 “はい”と“いいえ”ぐらいわかってよ。

日常生活さえ支障きたすじゃない」

そんな純粹な陸の様子に鑑も押され気味の様子。

「確かに悠也の言ってることだつて実は半分ぐらい勘で判断してるけど、今まで大して問題なかったからだいじょーぶだつて。 英語2の成績だからって舐めるなよ。

だいたい英語はピカピカの一年生なんだからこれからだぜ」
「……」

鑑の苦し紛れの物言いにも、陸本来の樂觀的で深刻に考えない性格が遺憾なく発揮される。

しかし、どうやら他にも深刻に残念な教科があるらしい。

彼の未来は本当に大丈夫なのだろうか。

「ふーん。 でもそのつづりがイエスとノーだったのか。

ノーはわかるけど、イエスって“IS”だと思つてたぜ」

「あのね。 それじゃなんの意味もない“です”じゃない」

「ん。 そりゃあ確かに“死”んだら意味がないけどさ。 なんかその言い方はヤダな」

「……しよーねんは将来大物になれるわね」

「お、そうか？ みんなにもよくそう言われるぜ」

物事を好意的に捉える性格は紫織のみならず、陸も大いに受け継いでいた。

「……。 さっきの仕返し……じゃないよね？」

陸はまったくの天然で不思議な気配を持つ鑑に言い様のない敗北感を味合わせたのだった。

第十話 承・代償

皮肉さえ好意的に受け取る陸の天然さに言いようのない敗北感を味合わされた鑑。

「で、そのふくろはいったいなんのつもり？」

主導権を握りなおすためにも、鑑は大切そうに陸の脇に抱えられている黒色の長細い革袋に視線を向けて、話題を変えた。

「ああ、木刀だよ。姉ちゃんを地獄から救い出すんだったら、武器があつたほうがいいんじゃないかと思つてな」

陸が自宅で素振り用に愛用している木刀——虎鉄丸（安直な命名から誰が名づけたのかは察して欲しい）を革袋から取り出し、軽く一振りしてみせる。

小学生低学年の頃には既に剣道を始めてあるだけあつて、その動きに無駄はない。

彼の流れるような太刀筋は重心にブレもなく相当の腕前だと推測できた。

流石にそのさらに昔からおもちゃの剣や木の棒を振り回していただけはあつた。

なんとかは長いものが好きである。

「その意気込みは認めるけど、しょーねんは冥界なめてるわね。」

そんなの竹やりで艦隊を轟沈させるよーなものよ」

「え？ ごうちん？ ば、ばっかじゃねえの。オレを甘く見るなよ。」

今から三年後には海さえ叩き割る秘剣式の太刀を編み出してる予

定だぜ」

陸は母親代わりの姉を昔から護ろうと色々と手伝っていたためか、
同年の男子生徒に比べて生活能力があり、言動に似合わずしつ
かりとしたところも多かった。

だがそんな陸もしょせんは夢多き中学生だ。
魔法はムリでも剣の道に不可能はない。

自分にはまだ目覚めていない隠された力があって、練習すればいつ
かきつとできるんだと本気で信じこんでいる辺り一年早い発病だっ
た。

「あら。それは頼もしーモーセね」

そんな陸に彼女は淡い笑みを口許から零す。

そして流れるような動作で傘を閉じて、地面に置いた。
そうすることで、箸よりも重いものは持てそうに見えない白い繊手
を自由にする。

彼女は屈んだ姿勢から、そのまま氷上を滑るように滑らかに陸の目
の前に歩んできた。

陸は木刀を構えていたのに、その動きにまったく反応できない。

「——え？　ちよつ。　鑑？」

月光に燐を放つ清く白い肌。　優美に影を差すまつ毛。　瑞々しい
桜色の唇。

気がついた時には、繊細で端麗な顔立ちが目と鼻の先にあった。
冷たくも柔らかな右手が陸の頬にそつと添えられる。

銀水晶のような輝きを秘めた黒銀の髪が陸の顔をくすぐる。

陸が異常に気づいた時には、鑑はあの冷徹な無機物の瞳で彼を捉え
ていた。

「では救世主さん。 人が決して触れてはいけない禁忌。
遍く生者を侮辱し、潔い死者を冒瀆する——その代償を此処に支
払ってもらいます」

陸は別人のような鑑になにか言おうとした。 怖れからではない。
そのなにかを諦め、努めて無感動を装っているような眼にただ一言
物申したかった。

だが、口から代わりに出てきたのは赤い液体——血だった。
なんで？ 握力が無くなり、木刀が力なく零れ落ちる。
腹の辺りがやけどをしたように熱い。 すごく、イタイ。

陸は原因を突き止めようと視線を落とし、愕然と眼を見開いた。

陸の体と同化している白い纖手。

紅い雫が——血が白い凶器を伝い、彼女を美しく染め上げる。
それは鑑の左手から伸びて、陸の胸を捉えていた。

陸の腹が彼女の手によって、型抜きのように呆気なく貫かれたのだ。

「ばつ。 オマ、エ。 なにを…」

この女、どっか頭おかしいんじゃないかと思ってたけど、ここまで
イカれてるなんて…。

「少年の望みはもう一度お姉さんに会うことなんでしょう？」

嫣然と、壮絶に問いかける白い少女。 陸はうまく頭が働かない。
体の中に異物が強引に入り込んでくる感覚はおぞましい。
昔、ナメクジを間違って飲み込んだ時のほうがずっとましだった。
きもちわるい。

色彩を失い、暗く染まっていくなかに、辛うじて地面の花束が陸

の眼に止まる。
供えられた花。 紫織のために捧げられた供え物。

—— ああ。 そうか。 やつとわかった。

そこで陸は気づく。 姉に会わせてあげるといっつのはそういつこと
だったのか…。

そんな都合のいい話、あるはずがない。
でも、それも悪くないかもしれない。

心地よい喪失感に身を委ね、陸は瞳を閉じた。
意識はさかしまの闇に堕ちていく。

闇よりも深い黒に沈んでいく。
落ちる最中。

誰かの、私をひとりにしないでくれ、という言葉が彼の頭に残った。

。

。

。

「ほらしょーねん。 いつまでも寝てないで」

。

刹那か永遠か。 はたしてどれだけの時間が過ぎたのか。
陸の意識を暗い深淵から呼び戻す声がした。

「早くおきないと門しまっちゃう。 こんど左目もらっちゃう」

美しいが、舌足らずで平淡な声。

物騒なことさえ声色一つ変えずに言うのは間違いなく鑑だった。

「……ちよつ、と……まで……」

猛烈な寒気に身を震わせ、陸は凍りついたように重い瞼をゆっくりと開ける。

まず陸は咄嗟に自分の腹を見た。

「あ……れ？」

学生服は見事に破れ、血でべったりと固まっていた。

だが、痛みはない。

地面が血で湿るほどの出血量なのに、肝心の傷が跡さえなかった。

これでは夢だったのか現実だったのかいまいちはつきりしない。

なんの抵抗もできずに非力そうな女の子の手で腹を貫かれたといった、男の沽券に関わるような凄惨な出来事など、信じたくなかったけど。

「……なにがどうなってんだ？」

困惑気味に視線を泳がせた陸は、説明を求めるように頼りなく鑑を見上げる。

なんでこんなまねしたんだと問い正そうとして、陸は口をへの字に曲げた。

「どーしたの？　まるで夜の川原で異世界への入り口、見つけたよ
うな顔して」

「まんまその通りだよっ！」

ひどく疲れたように眠たげな眼差しをしている鑑に陸はツッコんだ。彼女がなにげなく頬杖をついて腰掛けている場所は異様だった。真っ赤な光を放つ、水たまりのような歪な二次元の境界。

そんな穴がゆらゆらと宙に浮かんでいる。その場所だけ夜の川原ではなく、西部劇で見るような不毛な大地が映ってた。

家のテレビで見たあの光景にどことなく似ていた。そんなあやしい境目にぼんやり眼で平然と彼女は座っていたのだ。

「ま、マジでどうなってやがるんだこれ」

妖しい境界の隣には枯れた柿の木。暗く異様な雰囲気放っている。

ふと、昔悪戯をした時、紫織にしかられた時のことを陸は思い出す。

——柿の木に無闇に登ったらめーですよー。落っこちちゃったから三年しか生きられないしー、その根元はあの世に繋がってるんだから——

家にもある折れやすい柿の木に登らせないための作り話だと思っていた。

でも、まさか本当に…。

「質問は後。早くしないとしまっちゃう。お姉さんに会いたくないの？」

眠たげだということ以外表情の読めない顔とは異なり鑑の口調にはどこか緊迫感がある。

鑑の叱責通り、その境目も徐々に小さくなっていく。

「なつ。鑑。オマエ、マジで姉ちゃんに会わせてくれるのか」
驚愕や、混乱や、困惑といった理解を拒む様々な感情が入り混じった、なんともいえない複雑な顔をして陸は驚きの声を漏らす。
陸の視線の先には、地球上には存在しない異界への入り口と鑑がいた。

「当然でしょ。言葉には霊的な力が言霊として宿っている。そして約束とは契約。あなたたちじゃあるまいし、偽って命、枯らすよーなまねしないわ」
「…そつか。そうだよな。ありがと、鑑」

様々な疑問は捨て置き、そう陸は口にした。
助けてもらったらまずお礼を言いなさいという紫織の教え通り。

「よきかな。ちゃんとわかってるじゃない」

ここで礼を言われるとは思っていなかったのか。
少し目を見開いた後、花の蕾が綻んだような柔らかな微笑みを鑑は浮かべた。

思えば、これが陸の初めて見る彼女のほんものの笑顔だった。

落としてしまった木刀を強く握り締め、陸は前を見る。
異界への入り口を彼は見すえる。

この先に姉ちゃんがいる。姉ちゃんに会える。
言いたかったことを言ってやることができる。
また姉ちゃんと暮らせる。もうその手を放したりはしない。

陸は決意を固め……されど、先ほどの生々しい痛みが忘れられないので用心としてまず木刀を突っ込んだ。なんの問題もなく木刀は穴に吸い込まれていく。

「痛っ」

次に指先で境界に触れた時、静電気を帯びているように少し痺れた。境界線だけが特別のようで、ゆっくりと手を突っ込んでいくとその先は夏が終わったようにひんやりと肌寒かった。これなら問題なく行ける。

しかし、境界の中に足を踏み入れる前に一つだけ、もっとも気になったことを陸は思い出したように鑑に尋ねた。

「でも、鑑？ オマエってさ。マジで何者なんだ？」

それは今さらながらの疑問。だがそれは、楽天的に物事を考える陸でも無視できないほど鑑の正体に疑念が強まった現れでもあった。不思議な力を持ち、不思議な言動の所々に匂わせる鑑とオレたちは違うという確かな壁。

それにこの少女はどうして自分のことを助けてくれるのだろうか？ ただ紫織に傘を貸してもらった。本当にそれだけのために？

「ばーね。 謎は謎のままのほーが楽しいじゃない。」

それに女の子のことせんさくする男は嫌われるわよ」

陸の探るような視線を遮るように、鑑はクルクルと傘を廻す。どこまで本気なのか、鑑は不思議な雰囲気漂浮させてそうはぐらか

した。

その時の彼女の表情はチェックの黒い傘の影に隠れ、陸には窺えなかった。

第十話 承・代償（後書き）

ということでこれにて承のパート終了です。

次回からは地獄編をスタートします。

スマートな文章が書けるだけの文才はまだありませんが、今できる精一杯を書くつもりなのでこれからもお付き合いいただけたら幸いです。

感想、アドバイス、評価等お待ちしております^^ノシ

第十一話 転・異界（前書き）

彼の追憶？

風が悲しく泣いていた。
空が悲しく泣いていた。
ただ悲しくて泣いていた。

「うそつき。 うそつき。 うそつき」

そう幼子^{おさなこ}は泣きはらす。

——なにが嘘つきなのか？——

冷たい風に揺れる枯れた枝木がざわざわと問いかける。

「やくそくしたのに…」

またここにいらねってやくそくしたのに…。
どうして…おかあさんを……」

幼子は喉をつまらせながら答える。

——だれが嘘つきなのか？——

冷たい雨粒が跳ねる石畳が厳かに問いかける。

「たくさんだ。 たくさんうそつきだ。」

またいっしょにおまいりしましうねって、おかあさんはいったの。
すぐにおうちにかえられるよって、おねえちゃんはいったの

に。

ぜったいによくなるって、おとうさんはいったのに。
かみさまにたくさんおねがいしたのに。

どうして……」

風と一緒に泣き続ける。

空と一緒に泣き続ける。

幼子はただただ泣き続ける。

幼子は泣き疲れて、辛くて、悲しくて、もうなにがなんだかわからなかった。

ただ、おかあさんにもう一度会いたかった。

ぎゅっと抱きしめてほしかった。

そんな時、

「こんなところで泣いてたら風邪ひくわよ」

——ふと、幼子の哀愁を漂わせる慟哭に誘われたように彼女は姿を現れた。

第十一話 転・異界

吹雪のように凍てつく風が横殴りに吹き荒ぶ。
墨の雨が降りそうなほど暗い曇天の空。

地平線の果てまで草木一本育たないような不毛な赤錆びた大地。
巨人の忘れ物のように転がるごつごつとした岩。

そこは、地球上のどこにも存在しない場所。

死後の世界——地獄へと罪人が歩む闇穴道あんけつどうという道のり。

そんな中を、生者である陸と鑑の二人は歩む。

死んだ姉の紫織と再び会うために。

「…すると何だ。さっきの道を開くには、姉ちゃんと血の繋がった人間の体の一部が必要だったから、鑑はあんなことしたわけか」

陸は生乾きの血糊がついて着心地の悪い学生服を前に引っ張りながら、しかめっ面で鑑に問いたです。

道中ただ歩くのも暇なので、話しながら行くことにしたのだ。

だが、殺されそうな目に遭ったのにそれだけですませられるあたり、陸が大物だというのは案外皮肉ではなく本当のことなのかもしれない。

「ふーん。ぱーだけど莫迦じゃないみたいね。

悲しみや苦しみを深く考えないために、自らねじを一本外したつてところかしら」

「は？ どういうことだ？」

「……なんでもないわ。ま。対価とか供物とかそういう難しい話しても、しょーねんに理解できると思わないし、そーいう認識でかまわないわ」

鑑は理解することをかけらも期待していない醒めた眼差しで、陸の“どうして川原でいきなりオレの腹を貫いたのか”という質問を締めくくった。

確かに異界への境界を開く仕組みなどの話を聞いても、陸は半分も理解できなかった。

あまり話慣れしていない様子の鑑の説明ではなおさらだ。

「むぐ。でも、いきなりあれはねえだろ。マジで死ぬかと思っただぜ」

陸はいまだに違和感の残るお腹を擦りながら、悪びれる様子のない鑑を非難する。

だからといって、はいそうですかで済ませられる問題ではなかった。ごめんなさいの一言もないのでは納得できない。

「小さい男ね。いーじゃない、内蔵の一つや二つなくなっても。まだまだたくさんあるでしょ」

そんな恨みがましい陸の様子に鑑は蝶の羽ばたきのような小さな嘆息をする。

その物憂げな様子を秘めた仕草は神秘的な彼女に似合っていた。

しかし、腹を貫かれた本人は納得できるはずがない。

「いいわけあるかつ！ 全部大切だ」

というかこの女はオレが気絶してるのをいいことにいったいなにを取ってっただ？

と、陸はやる気のないぼんやり眼の鑑のアグレッシブすぎる言動に恐怖する。

「あら、知らないの？ 目。肺。腎臓。副腎。心臓。
そういったものって、一個失ってもいいために二個あるのよ」

彼女の冷静な口ぶりは心の底から本当にそう思っているようだった。
自然、陸の顔が痙攣を起こしたように引きつる。

「小難しいことばっか言ってるくせに、鑑って実はばっかじゃねえの？！」

ていうか心臓は一個しかねえし」

「なに言ってるの？ 万が一壊れても死なないために、もう一個隠してるんでしょ」

「それいったいどの魔王だよっ！？」

「……」
「……」

はたと鑑が歩むのを止め、沈黙。 何事かと、陸も足をとめる。

「……」
「……」

眠そうな顔のままくんと首を傾げ、更に沈黙。 陸も首を傾げてみる。

寒風が荒び、乾燥した大地の砂埃を立ち上げる。

「え……。ほんとに心臓って一個しかないの？」

ボソッ、ととんでもないことを彼女は口に手を当てて呟く。

「おいっつ！ 待てよ、なんだそのしまったって顔。
オマエ、オレから心臓取ったんじゃないよなあ？！」
「冗談よ。 ぱーじゃないの？ なかったらしょーねん死んでるじゃない」

どうやら、川原で陸の天然さに敗北感を味合わされた意趣返しをしたかっただけのようだ。

口元に手を当てて意地悪げに眦を緩めると、鑑は再び歩き出した。

「殴りてえ。 女が相手だけど木刀で思いっきりぶん殴りてえ」

陸は暗澹たる気持ちで木刀の柄を強く握り締める。

ミシリツと厭な音を立ててるあたり、顔は笑っていたが相当怒り心頭に発しているようだ。

「あら。 なぐろうと思えばなぐれるよーな口ぶりじゃない」

そんな陸に、鑑は赤錆びた大地につきそうな長い髪を翻してさらに挑発する。

どこかこのやり取りを楽しんでいる様子だった。

「なんだその自信。 鑑は今を生きる古流剣客か。 るろうにか」

「あら。 九頭。閃はちよっとむりだけど、他の抜刀術は奥義含めて全部模倣できるわよ」

「もほうって…まねできるって意味だよな。 ちよっ、マジかよ。
弟子入りさせてくれ、師匠」

その怒りも憧れの前には安いものだった。

陸は剣道をするものとして、剣士というものに畏敬の念を持っていた。

恥もプライドも捨てて土下座しそうな勢いで鑑に頭を下げる。

普通だったら信じるはずもなかったが、相手は地獄への道をも開けるような不思議少女だ。

もしかしたらという気持ちが陸の瞳を輝かせる。

「ダメよ」

「師匠」

「どうしてもというならわたしを斃してみせなさい」

「うおりゃあっ！」

「っ！！ あなた。今ほんきで叩こーとしたわね」

「オマエがわからず屋だからだ。もういい。…ってあれ？」

ついノリでマンガの滝でのやり取りのように勝手に飛び出してしまった陸だった。

弟子入りさえしてないのに。

———というか、コツさえ掴めば意外とこの掴みどころのないヤツとも話せる。

るろくにネタをまさか鑑が知ってるとは思わなかった。

けど、この悠也たちとの学校生活の延長線のようなにぎやかなやり取り。

姉ちゃんのこととで深刻になってたオレのこと気づかってくれてるのかな。

鑑って目つきは怖いけど、ちょっといいヤツかもしれない。

そんなことを陸は密かに思っていた。

「なあ、鑑。前にオレ、オマエと会ったことなかったか？」

意外と親しみやすいと思ったからではないが、陸はそんなことを鑑に尋ねていた。

鑑の顔を、その美しい黒銀の長髪を見ていたら、胸がざわつく様な――ひどく懐かしい感じにとらわれるのだ。

とても最近知り合ったようには思えない。

「あら。ナンパ？」

陸の真剣な問いかけに、鑑はそう軽く受け流す。

「違う」

「そ。残念。ナンパしてきたなら、龍。閃で首チョンパしてあげたのに」

鑑は一步で陸の眼前に迫ると、黒い傘を彼の喉仏に精確に突きつけていた。

冗談なのか本気なのか、その眠たげな眼差しからはいまいち判断できない。

ただ。鑑は本当にそうできるだけの実力を有しているのだろう。その流水が流れるように静かで無駄のない足運びは達人のそれだった。

「…やめてくれよ。そんな冗談、あんまり笑えねえ」

またはぐらかされたけど、勘違いだ。

こんな物騒なヤツが知り合いにいたら、物覚えの悪いオレでも絶対に覚えてる。

と、陸は先ほどの痛みを思い出し、イヤな汗を浮かべて身をそらす。その傘の切っ先は鑑がかざすとまるで本物の刃に見えた。

「しょーねんの意見なんて知らないわよ。

わたしはわたしがよければ、それでいーんだから」

鑑は陸と必要以上馴れ合うつもりはないようで、興味を失ったように彼を置いて歩き出す。

陽射しのない薄闇の中、黒い傘を差して闇に溶けるように静々と。

「オマエ、やっぱすっげえ性格悪いなあっ！ 鑑って絶対友達少ねえだろ」

四方が似たような荒野の風景だ。

無視したかったが、声を荒げながらも陸は鑑の後を追う。

「……。心の友、ひとりいるから他はいらないわ」

「暗っ。暗いぞ。うっとうしいぐらいの愛情表現のはずが空しすぎるって!!」

「え。そんな。しょーねんはわたしと友だち…じゃないの?」

いきなり信じられないことを言って振り返った鑑の顔に、陸はドキリとした。

白い耳を紅く染め、眦に人差し指を当てていた。

瞳から雫が……涙が溢れそうになる。泣いていたのだ。

普段無表情の彼女にこんな顔を見せられて落ち着いていられるほど、陸も男の子を捨ててない。

「え? ええっ!? ちょ。ばっかじゃねえの。なにいきなり

泣いて…」

「なにほんきにしてるの? ぱーじゃないの」

「……」

嘘泣きだったらしい。

無感動の眼差しに涙はなく、汚物を見るように氷点下だった。
仕返しは倍返しが基本というのは世の中の常識だ。

「……。……。姉ちゃんごめん。」

オレ、女の子に暴力は振るわないって約束守れねえかもしれない」

先ほど話せるなんて思ったけど、訂正。
この女、ウザイぐらいむかつく。

「——、ときながれ……か」

だから陸は気づかなかった。

傘に隠れる彼女の姿がどこか小さく寂しげだったのを。

第十一話 転・異界（後書き）

というわけでお待たせしました。

地獄編、転の話がスタートになります。

しみりした話は作者の気力も削ぐので、今回は少しコミカルなものにしました。

…。

……。

……。

文章を書いていて思い知りました。

ダメだ、わたしにはあまりギャグのセンスがない。

そのうえ文章を書くのも遅い。

一日一回更新できる作者さんって本当にすごいですね^^；

純粹に尊敬できます。

少しでも追いつけるよう精進するので、こんな作品でも最後までお付き合いいただけたら幸いです。

第十二話 転・黄泉（前書き）

ゆるゆると投稿

第十二話 転・黄泉

その後、若干険悪な雰囲気の流れるも、互いの距離を測り直すようにぼつぽつと雑談を交わしながら、陸と鑑は紫織の姿を探す。

「ところでしょーねん。

さっきからひとりの罪人も見かけないけど、ほんとにこの道であつてるの？」

そして、見渡す限り死に絶えた荒野の風景の只中で、鑑はふと思いついたように陸に問いかけた。 とんでもないことを。

「え、鑑。 オマエが道知ってるんじゃないの？」

てつきり鑑が道案内してくれているものだと思っていた陸は当然そう答える。

「……………」

その言葉に二人とも停止。

初めてのお見合いのように無言で見つめあふ。

「……………」

沈黙。 立ち上った砂埃が眼に痛い。
フリーズがとても良く似合う二者だった。

「もう、すっかりして。話したようにあの娘と繋がりがあるのは
ぱーなのよ」

来た道を逆走しながら、鑑は陸に叱責の声を浴びせる。

“魂の繋がり”とかいうもので、紫織がいるとなんとなく陸が感じた場所は、今まで来た道と百二十度違う方向だった。

「ちょっと待て。さっきから言おうと思ってたけど、ぱーってなんだよ、ぱーって。頭に花なんて咲いてねえし、オレには陸って名前がちゃんとある」

だいたいちゃんと説明しなかった鑑が悪いんじゃないかと、陸は不機嫌そうに声を荒げる。

「だまってあの娘、見つけられるよー集中なさい。
むだにした時間、取りもどすわよ」

陸が振り返ると、そんな彼の不満を鑑はろくに聞いておらず、不愉快そうに空を見上げていた。

気のせいかな、曇天の空はさらに黒が濃くなっている。

霧が発生したように遠くの視界が少し悪くなっていた。

「ど、どうしたんだよ、鑑。なんかヤバイことでもあんのかな？
雨降るんだったら、傘さしていけばいいだけじゃねえか」

「ぱーに言っても詮ないこと」

先導する陸の歩幅に合わせながらも、歯がゆそうに鑑は親指の爪を

噛んだ。

警戒するように周囲に視線を巡らせるその顔は無表情ではなく、なにかを危惧するような焦燥した顔つき。

走るように指示したことといい、本当に余裕がないようだった。

「せないってなんだよ」

「最悪わたしがどーにかするから気にしないで」

「いや…。（だからせんないってどういう意味なんだ？ 鑑って子供っぽい声のくせに言葉づかいがときどき難しいからわかりにくいんだよ）」

わずかな軋み。 小さな不協和音。 暫くの間、無言で両者は駆ける。

髪が風になびく。 姉の姿を求めて陸と鑑は懸命に走る。

しかし赤錆びた砂に一度ならず陸は足を取られ、思うように進めない。

まるでアリ地獄のようだ、と陸は苛立たしげに舌打ちする。

得体の知れないなにかが、岩の後ろで疲れるのをじっと待っているかのようで、言いようのない不安が彼の胸を襲う。

「ああ。 さつきからその髪うつとうしいぞ！

もうちよいしばるか、なんかしてくれよ」

足を緩めた。

はりつめた空気が伝染したのか、そんな空気を打開したかったのか。地面に引きずりそうなほど長い黒銀の髪を鑑に、陸は口を尖らせ非難する。

先ほどから何度も髪の手が掠って、走るのに集中できなかった。

「焼け残った灰色なんて。　どうしよーとわたしの勝手」
「うっ」

そのぼんやりとした鑑の眼差しの瞳孔が、不愉快げに針のようにすつと窄まった。

陸は戦慄を覚え、ぞくりと肩を震わせた。

まるで首筋に包丁を向けられているような原始的な死の恐怖が彼を襲う。

珍しく感情的に突っぱねられたその様子からも、あまり髪のことには触れて欲しくないらしい。

想像しにくいだが、昔、この髪のことイジメにでもあったのだろうか。

「……」

たしかにこんな髪の色、普通じゃない。　ありえない。

日本人が染めても、こんな滑らかで繊細で綺麗な髪にはなるはずがない。

なら。　鑑はいったいなんなのか。

「…勝手って。　ロボットの装甲みたいでカッコいいのにもつたいねえな。」

いいよなあ。　姉ちゃん髪染めるのは絶対許してくれねえんだよ」

考えてもわかりそうにないことは深く考えず、日本人らしい黒い前髪に触れながら、陸は自分が思ったことを口にする。

こんなはりつめた空気のまま姉ちゃんと会うなんて、ダメだ。これだけは確かだったから。

「…あなたは変わらないわね。

残酷なほど自分の感情に率直で、そのくせ残忍にまでに他者を気づかうところ」

「——え？」

こいつ、今なんて。

「己が欲するままに行動するのは見ていて清々しいけど、でもそんな態度、気に入らないって言われたことない？」

「え…？」

刃物のように玲瓏な眼差しと言葉が、陸の胸を深くえぐる。先ほど貫かれたときよりも深く。

自分が思うまま、勝手気ままに行動するのが気に食わない。昔、似たようなことを言われたことがあった。

それはいつで、誰だったのか。

陸は覚えていない。思い出せない。

ぽっかりとあいた胸の空白。

足場が崩れるような不安感。 足場が定まらないような不快感。

「…そ、その。 なんか、ごめん。 気にさわったんなら謝るよ。

確かに女の子の髪にロボットの装甲みたいは悪かった」

血の気を失ったように不調な体のまま、陸は謝る。

自分の体調より、相手を気づかう。

悪いことをしたらまず謝らないといけないと言われたから。

「根本的になにもわかってないわね。 ま、もういいわ。

せめてしょーねんの愛しい人を不快な気持ちにさせないよー心が

けなさい」

鑑は幾分か柔らかく目元を緩めて、陸に忠告した。

「ん。早く姉ちゃんを見つけようぜ」

陸の視線の先。

そこには赤錆びた大地に人の足跡らしきものが、かすかに残っていた。

砂に吞まれかけた足跡を辿り、陸と鑑は不毛な道なき道を進む。

視界が悪い。夜が近づいているのか、陸の周囲は薄闇に包まれた。つあった。

空気もよどんできて息苦しく、肩で息をしなければならなかった。陰鬱な雰囲気には寒気を催されるものがあった。なにかひどくイヤな予感がする。

「あ…姉ちゃん？」

流砂のように不安定な小高い丘を登り、視線を下に落とす。

そこに足跡の終着があった。

陸は目を見開く。視線の先に力なく倒れ臥す人。

陸は木刀を放り出し、鎖を外された犬のように飛び出す。

横たわった人影に急いで駆け寄る。

しかし、そこに待ち望んだ人はいなかった。

代わりに見知らぬ若い女性が斃れ、砂に埋もれかかっていた。

「あのね。集中して探しなさいって言わなかった？ ハズレじゃ

ない」

先に駆け出して行った陸にもはつきり聞こえるような大きめなため息を零し、鑑は周囲を注意深く見渡す。空気が刺すように冷たく、水の中のように重かった。

「……。思ったより浸食、早いわね。

むだに浪費できる時間、もうないものと思いなさい」

人一人が斃れているにも関わらず、彼女の声はいつも通りどこまでも淡泊だった。

「ちよ。どこ行くだよ、鑑？ この人助けないと」

興味はないとばかりに、斃れている女性に視線さえ向けずに立ち去ろうとする鑑。

それを陸は慌てて引き止める。

一般的な良心を持つ陸には、目の前に倒れている人がいるのに、見捨てることなどできるはずがなかった。

が、女性に声を掛けようとした陸の手を、今度は鑑がつかむ。

「ほっときなさい。それで痛い目見たのに、まるでこりてないわね」

チェックの黒い傘の下から感情の乏しい顔を覗かせ、鑑は冷酷な言葉を紡ぐ。

その美しくも怜悯な瞳は決定的に人間的な温かみがなかった。

「おい、なにわけわかんねえこと言ってんだ？
ふざけてる場合じゃねえんだぞ」

そんな鑑の冷たい態度に陸は苛立ちを隠さず、乱暴に振りほどこうとする。

が、離れない。鑑の静かな眼差しは真摯で、この手を振りほどくのならわたしはもうしらない、と、静かに告げているようだった。

「しょーねん。あなたなんのためにここに来たの？」

「むぐ。だ、だからって…」

そのタダならぬ様子に、陸はもう一度斃れている女性を困惑気味に見る。

病的に青白い肌。まだ息はあるようだが、微かに上下する体は悲しいまでに弱々しく、周囲に人がいることにも気づいていない。こんな人を見なかったことにするなんて…。

「あのね。その女は自ら命をたった自殺者。

憐れみをかける必要性なんて、かけらもないのよ」

大きな嘆息。鑑は死んでも直りそうにない陸の人の良さに呆れを感じつつも、目付きを若干柔らかなものにして再度彼に警告する。

「自殺…？ あ。そっか。…ってなんでそんなコトわかるんだよ」

今いる場所が（未だに信じられないけど）死後の世界だということを思い出し、そして陸は新たな疑問を投げかける。

「あら？ ドラマでよく言うでしょ。

死体って自らはなにもできないけど、多くのことを相手に伝えるもののよ」

鑑の言葉はどうしようもなく日常的で、だからこそこの場所にはそぐわなかった。

「つつ！ ばつかじゃねえの。 なにが死体だ！ この人まだ息があるじゃねえか！」

陸は弾けた。 掴まれた手を感情のまま乱暴に振り払う。

同時に鑑のことを見損なった。

不思議な雰囲気を持っていて近寄りがたい存在だと思っていた。でも、それでも冷たいヤツだとは思っていなかった。 なのに――

この人は死んだ人？ ふざけんな、まだ体だって温かいのに。目の前に困っている人がいるのに、知らんぷりなんて陸にはできるはずがなかった。

まったく似てないのに、胸元を苦しげに押さえ虫の息の女性の姿を見ると、陸はなぜか自分の母親のことを思い出した。

第十二話 転・黄泉（後書き）

ジャンルに異世界を追加しました。

またタイトルの不揃いの修正。

・・・と、の不揃いの修正。

その他文法の乱れ等。

誤字脱字の修正をしました。

ご迷惑をおかけします。

本文は変わっていないので、引き続き拙文にお付き合い頂けたら幸いです。

感想、評価、誤字脱字の指摘、お待ちしております^^

第十三話 転・墓標（前書き）

最近キャラがプロット通りじゃなくて勝手に動く^^；

第十三話 転・墓標

生命の感じられない荒野に倒れていた女性を、陸は助けようとする。

「大丈夫ですか？」

「——え……。きみは……？」

陸の呼びかけに、焦点が定まらない虚ろな目をかすかに開け、女性
は反応する。

浅い呼吸。 小鳥の囀りのような微かな声だった。

「しっかりしてください」

半ば砂に埋もれた女性の体を、陸は助け起そうとする。
恐ろしいほど軽かった。

鑑は距離を取ってただ眺めているだけで、手助けの一つもしてくれ
ない。

「——そんな……。こんな子供まで……」

……。……。そうだ……」

私は……もうダメみたいだから……、これ持って行って

この先にある川で必要らしいから……」

陸の言葉が聞こえていないのか、うわ言のように女性は呟く。

そして動くのがやつの鈍い動作でポケットから何枚かの紙を陸に
手渡した。

「これは……？」

分厚く粗い面を持った古びた和紙に、墨で数字と文字が書かれている。

昔の字のようで陸には読解できなかった。

「冥^{めい}銭^{せん}。死者に渡されるお金よ。」

川を渡る予定はないけど、お守りの効果もあるからもらっとけば？」

困惑している陸を見かねて、沈黙を保っていた鑑が口を挟む。

いささか素っ気ない態度なのは、忠告を聞かなかった陸に腹を立てているからか。

「あれ。もう一人そこにいるの？」

「……二十銭。それだけあなたを大切に思う人がまだいたのに、自ら死を選ぶなんてまるで莫^も迦^だじゃないの？」

冷淡で。冷静で。冷厳で。

だが、努めて冷たく装っているかのような色のない声で、鑑は女性に語りかける。

「……そうかもね。でも、あの人のいない世界なんてなんの意味もないから」

軽い自嘲の笑み。生そのものを拒絶するような生気のない声音。

だがそれでも清々しいまでにきっぱりと言い切って、女性はその瞳を静かに閉じた。

「ちよっ、しっかりしてください！　しっかり！　おい、諦めるなっ……！」

「もう手おくれよ。生きよーとしてないから、全身を瘴気に犯さ

れてしまってる」

石像のように冷たく動かない女性を揺さぶる陸に、鑑は淡々と冷たい事実を突きつける。

「瘴気…ってマンガとかで出てくる毒っぽい霧みたいなヤツのことか。

魔法でなんとかできねえのかよ」

「助けようとしてるのはしょーねん。

それなのに他人の力をあてにするなんて、愚者のすることよ」

人一人が死の淵をさ迷っているのに、鑑の声音はどこまでも感情がない。

機械的に声を返すように。 無機物が声を返すように。 鏡が音を反射するように。

「知るかつ！ 愚者でもばーでもどうでもいい。 助けられねえのか？」

「…どーしてそこまでこだわるの？ 赤の他人じゃない」

理解できないといった、心底不思議そうな視線。

「知るかバカっ！ 赤の他人だろうと死にそんな人をほっとけるはずねえだろっ！！」

陸と鑑は無言で睨みあう。 黒い眼と紅い眼の視線が交差する。

鑑の瞳はどこまでも綺麗で、無垢で、純粹で、けれど一切の感情を感じさせない研磨された宝石のようなもの。

その美しさはまるで無色を凍結した氷の結晶だ。

吹雪の中に体一つで放り出されたように体が震える。

自分ごときが逆らっていい相手ではないと陸の本能が悲鳴をあげる。

——だが果たして、先に視線を逸らしたのは鑑だった。

「…そんな目してもむだよ。

魂まで滅んだ存在を復活させるなんて、わたしの格じゃムリだから」

まるで自分に言い聞かせるように静かに瞳を閉じて、鑑は小さく告白する。

「ちくしょうっ」

渡された冥銭を握り締め、陸は罵声を上げる。地面を殴りつける。

目の前で誰かが苦しんでるのに、どうしてオレはなににもできないのか。

陸はあまりにも無力な自分こそが、救いようのない悪党だとは思えなかった。

何度も。 何度も。 陸は拳を地面に叩き続ける。

ケモノの様に叫び、殴り続ける。

己の無力さを嘆くように。 己の不甲斐なさを憤るように。 ただ狂ったように。

乾燥した大地は硬く、すぐに手の皮がむけて血がにじんできた。

しかし、陸はいつこうに構わなかった。

むしろ、体の痛みは望むところだった。

これは不甲斐ない自分への罰なのだから。

しかし、そんな陸を嘲笑うように、殴った側から穿たれた穴に周囲の砂が入り込み、その行為はなんの意味もなさない。そんな陸を鑑は黙って見つめる。

わが子を影で見守るように、静かに見つめている。

「……鑑。ここって悪いやつが死んだ後に通る道なんだよな」

手の感覚がなくなってきたころ、ようやく陸は無意味な自傷の行為をやめた。

静かな問いかけ。その瞳にはやり場のない負の感情が渦巻いている。

「今さらなに言ってるの？ まだ信じられない？」

「——っ！ この人、そんなに悪いヤツだったのか？」

鑑の声は冷たく変わらない。

目の前で人が死んでも平坦でなんの動揺もない。

それがなおさら、陸は悲しかった。

「さあね。なにをもって悪とさだめるか。

そんなの個人の主観でわかれるでしょ。

でも大切に思う者を残して勝手に死ぬのは、身勝手だとわたしは思うわ。

それにたとえ辛い選択を選ばざるを得なかった苦しみがあったとしても、何も得られなくなるのはきつともっとつらいもの」

突き放すように厳しい意見だったが、それでも人間味のある言葉だった。

救いを求めるように陸は視線を鑑に向け、後悔した。

物言わぬ女性を見つめる鑑の瞳は、者を物とも見ない冷たさだった。

「なんだよそれ。　そんなのってねえだろつ。　そんなのあんまり
じゃねえか！」

陸は泣きそうな声で鑑に怒鳴る。

どうしてこいつはこんな冷たい目しかできないのか。

感情の変化のない眼差しはどれだけ綺麗だろうと、まるで紅いガラス玉をはめ込んだだけの安っぽいにせものだ。

「なら……。　そう思うのなら……。　死に際さえ他人を気づかう彼女の愚かさを知ってるあなただけは、この人の冥福を祈ってあげなさい」

八つ当たり等に等しい罵声を浴びせた後、陸は気づいた。

冷たいが、努めてそう装っているように聞こえた静かな声に、なんとなくそう思ってしまった。

そんな眼差しを向けるのは人がいる前だけで、ひとりの時は違うのではないかと。

ちょうど今、紫織の傘でその白い顔を影に隠しているように、自分の弱さを悟られないように仮面を被っているのではないかと。

そうでなければ、今の鑑の姿は頼りなさすぎた。

わずかな重みにあっさりと潰れてしまふ霜柱のように。

自分と同じように己の無力さを嘆いているように感じられた。

「……。　…そうだな。　じゃあこれもらった礼ぐらいはさせてくれ」

妙な胸のわだかまりが消えていくのを感じ、幾分穏やかに陸は言う。

「最初の目的、覚えてる？」

「わかってる。でもこのまま行ったら、オレが怒りにきたはずなのに、逆に姉ちゃんに怒られちまう。知らないだろうから教えといてやるけど、姉ちゃんって怒ったらマジで怖いんだぜ」

陸のおどける様な言葉に鑑は小さく肩を竦めて、再び傘を閉じた。

長いまつ毛が伏せられ、眼が閉じられている。

好きにしろ、ということらしい。

その無言の優しさに苦笑と共に道化を演じるように大仰に肩を竦めてみせて、陸は作業を開始するのだった。

あたりを転がっていた石を積んだだけの不恰好の墓標に、陸は無言で手を合わせる。

名も知らぬ女性の冥福を祈った。

これから助けに行く紫織のことは絶対助けてみせると誓った。

鑑は手を貸してくれなかった。

でも、姉ちゃんの傘を持って自分を待つてくれるだけで十分だった。

「死とは穢れにして忌み嫌うべきもの。

でも死者のなにもほしがらず、なにも求めないさまはむしろ清い。

なら、その理から逃れようもがく生者のほうが、穢れてるのかも
しれないわね」

簡素な墓に手を合わせることなく、しかし、どこか感慨深げに鑑は
石の墓標を眺める。

「…よし。　じゃあそろそろいこつぜ」

思ったより時間がかかってしまった。
放り出した木刀を手に、陸は鑑を促す。

「意気込むのいいけど、しょーねん。　気分悪くない？」

それに、体調を観察する医師のような静かな目線で、鑑は陸に問いかけた。

「ん？　普通に絶好調だぜ。　ってあれ？　なんだ。
こんなところにも霧が出るんだな。　にしては――」

変な霧だ、と周囲を見渡して陸は首をかしげる。

いつの間にか冷たく不毛な荒野は濃い霧で隠れていた。
時折意志を持っているようにざわざわと蠢いている。

霧に白以外の色があるなんて知らなかった。

紫がかった黒だなんて、妙な動きも合わさりちよつと気持ち悪い。
恐怖半分、好奇心半分で、その蠢くかすみに触れようと陸は木刀の切っ先を伸ばす。

「触れないほーがいいわよ。　それ瘴気だから」

「へ？　へえ、これが瘴気かあ。　…って、ええ？！　もう囲ま
れてるじゃねえか」

陸の言葉どおり、周囲は黒い霧で囲まれていた。
逃げ場がどこにもない。

「自業自得よ。　しょーねんがぼーとしてる間に広がったのよ」

「マジっすか」

「ほんとと書いてマジ」

淡々としながらもものんびりとした口調で、とんでもないことを鑑は言ってくれる。

さっきから周囲を警戒していたのはこのことだったのか。

「どうして言ってくれなか…」

文句と共にすぐ間近に迫った黒い霧に距離を置こうとして、再び陸は目を見開いた。

黒い霧が意思を持った生き物のように口？を開き、鑑に狙いをすまして飛び掛ってきたのだ。

背後から音もなく忍び寄ったため、鑑は危険にまったく気づいていない。

「危ねえ！」

気づいた時には体が勝手に動いていた。

陸は鑑を庇うために咄嗟に横に突き飛ばす。

「きゃっ」

意外と女の子らしい悲鳴が聞いたのと同時に、陸は黒い霧に――
瘴気に飲み込まれる。

体調の異変は劇的に現れた。

目が潰れそうなほど痛い。

肌寒かったのが一変して燃えそうだ。

そして気持ち悪い。

自分以外の生物の体内にいるようなおぞましさ。

でもなにより、喉を襲う圧迫感が苦しい。

息を吸っているそばから逆に酸素が絞り取られていくようだ。

「あなたほんーにばーじゃなーのっ！　なんで――」

鑑が必死の形相でなにか叫んでる。　けど、陸は聞きとれない。

こんな表情珍しいから見ておこうと思うのに、よく見えない。
なにも見えない。

燃料タンクに大穴が開いてしまったように、陸の意識は急速に零れ落ちていく。

世界が深淵の闇に、先ほどより暗い漆黒に染まっていく。

第十三話 転・墓標（後書き）

ひそかにpvが1000を超えました！

読んで下さってありがとうございます。

これからも頑張りますので何卒よろしくおねがいします^^ノシ

第十四話 転・歌姫（前書き）

あらずじ少し変えました。 今回はほの甘？

第十四話 転・歌姫

。
。
。
ふと気づくと、独りぼっちだった。

あたりは真っ暗闇。

闇よりも病んだ毒々しい黒の中に自分は沈んでいた。
暗いそこには底がなく、果てもない。 だからなにもわからない。
いや。 こんな場所に自分だけが独りそこにいる。
それはたまらなく寒くて、寂しいことだった。

。
。
。

狂って叫びたくなるような孤独の中。

ふと何かが差し込んできた。

それは光。 仄かな優しい輝きだった。

閉ざされた世界が広がっていく。

意識を呼び覚ますような、清廉な音が耳朶に響く。

纏まり始める意識。 感じるのは温もりと柔らかさ。

「んっ——」

うつすらと陸は瞳を開ける。

その頭上には幻のように綺麗な少女がいた。

曇天の空から差し込む仄かな光を浴びることで、あたかも自ら淡い

燐光を放っているように美しく映える少女。
鑑？と声をかけようとして陸はその口を噤んだ。

――闇の上から光が差しこむ。

門の穴からお月様が覗いている。

だからほら 闇でも寂しくない――

とてもきれいな声だった。

身も心も洗い流されるような清流のように澄んだ声だった。
これはなにかの歌…？

――闇の中には音が聞こえる。

音のそばにはお日様が居てくれる。

だからほら 闇も怖くない――

聞いたことのない不思議な調べだった。

優しくも、力強い。 物悲しくも温かい。 親しみやすくも神秘的。

本来矛盾するものが、この歌の中だけでは背反することなく見事に調和している。

歌そのものに神聖な力が宿っていて、体に活力を分け与えてくれるようにさえ感じられた。

――闇の下には海がたゆたう。

涙の水面には泣き虫のあなたがいる。

だからほら 君は独りじゃない――

途中からは意識が戻っていたが、陸は声をかけられなかった。
ただじっとその歌声を聴いていた。
それほど彼女の歌声は美しく、思わず聞きほれてしまうものだった。

幽玄の少女の歌が終わり、ふと目が合った。

見事な黒銀の長髪が数房、さらりとほつれて陸の顔にかかる。ぼんやりとした瞳が陸を気づかうように揺れていた。

「…きれいだな」

寝転んだ体制のまま、とりあえず陸は思ったことをそのまま口にした。

「あら、ナンパ？」

それに、涼しげに鑑は応じる。いつも通りの鑑だった。

いや。普段より穏やかに見えた。

ただ判りにくいだけで、見せないだけで、本当の彼女は表情豊かなのかもしれない。

「だから違うつて。歌のことだよ。なんだよ、そのうぬぼれ」

「そ。残念。ナンパしてきたなら、捻り千切ってあげたのに」

「その細腕でなにを?!」

「いきなりやらしーこと言わないで」

「え。オレなんか変なこと言った？」

「……。しょーねんはしょーねんらしく穢れを知らないままでいなさい」

「?? 了解」

こんなやり取りも慣れたものだった。

知らず、笑みが零れてくるのを陸は感じる。

「あ。　そういえば、瘴気はどうなったんだ？」

ぼんやりとした自分の顔の映る鑑の赤い瞳を眺めながら、陸は尋ねる。

あれほど怖いと思っていたのに、今はバラの花みたいできれいに思えた。

……あの赤とは全然違う。

「あなたの体内にはいったもの含めて、抜っておいたわ」

鑑の言葉通り、周囲を囲んでいたあの気味の悪い黒い霧はなくなっていた。

どこか心配げな面持ちでこちらを覗き込む鑑の顔を見て、陸は先ほどなにがあったか思い出した。

咄嗟に瘴気から鑑を庇ったはいいいけど、逆に自分がマヌケにも瘴気を浴びてちまって、それを魔法使いな鑑に助けられたのだろう。ちよっと男の子としてかつこ悪い。

「ま。　あの女にもらった冥銭、半分ほど呪の媒体に使わせてもらったけど、あなたのぶん使ったわけじゃないから、安心なさい」

「悪い。　なにかよくわからねえけど、助かったよ」

どうやらあの女の人のものが役に立ったらしい。

本当に感謝しないとな。　逆に助けられちゃった。

「あ。　でも鑑。　こんなことできるんなら、あの人も助けられたんじゃない……」

ふと、思い至ったことを陸は口にする。

「むちゃ言わないで。　しょーねんは瘡氣に犯されてから時間も浅かったし、なにより生きようとしてた。　だからなんとかできたの」
「そっか…」

鑑の言葉は真摯で言い訳に聞こえず、陸は無粋なことを聞いてしまったと反省する。

体を包み込む温もりに身を任せながらも、陸はなにかに区切りをつけるように一度強く目を閉じた。

「それよりも。　女の子突きとばしておいて、なにか言うことあるんじゃない？」

鑑は慈しむように見つめていた眼差しを若干厳しいものに変えて、横たわる陸に問いかけた。

「…ごめん」

理不尽なことを言われた気もしたが、まだ頭がぼんやりとしていたので、陸は言われるままに謝った。

「そ。　素直でよろしい。

お礼に突きとばしたこと、セクハラとしてとがめないであげる」

「そりゃあ助かった」

助けるために突き飛ばしたのに理不尽にもほどがあった。

だが、その淡々とした言葉は鑑らしい。

そんなことを徐々に思考が纏まってきた陸が思っていたら、彼女は
その美貌を曇らせた。

「それと……ごめんなさい。 あんまりにもここになにしに来たかわかってないよーだったから、痛い目あわせてやるーと思ったけど、ちよつとやりすぎたわ」

鑑はうつむき、少女がよくするように垂れた髪で顔を隠した。

つかみどころのない言動の中にも、常に気品が感じられ堂々としていた彼女が初めて見せる頼りなさげな表情。

長い黒銀の髪が頬を擦るのも重なり、そのらしくない言葉はこそばゆい。

「あれでちよつとかよ」

思わず、そんな皮肉が苦笑と共に陸の口から漏れる。

その言葉に鑑のうな垂れた顔に血色が通う。

「一時はどーなると思ったけど、それだけもの申せるならだいじょーぶね」

長いまつ毛越しに鑑は陸を見て、労わるような手つきで陸に触れた。どこか優しげに目許を緩めて、陸は髪を梳かれる。

大自然の揺りかごの中に優しく抱かれるような感じ。

ずっとそうしていて欲しいと思うほど、それは心地よいものだった。

「って、そうだ。 瘴気があんな危ないものだなんて聞いてねえぞ。

早く姉ちゃんのところに行かねえと」

だんだんと照れくさくなってきた、なにか言葉を搜した陸は重要なことを思い出す。

それはこの寂れた場所のどこかにいる姉、紫織のことだった。のんびりしている暇などどこにもなかった。

反射的に陸は起き上がろうとする。

ここに来た本当の目的を果たそうとする。

また護れないなんてもうごめんだった。

「まだ毒気抜けきってないわ。もうちょっとじっとしてなさい」

慌てる陸を鑑は幼子を宥めるようにそつと手で制す。

「でも…」

あんな危険なものが溢れてる場所に、ドジなところのある紫織がいたらひとたまりもないだろう。

陸は鑑の制止を振り切り、無理にでも起き上がろうとする。

だが喋ることはできても、他人の体を無理やり動かそうとするように体が言うことを利かなかった。

ただ動くだけのことが、激流に逆らうようにひどく難しい。

「落ちつきなさい。瘴気は生者にとって猛毒であっても、肉体なき死者にはそれほどじゃないの。濃度の濃い場所でも三日は平気なはずよ」

「そつ…なのか？」

「それに。そんな体でいてもお姉さんに怒られるだけでしょ？」

「……そつ…だな」

その説得に納得して、陸は頭を下ろして眼を閉じた。
ふにゃんと柔らかかった。

「——ん？」

怪訝な表情でそっと片目を開き、今の状況を改めて陸は確認してみた。

鑑は正座していた。　オレはその膝に頭を乗せて体を横にしていた。

つまり、あれだ。　これって膝枕だ。

女の子のすぐ近くにいるせいかなんか花のようないい匂いがする。

その上、彼女の服装は丈の短めのワンピースのため、直に太ももが
あたっている。

すごく柔らかい。　柔らかくって気持ちいい。

まるでおっきなプリンでできた枕（テンパった彼のできる精一杯の
比喻表現）で寝てるみたいだ。

姉ちゃんに耳掃除をしてもらう時にしてもらうことがあるけど、他
の女の子にしてもらうことなんてなかった。

意識しはじめると、顔が赤信号のように急激に赤く火照ってくるの
を陸は感じる。

「？　顔赤いけど、もしかしてまだ熱ある？」

「い、いや。　いたって元気だ。　気にすんな」

覗き込まれて、余計ピンチになる。

この姿勢からだ、鑑の意外と女の子らしい膨らみが…

「む」

男のやましい劣情を見抜き、鑑はすつと糸のように瞳を細めた。

「セクハラね。これはあとで代償、要求するわ」
「ぐぬわあ?!」

突き刺さるような冷たい言葉と共に、陸は加減なく投げ捨てられてしまった。

自分から膝枕をしたくせに理不尽すぎた。
だが、痛みや怒りを感じるよりも先に残念だと感じてしまったのは男の性だろう。

第十五話 転・再会（前書き）

文章作るのがって楽しいけどむずかしい

第十五話 転・再会

体調も回復し、陸と鑑の二者は紫織探しを再開する。道なき道を歩く。

多少彼らの距離が開いていたのは、先ほどの一件を引きずってか。一面岩や砂だけで、生命らしい生命は草一本生えていない荒野をため息と共に陸は見渡す。

砂、砂、砂、そして岩。視界の果ては塵気楼のように揺らめいて曖昧。

そんなあまりに淋しい無味乾燥の世界。

傍に鑑がいなかったら気が狂ってしまっても不思議ではない光景だった。

「でもさ。地獄ってマジでヒデエ場所だよな」

場を紛らわせるように、陸は努めて明るく話題を振った。

鑑は長い髪をなびかせながら彼の隣を歩き、無表情だった。

もう少し内容を選ぶべきだったかと、陸は頬をかく。

「……なに言ってるの？ あなたたちがここをそうしたんでしょ」

ややあつて、聞き間違いかと思うほど静かな言葉が返ってきた。

「え？」

返事が返ってくるとは思ってなかったのと、その声が墓場の空気よりも冷ややかだったので、思わず陸は鑑を見返した。

丁度差された傘の影に入ってしまった、彼女の表情は窺えない。

「死後の世界にさえ差を求め、穢した咎人はあなたたち。

これは己だけは幸せでいたいと願った、あなたたちの罪過。

自分だけはきれいでいたいって天につば吐いても、結局自分に返るのに、

人の子ってほんと、どうがんばっても救えないばーたちよね」

「——っ!？」

傘が廻させたことにより、周囲を静かに眺める鑑の表情が窺える。幽かに口許を歪め、彼女は笑っていた。

初めて見た。ここまで感情をあらわにしている鑑を見たのは。陸が思わず固まってしまっほどの冷たい怒気を孕ませた清冽な眼差し。

でもそれはどこか、他人よりも自分自身の不甲斐なさを侮蔑するような、そんな自虐的な笑みにも見えた。

「な、なんだよ、それ。よくわかんねえけど、それって面白くねえぞ。

自分で自分を苦しめるなんて、そんなのまるっきりバカみたいじゃないか」

納得できず、鑑がそんな顔をするのが容認できず、諦めの悪い子供のように陸は反発する。

「…そうね。ならあなたはみんなに救いがある世界を希いなさい。

呪詛の受け皿を弱者に求めるの、わたしも嫌いだから」

そんな陸の純粹な様子に、鑑も顔つきを穏やかなものにして言の葉を紡ぐ。

「こいねがう？」

「私利私欲を持たず、純粹に強く願いなさいってことよ。
欲望に穢れた世界を変えるのもまた人の願いだからね」

単語の意味が解らず首を傾げる陸に鑑は呆れたりせず、噛み砕いて
幼児に言葉を教える母親のようにゆっくりと丁寧に言葉を重ねた。

「…それだけでいいのか？」

拍子抜けしたように、きょとんと間のぬけた顔を陸は作る。
だがしかし、願うだけで世界がどうにかなるなら、だれも苦勞はし
ないだろう。

「もちろんただ願うだけじゃだめよ。でもね、思いとは無垢の力。
行動するための意志の源となり、たとえ一つ一つは弱くても、集
まれば妖怪という生命も、地獄という世界さえも形作れてしまう。
軽んじないほうがいいわ」

不満げな陸に、鑑はそう言って窘める。

簡単だと思ふことをきちんと成し遂げることが何よりも難しいのだ
と、世の道理を説く。

「へえ、そうなのか…。 んん？ ちょっと待て。
ここって俺たちがつくったのか？」

年長者のようどこか威厳のある言葉に頷きかけて、陸は待ったを
かける。

言葉足らずの鑑の話は唐突で、とんでもないことをさらりと言います

ぎだった。

この死後の世界を自分たちが作ったなんて…。

「空を飛ばたいと願い飛行機を発明したように、想像し、創造する。

それはしょーねんたちモータータル（有限生命体）がもつとも得意とするものでしょう」

そのでの悪い質問に鑑は肯定も否定もしなかった。

ただ、敬意を示す熱を持った憧憬の眼差しで、鑑は陸を——人間を静かに見つめた。

「そう…なのか。へえ。そう思うとなんか願ってマジですげえな」

「ま。わたしがこんなこと言える資格はないけどね」

「なんでだ？ それってすごく素敵なことだと思っけどな」

「……。…。ありがとう。そう言ってくれと報われるわ」

鑑の言葉にある矛盾。

人の中に鑑本人が含まれていないという欠落。

そのことに、鑑の幻想的な雰囲気、陸は最後まで気づけなかった。ただここが、自分たちが想像した結果できた場所なのかと、陸は改めて感慨深く周囲を見つめなおす。

「んー。でもオレだったらドクロとか、血の池とか、もっとおっかねえところを想像するだけどなあ。なんもなさすぎてちよつとつまんねえぞ」

見つめなおすまでもなく、一面なにもない荒野に陸は眉を顰めた。考えてみればすごい経験をしているはずなのに、新入生合宿で山に

登った時の方がはるかにマシだった。地獄に名所を求めるのも間違いだろつが、旅の終わりを陸は感じていた。姉の紫織の気配が近い。

「ところでしょーねん。

貧相な想像はいーけど、今度こそこっちでいいのよね」

幻想的な様子など幻だったかのように鉄面皮の表情に戻り。

次間違ったらタダじゃすまさないという据わった眼つきで、鑑は陸に問いかけた。

「おう、間違いない。あっちから春みたいにぽややんと暖かい感じが伝わってくる」

それに陸は自信を持って応じる。

紫織のことを表現する場合、春のように暖かで優しいというのが彼女を知るものの共通の見解だったが、それは魂の繋がりからも感じられるようだ。

「そ。これでようやく契約、果たせるわね」

「契約…？」

オレは姉ちゃんに会いに。鑑は姉ちゃんに傘を返しに。

そつえば、こいつとは目的が一緒だから一緒に行動してるだけだったんだっけ。

じゃあ姉ちゃんに会えば、この不思議な少女ともお別れになっちゃうんだな。

少ししんみりとしたものを感じ、芸術的な仮面のような鑑の美貌を

陸は見つめた。

…思えば、オレはこいつのことをなにも知らない。

「鑑。あのさ…」

「——いた」

陸の歩み寄りを置き去りに、端的にそれだけを言って鑑は足をとめた。

そのぼんやりとした瞳を眇めて、真っ直ぐに前を見つめている。

「あ」

そして陸も遅れて気づいた。

夕暮れ時のような視野の悪い仄暗さの中。

小柄な人影が、大きな岩を背にしゃがみ込んでいる。

一歩ずつ。一歩ずつ。その姿を見失わないように。

幻として消えてしまわないようにじっと見つめながらゆっくりと陸は歩み寄る。

「……姉…ちゃん…？」

彼の声が掠れる。思考が纏まらない。

それでも足は独りでに動き、人影がだんだんはつきりと見えてくる。

あの日着ていた学校指定の紺のセーラー服。

セミロングの艶やかな黒髪は、黒珊瑚の宝石のように優美で繊細。

飾り気のないゴムで後ろに一房に纏められている。好んで彼女がする髪型だ。

ただ、美しいというより可愛らしい。

見るものを安心させる温和な美貌も、今は焦燥気味に顰められている。

それでも、ここまで来て見間違えるはずがなかった。
大好きな自分の姉——紫織を、陸が間違えるはずがなかった。

「姉ちゃん……」

その小さな囁きが風に乗って紫織に届いたのか、彼女の視線がゆっくりと陸に向く。

「——え？　陸くん？」

大きな瞳が驚愕によって更に大きく見開かれる。

「——姉ちゃん！」

その言葉に、なによりも聞きたかった紫織の言葉に、陸は我を忘れて駆け出した。

力の限り足を踏み鳴らし、乾燥した大地に足を取られながらも駆けぬけ、わき目も振らずに一直線に彼女の元を目指した。

そしてその胸に飛び込む。

雨に打たれた子犬が温もりを確かめるように、顔をこすり付ける。
体が冷えていて酷く頼りなかったけど、彼女は確かに存在した。

「あつと。　もうー、甘えんぼさんねー。」

でも、どうして陸くんまでこんな所にー？」

陸は紫織に慈しむように優しく髪を梳かれた。

疲れを滲ませていたが、そののんびりとした声はいつも通りの紫織だった。

その労わるように優しくな声はどこまでも陸を癒す。

「ばっか…じゃねえの。 迎えに来たからに決まってるだろ。
ほんと、ばっかじゃ、ねえの」

嬉しすぎて頭にきた。

言いたいことがたくさんあったのに、怒りたかったのに、うまく言葉が出てこない。

呼吸が纏まらず、涙で視界がぐちゃぐちゃになる。

こんな場所で泣いていたらダメなのは分かってる。

でも、もう少しだけこの温もりを味わっていたかった。

そんな陸を、子供をあやす様に紫織は撫で続けた。

「落ち着いたかしらー？」

陸は紫織に抱かれて、一生分泣いたような気がした。

花柄のハンカチでクシャクシャの顔を拭われる。

本当に今日は泣いてばかりだ。

「——ん」

小さな頷き。 しょっぱい味のする唇を舐め、陸は喉を鳴らした。

「それでその服どうしたのー。 血だらけじゃない。 怪我はないの？」

大部分が血に染まった学生服を心配げに眺め、紫織は己のことより陸のことを気づかう。

変わらぬ彼女に、陸は安堵した。

目にまた温かいものがこみ上げる。

「えっと…まあ色々あつて、その…ちよつと油断しただけだ」

本当のことを言つて余計な心配をさせる訳にはいかず、陸は目を腕で擦りながら下手くそに誤魔化す。

「むむー。悲しいなー。陸くん、お姉ちゃんに隠し事するようになったんだー」

「う。ああもう。後でちゃんと説明するから」

説教しにきたはずなのに逆に説教されそうだった。

紫織の手を引いて、そんなことより早く家に帰ろつと言おうとした時――

「感動の再会のところ悪いけど、そいつを連れて行かれるわけにはいかないんだよなあ」

突然の第三者の声が割り込んだ。

耳障りな甲高い男の声が、陸の言葉と思考を奪った。

冷たい風が荒ぶ。平穏で温かな空間は唐突に破られた。

第十六話 転・元凶

「感動の再会のところ悪いけど、そいつを連れて行かれるわけには
いかないんだよなあ」

陸の頭上。紫織が寄りかかっていた岩の上に、声を発した者が騙し絵のようにゆらりと姿を表した。藍色の着物に身を包んだ、古風な少年だった。

年の頃は陸と同じほどか。

小柄な体躯は活発で俊敏そうな印象を与える。

乱雑に切り揃えられた鮮血のように赤い赤髪の下に、朱色の瞳が獐猛な光を放つ。

鑑の瞳がルビーの冷たさなら、この者の瞳は燃えさかる炎。

不用意に近づけば害されるような、猛悪な気配を放っている。

そんなあやしい少年が、岩の上に胡坐を掻きながら頬杖をつき、意地悪げな笑みを零していた。

「——誰だ。オマエ？」

泣き顔を見られた恥ずかしさに顔を朱に染めながらも、当然の疑問を陸は投げかける。

「おいおい、つれないなあ。

俺のことチビ呼ばわりしたくせにもう忘れちまったのかい？」

陸の問いに大仰に肩を竦めて見せて、小ばかにするように古風な少年は鼻で笑う。

どこか芝居がかったそれは中身のない仕草だった。

「へ？ なに言ってるんだ。 オマエみたいなヤツ見たの……」

不吉な朱色。 その薄笑いを見つめた時、陸のこめかみに走る痛みと既知感。

襲い掛かる雑音。 悲鳴。 ツギハギの映像。 川面。

…オレはこいつを知っている？ どこかで会っている？

でもなにより、決して相容れることのできない不快感が陸の体を支配する。

「オマエ——！」

「へへっ。 そうさ。 俺は……」

「こら、君！。 そんな所にいたら危ないわよー」

視線を逸らした瞬間、喉笛を噛み切れそうなほど緊迫した場。 それにまったくそぐわないのんびりと間の伸びた声が、古風な少年の台詞を遮った。

紫織だった。 危なげなく岩の上に座る少年を、それでも心配そうに眺めている。

「はぁ？ おまえさん、他人の心配なんかしてる余裕あんのかよ」

これには古風な少年も面を食らったように目を見開き、不機嫌そうに柳眉を逆立てた。

「危ないわよー？」

再度注意。 それに親に悪戯が見つかった子供みたいに古風な少年は体を震わせた。

「う。ご、ごめん。今下りる」
「気をつけてねー」

紫織の声音はとても優しくかったのに、隣にいた陸まで妙な寒気が走った。

見る気はなかったけど、隣ではとてもとてもきれいな笑顔で紫織は微笑んでいるだろう。

通称“ほほえむてんし”

悪戯鬼で悪戯ばかりする陸の面倒を見る紫織が自然と身に着けた静の怒りの具現。

相手が悪いことをしても認めない時に現れる、この状態の紫織には絶対に逆らったらいけないことをこの少年も本能的にわかったようだ。

腹ばいになり、不服そうながらもゆっくりと這いずるように赤毛の少年は岩から下りる。

「——ごほん」

微妙な雰囲気振り払うように古風な少年は古臭く咳払いをした。
だが、なにか言おうと口を開いたとき——

「危ないからもう登っちゃめーよー？」

片手を腰に当て、人差し指を突き出し、めつと優しげに紫織は古風な少年を叱りつけた。

完全に子供扱いされた少年の額にきれいな青筋が一筋。

ふんわりとした穏和な気配を振り払うように、大きく二度咳払いし

て――

「もう。 めーよー？」

再度、紫織はピンと指を突き立てる。 トドメだった。

これで彼女の聖域である台所ならば敵なしだろう。

お玉を装備した紫織は、木刀で武装した陸よりも精神的にも物理的にも強いのである。

この状態の紫織が相手の場合、陸はつまみ食いなど行儀が悪いことをできた試しがなかった。

「むぐつ。 ご、ごめんなさい」

その仕草には逆らえない魔力が秘められており、燃えるような赤毛の少年も素直に謝る。

「はい。 よくできましたー」

完璧にはほえむてんしモードの紫織の独壇場だった。
しょぼんと古風な少年は項垂れている。

「……オマエさ……なにしに來たんだ？」

まあそうなるのもわからなくもねえけど、という陸の呟き通り、

颯爽と登場したのに、着物の少年はまったく主導権を握れていない。

「君、お名前はー？」

「烈^{れつ}だ」

下手に逆らうよりも流れに身を任せた方が話も進むと思ったのだろ

う。

紫織の問い掛けに、素直に古風な少年——烈はぶつきらぼつにそう告げた。
名前だけを。

それに陸はイヤな予感がして、無意識の内に紫織の手を握った。
そして、反対側の手でぎゅっと木刀を握り締める。

ごく最近、名前だけで名字を名乗らなかった者を陸は知っている。
そいつは魔法のようなとんでもない力が使えて、とんでもなく危ないところがある頭のネジがぶっ飛んだヤツなのだ。
そういえば、鑑のヤツはどこに行ったんだ？

「わたしは久遠院紫織。　この子は弟の陸よ。　よろしくねー」

「……」

鑑のことを知らない紫織は、暗い曇天の空を払うような暖かい笑顔で自己紹介を始めた。

「ところで烈くん。　ここってどこだかわかるー？
さつきから歩いてもなんにもなくて…」

陸は自分の姉ののんびりさに感心する。

さすが姉ちゃんだ。

自分が地獄への通り道にいることさえ気づいてなかったようだ。
同時に、いつも通りのようにほんわかしている理由がやっと分かった。

「くふつ。　あはは」

それは烈も同様だった。

烈の顔が無知な獲物を前に愉悦する狂人のように歪む。
狡猾な悪魔のように冷たく笑ったのだ。

「ここは蒙昧な人間が人知れず訪れる地下世界さ。
ようこそ、哀れな客人まれびとさん」

深々と大袈裟に烈は一礼。

それは無垢で蒙昧な獲物を齧って遊ぶような、慇懃無礼な態度だった。

「なっ。　じゅ、獣人？」

そして陸の驚きの通り、頭を下げた烈の赤髪からピヨコンと耳が生える。

横にある人間の耳とは異なる、二等辺三角形の默然とした耳が二つ。
付け耳かとも思ったが、その赤毛の大きな耳が周囲の様子を窺うように忙しなく動いていることから、ありえないことに本物らしかった。

「え？　そ、それ本物？」
「当たり前だろう」

ふふんと得意げに鼻を鳴らし、先っばが二股に割けたシツポを自在に動かす。
こんなシツポと、耳を持つ者はたとえどれだけ人間に似ていても…
違うモノだ。

が。　烈は動揺し狼狽するものだと思ったのだろうが、雲行きが怪しい。

獣耳に尻尾を持った亜人。

マンガやゲームの世界の空想上の生物を見ても、紫織は言葉以上には動揺していない。

いや。寧ろ好奇心を刺激され、幼子のように眼を輝かせた。

「うわー。うそ、うそつ。すっごいー。ちょっと触ってもいいー？」

強く警戒する陸をよそに、その耳と尻尾に触れたそうに紫織は手を忙しなく伸ばす。

女の子らしく可愛いもの好き。

そして大抵の物事では動じず、“へーそうなのー”ですませてしまふ紫織のゆるい性格が遺憾なく発揮されていた。

「ちょ。やめつ、ろ。そこ、ふみい！！ら、らめつ？！」

「きゃー。やだ、なにこれー。もふもふしててあったかいー」

「……なにやってるんだよ、姉ちゃん」

陸が軽い嫉妬を覚えるぐらい平和なじゃれ合いだった。

でもその幸せそうな顔はどこか…。

「——このっ、気安く触るなっつー！！」

正しく愛玩動物を愛でるかのごとく撫で回す紫織に、烈は切れた。卓袱台があればひっくり返しそうな勢いで、吼えたてる。

「あつ、ごめんなさい。痛かったー？」

烈の抗議にすぐに自分の過ちに気づき、紫織は申し訳なさそうに顔を沈ませる。

ただ変わらず紫織は烈の頭を撫で続けていたが、若干優しく労わる

ような手つきになっていたのが反省の表れか。

「いや、案外気持ちよ……じゃなくって。

そんなことより他に聞くべきことがあんだろっ！

なんで獣の耳持つてるんだとか、おまえ何者なんだとかさあ。

他に何か無いのかよ」

調子を狂わされる紫織の様子に、烈はたじろぎつつも尤もなことを言う。

「……」

そんな二人の様子を陸は頭を押さえながら見つめる。

ただ烈を見つめる。

言いようのない不快感。頭を締め付けるような、鈍痛を陸は堪える。

ケーキ。

試験明けの学校。

帰り道。

買い物。

一緒。

プレゼント。

川

原。

その朱色の瞳がなにか映像を映しているように、昨日の空白の記憶がバラバラに再生されていく。

まるでぐちゃぐちゃで入りきらないおもちゃ箱。

鈍痛は、記憶が紡がれるに連れて吐き気と共に白熱していく。

「えーと。じゃあ烈くんって何者なのかなー？
わたしたちのこと知ってるみたいだけどー」

小さな子供を見守るような柔らかな微笑み。

「む。…ふう。まあいいか。

連れない態度だけとこうして遭うのは二度目だぜ」

「え？」

「俺は昨日川原で困ったふりをしてたあの猫なのさ。

あの時は助けてくれてありがとよ。

おかげでノルマがこなせたってもんだ」

子供の遊びに付き合う年長者のような態度に烈は不機嫌そうに眉を寄せたが、相手を驚かしたいという気持ちで勝ったのだろう。

シッポと耳をこれ見よがしに動かし、意地悪げに眼を眇めて己の正体を語った。

自分が、陸と紫織が溺れ、すべてが絶望に染まった時の元凶だと酷薄に告げた。

「あらー、あの時のー。ずっと心配だったけど、よかったわー」

それに、雨に濡れた花のように麗しげな笑顔で紫織は安堵の息を漏らす。

陸が来てからずっと変わらない微笑。

「反応薄っ！ しかも納得してそれかつ？

おいおい、俺はおまえさんを溺れさせて殺したんだぞ。

もっと驚いたり怒ったり怨んだりしてくれないと張り合いがないだろ」

相手の息災を心から喜ぶ人の良い顔に、烈は困惑気味に声を荒げる。

「何言ってるのー？ わたしここにいるよー。 それよりさー。」

ねえねえ、地下世界ってことはここがああの御伽の国なのかしらー。

一度行ってみたかったんだよねー。

帽子屋さんとか赤の女王さんとかってどこにいるのー猫さん？」

年長者のように見えたのも、この三者の中での話。

そのきよろきよろとした大振りな動作は、十五歳になりながらも絵本の世界に憧れる童女のそれだった。

「それは不思議の国のアリスだつ。 ここは地獄への入り口――
闇穴道だよ」

ここまで脳天気で本当にこの女大丈夫なのかという暗澹たる眼差しで烈は訂正する。

「え。 地獄？」

その言葉に紫織の瞳が大きく揺れた。

初めてその笑顔さえもが困惑に曇った。

「そう、地獄だ。 罪人が落とされる死後の世界だよ」

紫織の様子に、やっと分かったかと、したり顔で烈は頷く。

「あうー。 じゃあわたしやっぱりの時死んじやったんだー。

どうしょー。 ケーキ食べ損ねちゃったよー」

「軽っ?! まず気にすることがそれかっ!？」

眞実を知ったとき、とある男は憎悪に瞳を燃やし襲い掛かってきた。

とある女は絶望に声を枯らして泣き崩れた。

なのに——なんなんだこの女？

今まで見てきたどのような人間にも該当しない紫織の応対に、烈も調子を狂わされっぱなしだった。

第十六話 転・元凶（後書き）

そろそろ物語も佳境へ入ります。

でも慌てず自分のペースを守ってゆるゆると執筆していきます！。

こんな作品ですが、評価、感想、アドバイス、誤字脱字のご指摘等、
ございましたら、ぜひ下さい^^

作者の養分になりますので（笑）

第十七話 転・火車（前書き）

そろそろバトル展開が出てくるかも。

第十七話 転・火車

一見して、自分が死んだのだと告げられても衝撃を受けず、ほんわかとして見える紫織。

「――」

だが肩すかしを食う烈をよそに、陸は不快感も露に齒を磨り潰すほど強く噛みしめた。

違う。オレはこんな笑顔が見たかったんじゃない。

彼女の笑顔はいつもと異なる、触れれば簡単に壊れてしまうような儚いものだった。

それは自分の為に笑うのではなく、“人の為”に笑う“偽り”の笑顔。

隣にいるオレまで不安にさせないための優しい嘘。

こいつは姉ちゃんと会うのが初めてだから、どれだけ困っているかわかっていない。

どれだけ悲しんでいるか、まるでわかっていない。

オレに悟られるほど肩を頼りなく震わせてた時なんて、片手で足りていたのに――！

「大丈夫だ、姉ちゃん。オレはここにいますから、心配すんな」

「――陸……くん」

紫織よりもずっと下手な“偽り”の笑顔を浮かべ、陸は自分の姉の手をそっと握り締める。

寒い荒野にずっといたためか、その手はとても冷たかった。

あるいは、これが死人の体温なのか。

でも、それでも、ここにいた。
確かにここにいて、陸は安らぎを感じることができた。

脳裏に再生される断片的な映像が纏まってくる。

陸の忘れていた記憶の再生と共に、頭痛が少しずつ収まっていく。
変わりに燃えるような激情が身体を支配した。

……こいつは聞き捨てならない台詞を吐いた。
薄ら笑いをしながら、姉ちゃんに…。

「オマエさ。 さつき言ってたノルマってなんだ」

静かに。 せめて言葉だけは静かに。

だが、沈黙を決して許さない強い眼光で、陸は烈に問い掛けた。

（……ちなみにそれは苦手な横文字の意味の確認のための二重の質問でもあった）

「ああよかった。 そっちの餓鬼はまだ話が分かるみたいだな。

俺は火車猫^{かしゃねこ}って妖怪。 死体を運ぶのが仕事なのさ。

ゲームや漫画でよく出てくる人に仇なすバケモノだって認識で構わないぜ」

嗜虐的な薄ら笑いと共に、とんでもない素性と明かす烈。

科学万能の世界で、その正反対の御伽噺の空想の存在だと告げる。

「妖怪…なるほどな」

だが、その告白を陸はあっさりと納得する。 むしろすつきりと得心がいった。

だって、妖怪といった人でなしでもなければ、姉ちゃんのようなお人好しをここまで悲しませることなんてできるはずがないから。

「おいおい。自分で言つといてなんだけど、おまえさんまでこんな眉唾もんなことをあっさりと信じてくれるのかい？」

「こんな場所があるんだ。妖怪なんてヘンテコな生物がいたって不思議じゃねえだろ」

それにさっきまでもつと不思議な存在がいたんだ。

この程度のことでしかもオレは驚かない。

驚いているぐらいなら…。

「くはっ、違うない。近ごろの餓鬼にしたら素直でいいな」

目の前にいる男は軽薄そうに見えるが、紫織に危害を加えた存在なのだ。

また危害を加える危険の高い人外なのだ。ならば、オレが護らないと。今度こそ。

烈のことを警戒し、陸は庇うように危機感の薄い紫織の前に立った。

「まあでも最近地獄も不景気で仕事がなくてね。

仕様がなく現世まで出張営業してたところに、馬鹿みたいに引つかかってくれた力モがおまえさんたちさ。

くふっ。あの時のおまえさんの顔、最高だったぞ。

奪うまでもなく魂の抜けたような様子だったもんなあ」

愉悦を潤滑油に烈は饒舌に語る。

顔は笑いつつも、朱色の瞳は興奮に燃え上がり、飢えた獣のように炯々と輝いている。

「——っ！」

その言葉に陸の視界が真っ赤に染まる。

その不吉な笑みに、陸はあの日のことを全て思い出す。
川原で助けようとした仔猫のことを思い出す。

同時に煮え滾るマグマのような怒りが陸の体を支配する。

……こいつはいつたいなにを言ってるんだ？

オレを溺れさせといて。

姉ちゃんを溺れさせておいて。

たくさんの人を悲しませておいて。

姉ちゃんを殺しておいて。

それが、仕事だって？！

「ふざけるなっ！！ オマエのこと助けようとしたのに。 それなのに、なんでっ！」

陸は爪で皮膚を破るほど強く、手を握り締める。

激情のままに、左脇に抱えていた木刀に手をかける。

「そう熱くなるなよ。 それが仕事なんだから致し方ないじゃないか。」

それに俺たちは妖怪。 おまえさんたちは人間。

元より永遠に敵対しあう種族同士。 恩を仇で返すのは当たり前だろう？」

烈は運命を嘆くように肩を大仰に竦めてみせる。

その動作と異なり、目は獲物を狙うように虎視眈々と陸を射竦めていた。

「そっかよ」

陸は久しぶりに。
それこそ悠也に授業参観に親が誰も来なかったことをからかわれて以来久しぶりに。
このくそ生意気なガキをコテンパンに叩きのめさないと気が済まなくなつた。

「でも、なんでお前さんは肉体を持つてゐるんだろうな。
そもそも死んでなかった筈なんだけど…」

ま。　いいや。　おまえさんも殺して丁重に運んでやるよ」
「……」

烈の残忍で悪意の籠つた言葉に、陸は無言で木刀を構える。
殺す。　偽りでも冗談でもない本気の殺意が滲んだ言葉を耳にしても、陸は逃げるなんて思考が思い浮かばなかった。
それほど精神が高揚しきつていた。

「こらっ、何やってるの、陸くん。　烈くんも喧嘩しちゃダメよ」
「……姉ちゃん？」

その昂ぶりを鎮めたのは紫織の一言だった。
コッソリと陸の頭に添えられた小さな重みが、陸の動きをとめる。

「んだよ。　良いところなのに、邪魔する気かい」

肉食獣のように窄まつた瞳孔。

折角のご馳走を横取りされた猛獣のように、烈は不機嫌げに凄む。

「喧嘩しちゃダメよー」

臆さず再度注意。

が、今度はその声は届かない。

常識では計れない世界では、常識的な紫織の言葉は通じない。

「はんつ。怒りたければ怒れよ。俺は俺より強いヤツにしか指図は受けない」

それは虎という猛獣を成長した後も叱りつけようと虚勢を張る愚劣な猫。

その力関係を理解していない無様さを烈は咎めた。

銀の閃光が宙を滑る。

「——え？」

はらりと舞い広がる紫織の髪。

気づいた時には、彼女のゴムの髪留めが吹き飛んでいた。

それに呆然と立ち尽くす紫織。

目で見えても、突然の害意に体が反応できなかったのだ。

狂気に充ちた凶器に、平穩に暮らしていた彼女たちが対応できるはずがなかった。

「来世に渡りたければそこを退きな。次は当てるぞ」

その惨劇を巻き起こしたものの。

それは烈の両手に掲げられた十本の銀の煌きだった。

爪。

収納されていた彼の爪が、肉食獣らしく鋭利に伸びて凶器と化したのである。

「——っ?!」

長く尖った硬質化した爪は、ナイフを持った狂人よりも原始的な恐怖を誘う。

なぜならその力は借り物ではなく自身の身体の延長線上。存在そのものが恐怖なのだから。

「デメエ——っ!」

紫織を傷つけられて激怒した陸は、そんな烈に技も考えもなく飛びかかるうとする。

「ダメ、やめて。お願いだから喧嘩しないで。

死んだのはわたしだけなんでしょう? 陸くんには手を出さないで」

髪留めを飛ばされ、頬に赤い筋を作りながらも、それでも紫織は姉らしく健気に陸を引き留める。

それは精一杯の虚勢。足が小刻みに震えていた。

ほんわかとしていても聡明な彼女だ。

状況なんてとくに理解できていたのだろう。

背丈では弟の方が高くても、人間の陸では妖怪の烈には敵わないということを。

烈の機嫌一つで、今度は弟の命が失われるということ。

「はっ。俺は優しいから二人仲良く連れて行ってやろうっていうのにわからない女だな」

紫織が初めて見せた凡俗で無力な人間の反応に、烈は齒をむき出し

にして残忍に嘲笑う。

刃物そのものの爪を突き出し、低く構え、まず陸の喉笛に狙いを定める。

理不尽に死した彼女を更なる絶望の淵に落とそうとする。

「下がってろ、姉ちゃん。こいつまともじゃない」

死を拒む抵抗。

陸の構える木刀など、烈にとって藁くずにも満たない玩具だった。獲物を前に間合いを計る肉食獣のように、烈は足を屈める。

「やめて——」

争いを望まない紫織の悲鳴は届かない。

その凶悪な爪が、反応さえ許さず陸の命を刈り取るうとしたその刹那、

「そこまでにしときなさい」

清廉な鈴の音と共に凜とした女性の声が響いた。

常識では計れない世界では、常識的な紫織の言葉は通じない。

故に、通じるのは同じく非常識の存在だった。

幻想的な白い少女が悠然と現れる。

第十八話 転・番兵（前書き）

何とか折り合いをつけたと思っていた病が確実に悪化。
小学生の時に既に発病してたから今さらですけどね^^；

第十八話 転・番兵

紫織の必死の懇願も空しく、陸の命を刈り取るべく襲い掛かろうとする烈。

そこに白い少女が現れる。

「弱者しかいたぶれない三下って見苦しいわよ」

その声は、頭上の灰色の暗雲にも似て、ひどく冷たいものだった。黒銀の長髪を幽玄の如くなびかせ、清廉な鈴の音と共に一步。また一步。

彼女は緊迫した場にはそぐわない静かで優雅な足運びで、突然の介入者の登場に固まる陸たちの間に悠然と割って入る。

白い少女——鑑は陸と紫織を庇うようにその前に立つ。

そして赤い猫の亜人——烈が相手でもまったく臆さず、獰猛な視線を受け止め笑みを零してみせた。

「オマエ。今までどこ行って……」

「これ。持ってて」

陸の疑問に鑑が答えることはなく、一方的に紫織の傘が陸に手渡される。

その横顔を、その瞳を見た瞬間、陸の背筋が畏怖に粟立った。

烈の時には感じなかった、逃げたいという本能が体を支配した。なんの感情も持たない眼。興味すら抱かない眼差し。

静かに静かにありのままのすべてを映している。

何かを諦めたように。もう何も望まないように。

だから彼女の目に留まる者は、そのままその冷艶な瞳になにもかも吸い込まれて消されてしまいそうな、そんな原始的な恐怖がソコに

はあつた。

「あん？——また罪深い人間……じゃないな。何者だい、おまえさん？」

玩弄するだけの獲物を前に再度邪魔。

亡霊のように現れた鑑に視線を向けた烈は、不愉快な感情を隠さずその瞳を滾らせた。

妖怪という強靱な生命にはわからないのだろうか？

砂漠の渴きにも似た、鑑の果てしない空虚さが。

清廉な眼差しの奥に潜む、命ある者を形ある物とさえ見ない冷酷さを。

「ぱーね。謎は謎のままのほーが世界は美しく映るでしょ。

だからあなたはなにもわからないまま醜くしっぱをまいて失せなさい。

今なら追わないであげるわよ」

挑発を乗せた薄い笑みを口端に乘せて、白い少女は憫笑する。

「はっ。よくわかった。おまえさんも挽肉にした後、纏めて運んでやる」

獲物を前に高揚しきつた精神。

暴力的な妖怪の嗜好に赤い獣人は身を委ねる。

突如現れた正体不明の存在への疑問など最早些末なこと。

鑑を仕留めるべく、烈は獣そのものの勢いで呐喊する。

「どいてて」

「ぬおっ?!」

「——陸くん？」

鑑に突き飛ばされ、意思を持たないマネキンのように陸は惨めに地面を転がる。

その間に烈は、赤い流星のように残像を残す疾さで鑑に駆け寄る。

紅白が交叉する。

烈は鋭利な爪を刃物のように尖らせ、振り上げた腕を勢いのまま振り下ろす。

たったそれだけの動作。　それだけで人を殺すには十分すぎる一撃だった。

人体を細切れにするべく振るわれた烈の凶悪な一撃は、大地をバタ―のように滑らかに引き裂き、あたかも古の恐竜が引つ掻いたような生々しい傷跡を地面に残す。

だが、そこに鑑の亡骸はない。

彼女は五体変わらず大地に足を降ろしている。

「……焰火の術も使えずただの呐喊。

若いとは思ったけど、ほんとにうまれたばかりなのね。

これじゃさけるまでもなかったわ」

流水が流れるような洗練された足運びで、雲が流れるように滑らかに後退した鑑は、小さく嘆息する。

剥き出しの獰猛な感情も露わにうなり声を上げ、されど烈はその場から動かない。

動けない。

獣のように這った姿勢のまま、未知の戦力を推し量るようにじっと鑑を窺っている。

「こないの？　格下のくせにしかけないなんて下策よ」

そんな烈に対し、鑑はあからさまな挑発を浴びせる。

「——っ。まぐれで避けたヤツが図に乗るなっ！」

踏み込むのを躊躇わせる理性よりも、妖怪としての矜持に烈は弾けた。

大地を震わせる雄叫びと共に、烈は鑑に疾駆する。

その体を置き去りにするほどの速度は、陸の動体視力では捉えられないほどの魔速。

「死ねっ！」

正しく赤い烈風と化した烈は、今度こそ反応さえ許さず鑑を細切れにする——はずだった。

その返答は肉を裂く柔らかい音ではなく、鋼を打ち鳴らすような硬質な音。

聞こえたのは鼓膜を引っ掻くような女性の叫声ではなく、驚愕する男の野太い声。

「ほら。よけるまでもない」

涼やかで艶のある彼女の声は、今や悪意の冷たさしかない。

烈の斬撃を拒んだもの。

それは鑑と烈の間に突如現れた、厚みを持たない平面の盾だった。宙に浮かぶそれを形作っているのは絢爛たる銀の光の奔流。

文字と図形が複雑怪奇に刻まれた幾何学的な円——魔方阵の盾が両者の前に現れ、強力な防御壁として烈の攻撃を阻んだのである。

「あがつー!!」

銀の魔方陣の盾によって、蜘蛛の巣に絡め取られたように動けない烈。

抵抗のできない彼に零距离から鑑の掌底が繰り出される。

震動。 あっさりと烈は吹き飛ばされ、川面を跳ねる飛び石のように無様に転がっていく。

「ぐつ。 ちくしょうっ！」

罵声と共にバネ仕掛けのように跳ね上がり、烈は再び鑑に襲い掛かる。

今度は直線的ではなく曲線的。

ジグザグに。 不規則に。 変則的に。

疾風の足を持って攪乱しながら疾走する。

亡霊じみた奇怪な動きから繰り出される、死角を狙った魔速の一撃。

それを――

「畜生はあなたでしょ？ 芸がないわよ」

失望か。 短くそう囁いて、鑑は烈を軽く弾き返した。

それだけでワイヤーに吊されたように人間大の物体が大きく吹き飛ばぶ。

格が違った。 人の恐怖の具現たる妖怪をまるで子供扱い。

戦いにすらなっていない。

「…… やっぱ鑑ってマジで強かった」

己の無力さに陸は齒噛みする。

鑑の強さは圧倒的で、助太刀する必要性はどこにもなかった。

「ちょ、ちよつと陸くん。あの子一体誰なのー？ わたしもう何が何だか…」

突き飛ばされた陸を助け起こした紫織が、困惑気味に事の成り行きを見つめている。

「心配すんな。ちよつと物騒なヤツだけど、すつげえ頼りになる味方だよ」

血糊の付いた学生服を引っ張って陸は苦笑した。
奇妙な絶対の信頼を寄せる陸の言葉通り、決着はすぐについた。
鑑の洗練された攻撃は烈に付け入る隙を一切与えず、猫妖怪をゴミ屑のように吹き飛ばした。

「く…そつ。ただの漬垂れの餓鬼がどうやってこんなところまでこれたかと思っただけど、とんでもねえバケモノに力借りやがって。

あんた、その餓鬼からいったいなにを代償に奪ってこんな茶番を引き受けたんだい？」

荒い息。力なく垂れ下がった耳と尻尾。

その脅えが混じった言葉と焦燥した表情には先ほどまでの不敵さがなく、余裕がない。

両腕の十本の爪、その悉くを根本からへし折られ烈は満身創痍だった。

「母^{おも}の乳も恋しいような童妖怪^{わっぱ}風情は口の利き方も知らないようなね。

潰されて蛙のように啼きたいのかしら？」

視線で人を殺せるとはこのことか。光を纏う鑑の周囲が屋気楼のように歪む。

その鋼よりも玲瓏に澄んだ声には本物の殺気が滲んでいる。

あの、なんの躊躇もなく陸の腹を貫いた時の鑑だ。否。それ以上の異常だった。

「か、鑑？ もう…いいんじゃないか？」

思わずそんな声が陸から漏れる。
姉を奪った怨敵なのに、思わず取りなしてしまうほどの恐ろしさだった。

「あら。もういいの？」

怯える陸を横目に、理性の乏しい淡々とした口調で鑑は確認した。
鑑の前に何重にも魔方阵が展開され、凶悪な光が烈を狙っている。

「殺しちまう…のか？」

「あら。殺さないでいいの？」

疑問に疑問が返される。怨みを晴らさないでいいのかと短く問い掛けられる。

それに陸は躊躇うように喉を鳴らした後、小さく首を振った。
左右ではなく前後に。

——怒っている。怨んでもいる。当たり前だ。

でも、だからって殺すのはなにか違う。
それじゃあ相手と同じだ。

それに、姉ちゃんはどこにいるんだから。

オレが代わりに言わなかったら、

このお人好しは間違いなく止めているだろうから――

「ぱーばかりね」

そんな二人の様子を眺め、鑑は呆れの混ざった大きな溜め息を隠そうともせず吐いた。

自分に言い聞かせるように瞳を大きく閉じて、鑑は前方の魔方陣を霧散させる。

「この子たちに感謝なさい」

円を象った指を鳴らし、鑑は戦闘態勢を解いた。

「くそつ。　ふざけるなつ。　なんであんたほどのやつが人間なんかに従って、人間の味方みたいなことやってるんだ。　こんなの完全に俺たちのあり方から反するぞ」

信じられないといった面持ちで、烈は幼子のように喚き散らす。

「どつちが。　それにわたしも職業病のよーなものよ。」

たとえ廃れよーと、貸しがなかるーと、民草を護るのはわたしの役目だからね」

路傍の石を見下ろすかのような温度のない目で、鑑は冷淡と語る。気が変わらない内に去れとその冷徹な眼差しが語っている。

「なつ。　あんまりにも穢れがなさ過ぎて妙だとは思ったけど、あんた……？」

しかもこれだけ力があつてはぐれ者：だと？
いったいどんな咎を犯せば廃れるんだ？」

「……」

そのうわ言のような烈の呟きにほんの一瞬、苛立たしげに鑑はうすく唇を噛んだ。

だが、隙を窺う烈の目は見逃さなかった。

確信を得るには十分すぎるほどの表情の揺らぎを、見逃すはずがなかった。

「……いや。ここにあんたがいる。それだけで理由は十分か。

ははっ。でもなんだ、そういうことだったのか。

あははっ、おまえ死ぬ気だったのかよ」

「……」

「死ぬって…？」

耳障りな嬌声が烈の口からくつくつと洩れる。

鑑の怒気を含んだ冷たい視線に烈は無様に退散するのではなく、水を得た魚のように活力を取り戻す。

そんな二者を陸は困惑気味に見比べる。

「まったく、阿呆すぎるぜ。常に中立であるべきあんたがここに来る。

それが何を意味するか知らないわけでもあるまいに。

そんな餓鬼共にいったいどんな情があるんだい」

「……」

なぜか逆転して見える力関係。

烈を圧倒し有利なはずの鑑が逆にわずかに眦を吊り上げ、怯んでいるように陸は感じた。

「莫迦が。この現代に、それでもわざわざ人間相手にそこまでしてやる律儀なやつが残ってたなんて、完全に盲点だったよ」

「……よく轉るのね。そんなに舌、抜きたいのかしら？」

「はっ。泰山府君でもないやつがほざくな。」

きさまが人でも妖でもない咎者なら、俺にもまだ打つ手はある」

打つ手があると言った通り、なにかに願いを訴えるように烈は大きく柏手を打った。

そこから爪を失い負傷した手を気にせず、烈は盛大に拳を地面に打ち込む。

「——っ?!」

隕石痕のような大きな陥没を生むと同時に、砂埃が舞い上がる。

視界が遮られる。そんな中、陸は確かに聞いた。

遠雷のように重い唸り声。血をも凍りつかせる咆哮。

この世に生きるもの全てを否定し貪り喰らうような、そんな不気味ななにかの響きを。

ぞわりっ、と産毛が逆立つ。

こんな声を出せる生物を陸は知らない。生物として存在していいはずがない。

砂埃が叫声に吹き払われる。そしてその無骨なシルエットが露わになった。

「あわわー。こ、こんどはいつたい？」

紫織の驚愕ももつともか。その背丈は陸の倍近く、三メートルは

ある。

砂埃が晴れた先にいたのは、首を大きく上に向けないと見渡せない二人の大男だった。

否。二人と表現するには誤りがある。

ひとりとは首から上が猛牛のそれ、もうひとりは駿馬の頭を持っているのだから。

半人半獣のカイブツ。

戦国武将のような黒塗りの鎧を纏い、空間が揺らめくような鬼気を放っている。

「な、なんだ、こいつら？　なに食ったらこんなにでかく…」

マジでヤバイ。　歯が噛み合わず、陸は震える体をとめられない。

「あなたたちよ、ぱー」

「！？　それって！」

「厄介ね。牛頭じゅうずと馬頭めず。

地獄の番兵呼べるなんて、家柄だけは立派なボンボンじゃない」

二体を醒めた目で見上げた後、鑑は肩を竦めて後ろに隠れる烈を見下げる。

「地獄への侵略者だ。　軽くもんでやれ」

「■■■■■■■■■■——！！」

鼓膜を破るような叫び声を上げる二体の巨人。

怒濤の進撃。　あたかも巨大な岩石が転がってくるような錯覚。

牛頭と馬頭は烈の指示に、佩刀した肉厚な大剣を抜き放ち、鑑たちに力のまま振り下ろした。

「くっ……しまっ?! 姉ちゃん——!!」

舞い上がる砂埃で、その姿が確認できない。

まさか跡形もなく——……突然迫り来る影。

砂煙を突き破って来たなにかに、陸はイヤな思考すらも凍結してしまふ。

小動物のようにただ身を硬直させる。

「わたしの心配、してくれないのね」

「ううー。初めてのお姫様抱っこの相手が女の子だなんてー」

現れたのは歪ながらも等身大の人影。

鑑と、彼女に抱きかかえられた紫織だった。

その黒銀の長髪に盛大に砂埃を被っているが、みんな無傷のようだ。

「まったく、脅かすなよ」

「軽口たたくひまあつたら逃げる」

「おう」

「■■■■——!!!!」

牛頭と馬頭は煙の立ちこめる中、お構いなしに大剣を振り回し始めた。

砂煙を吹き払い、あわよくば相手を挽肉に変えようというのである。

その間に陸たちは脇目も振らず走って逃げた。

まだ煙が晴れきっていない狙いの甘い隙を突いて、今の内に一気に距離を取る。

「ああもう。　なにやってるんだ、てめえら。　あっちだよ、あっち」

流れる赤錆びた視界。　苛立たしげな烈の声が背後から聞こえてくる。

ややあつて、陸たちの後を追うように、地鳴りのような足音が続く。

「——ダメ。　このままじゃ追いつかれちゃう。　わたしを置いて逃げて」

後ろを振り返った紫織が、すべてを諦念するような重い悲壮感を漂わせて告げる。

「「姉ちゃん（しょーじょ）は黙ってる（て）」
「はう…」」

疾走の中、ハモる声。　陸と鑑の剣幕に怯む紫織。

「ほんと、ばつかじゃねえの。　こんな時まで自分以外を優先すんなよ、ばか」

「同感ね。　自己犠牲なんて気に食わないからやめて」

「…ごめんなしゃい。　あう…。　ちたきゃんじやった」

普段なにを考えてるかわからないところがあるが、こんな時は鑑も陸と息がぴったりだった。

「でもどーするの？　あなたが取りなした結果、これよ」

後を追ってくる二体の巨人に油断なく気を配りながら、鑑は隣を駆

ける陸を咎める。

「どうするって…あんなでっかいヤツどうにもならねえだろう？」

だからこそ、逃げているんじゃないのか？

いや。カシヤ猫（火車猫）とかいう妖怪を圧倒した鑑だ。

オレたちがいなければ、鑑は逃げずになんとかできるのかもしれない。

姉ちゃんを抱えているにも関わらず、走ってる速度はオレに合わせているようで、その軽やかな足運びにはまだまだ余裕がありそうだったから。

「あら。あんなの図体でかいだけの木偶よ」

澄まし顔での返答は陸の予想通りで、どこまでも余裕がある。

「倒せんのか？」

短い確認。

「…おそろくね。でも、わたしがあの二体相手してるうちにあの猫、しょーじょをさらうつもりよ。ずる賢さだけあるみたいだから」

舌を噛まないように口どころか目まで閉じてじっとしている紫織をちらりと見下ろし、鑑は問題を告げる。

「チクシヨウ。アイツいつか絶対泣かせてやる」

悔しさに脇の木刀と傘を握り締め、陸は唇を噛む。

結局、オレはお荷物ってことか。

なんのために今まで鍛えてきたのか。

なんのためにここまで来たのか。

オレにできることは肉体労働ぐらいなのに、震えてるだけでまるで役にたつてないじゃねえか。

「あら。なら決まりね」

だが、そんな陸に鑑は妖艶と微笑んで反撃を開始した。

「――、さくちなわ。」

舞踏を舞うような軽い足の踏み鳴らし。

鑑の足下に純銀の魔方陣が展開される。

その下を馬鹿のようにそのまま素通りしようとした馬頭に銀の閃光が襲い掛かる。

燦然と渦巻く光が白熱し、目を焦がさんばかりに半人半獣を包み込んだ。

「■■■■■■■■――！！」

眩い銀光が馬頭の足に鎖のように絡みつき、纏れて隣の牛頭もろとも転倒させる。

地震が起こったように大地が揺れる。

その折角の好機に鑑は走るのをやめ、抱きかかえた紫織を下ろした。そのままごく自然な動作で、牛頭と馬頭の方ではなく、遅れて振り返った陸の方に歩み寄る。

左右の腕を伸ばし、彼女は彼の頬をそつと慰撫した。

「な、なにを」

突然触れたひんやりと冷たいが柔らかい手に、陸は別の意味で心臓が早鐘を打った。

「目つぶって」

否定を許さない真剣な声音に戸惑いつつも、陸は言われるがままに目を閉じる。

「ああー！　ちよつ、あなたなにうらやま…じゃなくて、ふしだらなことしてるのー」

紫織の怒声。

突然唇に触れたぬるりとした柔らかい感触に陸は目を見開く。

一瞬が久遠。　淫靡に絡まる舌。　微熱の息遣い。

目の前に白い少女の澄み渡る紅い瞳が妖しく輝く。

なにも、かんがえられなかった。

突然のできごとだった。

いったいなにが起こったのか。

混乱する陸の頭ではなにもわからない。

よくわからないまま、鑑はさりげなく陸の体から離れた。

なにか暖かいものが唇を伝って陸の中の深い部分に染み渡り、刻み込まれるのを遅れて感じる。

「わたしの力、貸してあげる。

これで番兵召還して疲労してるなまいきな妖猫ぐらいなんとかできでしょ」

口元に残る唾液の繋がりと、鑑はぺろりと艶美に陸の頬の傷から溢れていた血を舐め取った。

そして特になにもなかったように、常のぼんやりとした眼差しのまま鑑は告げる。

「なっ、なっ、なっ」

陸の顔が朱に染まる。

呆然とまだ感触の残る唇に指を当てて、陸はなにかを言おうとするが空気が漏れるだけで意味のある音を出せない。

「どうしたの？」

「このっ、ばっかじゃねえの。」

いきなりちゅーするなんてっ！

女の子の癖に、本当にオマエって、頭の中どうなってやがるんだっ！？」

まったく羞恥心のない鑑に吹っ切れて、陸は声の限り罵声を上げた。

「あら。可愛いーわね。」

でもわたしとなんかの口結びをカウントに入れちゃダメよ」

陸の言いたいことを理解したようで、鑑は目を細めて口許に笑みを零す。

まぼろしのように儚げな微笑み。

「当然ですー。あなた本当に何なんですかー。」

お姉ちゃんは絶対許しませんよー」

陸までも奪われないように抱き寄せ、小動物が威嚇するように紫織

は甲高く唸る。

「…ごめん」

「なんでそこでわたしにいきなりあやまるの？」

こくんと小さく首を傾け、鑑は本当に不思議そうに尋ねる。

「よくわからないけど、オレがもっと強ければこんなことしなくてよかっただろ？」

その鑑のどこか儂げな顔が消えてしまいそうで、陸は思わずそんなことを言っていた。

「…ぱーね。わかってないのに謝るなんて相手を余計に不快にさせるわよ」

「でも…」

ここでなにか言っておかないと、幻想的な彼女が本当にいなくなってしまうそうで…。

「ぱーが余計な気づかいしなくていいわ。

しょーじよ。文句なら後で聞くから隠れてなさい」

「うう。後でちゃんと説明してもらいますからねー」

淡い、だが確かにそこにある微笑。今はそれだけで十分だろう。起き上がろうと藻掻いている牛頭と馬頭を油断なく見つめ、鑑は紫織に安全な場所に下がるように言う。

頭を打ったようで、彼らはまだうまく行動できないようだ。

「姉ちゃん、この傘ちよつと持っていてくれ」

「あら？ この傘やつぱり…」

陸の影に隠れようとした紫織に、陸はチェックの黒い傘を手渡す。数日前に諸事情で手放したらしい、彼女のお気に入り傘を。鑑と紫織を繋ぐ、えにしを。

「で。鑑はこれ持ってた。武器持ってたねえヤツを斬るような剣は持ってたねえし。」

そっちのヤツの方がやばそうだから虎鉄丸はオマエが使ってくれ」

ん。と、武装した巨人に無手で立ち向かうとする鑑に、陸はぶつきらばうに木刀を突き出した。魔法の盾みたいなもの使える鑑ならいらなないかもしれないけど、自分だってこのぐらい格好いいところは見せたかった。

「気持ちは嬉しいけど、妖怪をなめないほーがいいわ。それに、いま護るべきは男の意地や沽券よりも重いあなたの姉の命でしょ？」

だが、喜んでいるようには思えない感情の変化の乏しい淡々とした声音で、鑑は陸を睥睨した。

「っ」

陸はあまりにも自分がみじめで、大事なことを忘れかけていた。変な意地をはって姉ちゃんを失ったらそれこそバカだ。そんな陸に鑑はまた小さく笑みを零す。

差し出された木刀を一度受け取り、お呪いをかけるように鑑は息を吹きかけた。

「……加護を与えて強化しておいたわ。少しは使いやすくなったはずよ」

淡く神秘的な輝きが木刀を包み込み、それを陸は恐る恐る受け取った。

返された木刀は、重さなどまるでないように軽く感じる上に、何十年も使い続け自分の体の延長線上になったようによく手に馴染んだ。

身体もお腹の辺りが温かく、不思議と力が湧いてくる感じがする。

「――」

それに陸は言葉がかけられない。

あれだけ涼しげだった鑑の額にうつすらと汗の滲みはじめたことに、陸はありがとうとさえ言えない。

木刀が軽くなってるってことは、オレに力を貸したってことは、もしかしくなくても鑑はその分弱くなったってことじゃないのか。そんな状態であんな巨人を…。

「わたしの心配はいらないわ。武器なら作るから」

陸の心配を見透かすような怜悯な眼差しで、鑑は涼しげに答える。

「――、いみはらえ。」

腕を突きだし、ぐつとなにかを握りつぶすような動作。

傍にあった岩が圧迫され、圧縮され、折り畳まれ、削られ、研磨さ

れていく。

時間にしてわずか数秒のできごと。

わずかそれだけの時間で、鑑の眼前に、岩から錬成された一降りの鋭利な刃物が浮いていた。

鳥肌が立つほどの独特の波紋の美しさ。

ただ斬り抜くことのみを求めた機能美。

そこまで詳しくない陸にもわかる相当の業物の日本刀だ。

日本刀を手に鑑は紫電一閃。地面が剣圧で音も無く鋭利に割けた。なに、この反則的な魔剣士な魔法使い？

「ちょ、すげつ。　うわ。　マジでカッコいいじゃん。

そ、そんなことできるなら、オレのぶんも作ってくれよ」

「めんどいからや」

「……。　…」

命の関わる非常時なのに、個人の感情でばっさりと切り捨てられた。

「…はつ。　そう言うと思ったよ。　じゃあそっちは任せたぞ」

そのどこまでも自己中心的な鑑の態度は、氣遣ったのがバカみたいなほどの不貞不貞しさだった。

これなら安心して鑑に任せられる。

ようやくウスノ口たちも転んだ体勢を立て直したようだ。

「「■ ■ ■ ■ ■ ————！！」」

牛頭と馬頭。　地獄の番兵たちは茶色に濁った瞳を鑑に向け、殺意に滾らせる。

それを相手に鑑は冷たい笑みを零した。

「今夜の夕餉はずいぶん豪勢ね。

でも牛鍋に馬刺しなんて胸焼けするから、無様に血肉を野にさらさない」

この様子だと、余計な心配はいらないだろう。

なら、そんなウスノロの影に隠れているヤツぐらい、オレがぶっ飛ばしてみせる。

陸の瞳が、未だに不敵な笑みを浮かべるすべての元凶——火車猫の烈を真っ正面に捉え、憤怒の形相を作った。

第十九話 転・口結（後書き）

次回より閑話を入れて結の話になる予定。
躍動感のあるバトルシーンを書けるようがんばります。

閑話・昔々

世界が温かいものだと思っていた幼子は泣きはらす。

大好きな母親を失い泣きはらす。

冷たい雨に打たれてただ泣きはらす。

「そんなところで泣いてたら風邪ひくわよ」

「え？」

そんな幼子に、どこからともなく声をかける者がいた。

冷たい、冬の雨より冷たい声のした方向に彼が振り向くと、ひどくきれいな女性がいた。

雨粒に打たれ仄かに燐を放つ美しい白磁の肌。

流れるような長髪が水を吸って、水鳥の濡れ羽のような美しい光沢を放っている。

あの

「男のくせに、ただ底辺に座して嘆いているだけなんて無様よ。

生きようと必死に轉る雛鳥よりも浅ましいからやめなさい」

「っ！！　ないてなんかいいやい」

彼女の古風な言葉遣いは幼い彼には難しかったが、本能的に意味を察したのだろう。

幼子は既に水をたっぷり含んだ袖で顔を拭って、意地になる。

そんな幼いながらも既に男の子の矜持を持つ彼に彼女も無粋なことは言わない。

「そ。　ならわたしの見間違いいね。

氷雨にぬれて風邪ひくからこっちにいらっしやい」

ただ静かに目を細めて、彼女は幼子を自分のいる建物のほうに手招いた。

不思議な声だった。

感情が抜け落ちたように冷ややかなのに、聞く者を不思議と引き寄せる力強さがあった。

「おねえさん、だれ？」

突然表れた女性に、幼子は悲しみも忘れもつともなことを尋ねる。

「ぼーやの歩む道の導となるべきだった者…かしらね」

「？ よくわかんない」

「…わからないならそれでいいのよ。 知れば知るぶん世界は醜く映るからね」

幼子の疑問の声に彼女は頭を振って小さな吐息を零した。

白い靄が世界に広がり、幻想的な彼女を包み込む。

物憂げな女性は幼子を隙間風のひどい建物に呼び寄せた後は、軒下で特になにをするでもなくじつと鉛色の空を眺めていた。

氷雨と木枯らしが冷たく撫でて幼子はクシャミを漏らす。

長すぎる髪が水を吸って重くなる。

それでも彼女は、我介せずただぼんやりと空を見上げていた。

きれいな紅い瞳はまるで焦点が合わず別の世界を見ているように、ずっと遠くをぼんやりと眺めている。

「ねえ。 おねえさんはこんなところだなにしてるの？」

沈黙がいたたまれなくなり、幼子は女性に問いかける。

「…別になにもしていないわ。 ただここにいるだけ」

やや沈黙があつて、ぽつりと言葉が返される。

「え？　いつから？」

「…さあ。　ずっと昔から。　いつからなんてもう覚えてないわ」

「へんなの。　ひとりぼっちで、さびしくないの？」

「……さびしい？」

「だっておねえさんつまらなそうだよ」

「……。　うるさいぼーやに辟易しているのよ」

「へきえき？」

「……とても迷惑でうんざりするってことよ」

「むう。　じゃあさ。　じゃあさ。　ぼくともだちになろうよ。」

そうすればめーわくじゃないでしょう？」

「……友達？」

「うん。　ひとりであるより、たくさんの方がきつとたのしいよ」

「……。　ぼーやに心配されるほどおちぶれた覚えはないわ」

今の今まで泣いていたことも忘れ、名案とばかりに顔を輝かせる幼子。

それに視線も合わせず、億劫そうにそう彼女は答える。

不思議な女性だった。

冷たい声で、冷たい瞳で、冷たい態度なのに、隣にいただけで幼子は温かく感じた。

自分から話すことはなかったが、話しかければ必ず言葉を返してくれる。

気づけば、幼子とはとつとつと色々なことを喋っていた。

自分のこと。　家族のこと。　ここで約束したこと。　お願いしたこと。

そして思い出したように嗚咽を漏らし、死んでしまった母親のこと

を話した。

女性は時折相槌を打ちながら、子供のいうことだからと軽視せず黙って真摯に聞いていた。

「そう。　なら君にとって世界はもうきれいじゃないの？」

そしてまたぐずり始めた幼子に、彼女は静かに問いかける。
答えられことを怯えるようなすかな声で。

「——よくわかんない。　わかんないよ。
ただむねがぎゅっていたい。　だってもうたくさんいないんだもん」

冷たい雨が降り注ぐ中、その悲痛な言葉に彼女は初めて幼子に視線を向けた。

紅い瞳が躊躇うように幽かにゆれ、夢か幻の母親のように、そっと優しく幼子の冷えた頬に手が触れる。

そして彼女は言葉を授けた。

なにもしないはずの彼女が自ら行動をとった。

「なら…これからはたくさんのが得られるようがんばりなさい。

大切なものをもうなくさないように強くありなさい。

なにもせずこんなところにいるだけではきつと幸せにはなれないから」

それはまるで自分自身に言い聞かせるような真摯な声だった。
だから幼子は静かに、でも大きくうなずいた。

「え？」

幼子が顔をあげた時、女性は幻のように忽然といなくなっていた。ただ、彼女が座っていた場所に幽かな温もりが残っている。

「おーい」

幼子の姉が、大きなチェックの――亡き母親の黒い傘を差して建物の階段を駆け上ってくる。

怒ったような、安心したような、泣いているような、複雑な表情。活発で、未だにおもちゃの取り合いでは勝てないけど、本当は怖がりな姉。

その冷たい雨に打たれて頼りない彼女の姿を見て、幼子は絶対にこの人を護るんだと静かに誓った。

それは彼がまだ幼子だったころのお話。
彼女がまだ変わらず存在したころのお話。

第二十話 結・決闘（前書き）

閑話は短めだったので一日で二回投稿。
ジャンルにバトルを追加しました。

第二十話 結・決闘

「……………」

不倶戴天の怨敵を見るように、陸は烈をきつく睨んだ。

胸に渦巻く激情を抑え、陸は木刀を手に静かに深呼吸する。

大地が揺らぎ、風が荒び、雷鳴が轟くような衝撃が彼の耳朵に響く。

少し離れた場所で、鑑は筆舌し難い壮絶な戦闘を繰り広げている。

宣言通り、彼女は二体の巨人を相手に華奢な体で戦ってくれている。

ならオレのできることは、目の前のクソ野郎をボコボコにすることだ。

「はっ、なんだよ。まさかとは思っけどおまえさん。

人間のおまえが妖怪の俺と戦って勝負になると思ってるのかい？

いくらアレの力を借りたからって、そんなの勇敢を通り越えてただの蛮勇だぞ」

烈は人を小馬鹿にした薄笑いを浮かべながら、陸を挑発する。

先ほどから何度も機会があったのに、様子を伺っていただけで攻撃を仕掛けてこなかったことが、その笑みの不気味さを際立たせている。

「……………っ！」

知ったことか。

陸は無言で木刀の切っ先を相手の喉元に向けて構える事で応じる。それしか知らない正眼の構え。

ただそれだけを練習してきた正眼の構え。

唇をきつく結んだ憤怒の表情。

今陸の中には抑えがたい怒りの感情が渦巻いていた。

命を助けようとした自分と紫織への裏切り。

命を見逃してくれた鑑への裏切り。

二度も大きな裏切りをしておいて平然と笑っていられるクソ野郎の言葉など、耳を傾けるだけでも不愉快極まりなかった。

「餓鬼だねえ。 本気で勝てるって思ってるなんて…」

「はああっ！」

裂帛の気合い。

先手必勝。

最早相手の言葉など耳を傾げるだけムダだと一歩踏み込み、陸は木刀を一閃させた。

その力強い太刀筋は未完成ながらも才覚を感じさせる。

ただ愚直に素振りを繰り返した修練の成果は、烈の体に渾身の一撃を落とす。

しかし…。

「——せっかちな。 人の話は最後まで聞きましょって親から教わらなかつたのかい？ ああでも、さすがにそんな木の棒でも加護が加わったモノは痛いかな」

その陸の憤怒の一撃はあっさりと見切られ、烈のクロスされた両腕に阻まれていた。

「なっ」

逆に痺れる陸の手。

軽い竹刀ではなく鉄心の入った木刀なのだ。

本気で、それこそ骨ぐらいは叩き折ってやるつもりで木刀を打ち込んだのに、腕の下から覗かせる烈の顔には痛そうな素振りさえ伺えない。

すべてを焼き尽くすような紅蓮の瞳が欄と陸を射貫く。

「なにを驚いているんだい？　それで、さっき教えてやろうとしたのはなあ。

本気で勝てると思ってるなんて、人間の畏怖から生まれた妖怪^{おれ}のことを、人間の癖に甘く見すぎだってことだ」

烈は木刀を力ずくで押し上げ、陸の耳元で嘲るように囁いた。
ゆっくりと身体を犯す毒のように。

「うるせえ。　クソ野郎が！」

陸は一步後退し、再度木刀を打ち付ける。　狙いは胴。

されど、無意識の内に目の前の存在への恐怖に吞まれてしまった陸の打ち込みの力は、目に見えて減衰してしまう。

「はっ。　なんだい、そのへっぴり腰は」

触れるように軽い打撃音。　陸の横薙ぎの木刀は、短くなった烈の人並みの爪でも簡単に軸を逸らされ、逆の手で強引に地面に叩き落とされてしまう。

そこから繰り出される容赦の無い反撃が、逆にガラ空きの陸の脇腹に炸裂する。

「あぐっ?!」

「陸くん——！」

重い拳。肺から空気が根こそぎ搾り取られ、陸の体がくの字に折れ曲がる。

あまりの衝撃に頭が揺れ、視界が揺らぐ。

意識がそのまま落ちそうになるのを、陸は紫織の悲鳴に死力で堪えた。

オレが倒れれば、次は姉ちゃんが危ない。

なら、このぐらいのこと堪えきってみせる。

「とと。 体の方はもつと頑丈になってるみたいだな。

殴った俺の方まで痛いや。 ほらよ、第二ラウンドといこうや」

零した木刀を陸に投げて寄こす余裕を見せて、烈は拳をだらりと前に突き出した。

尻尾と耳が好戦的に頻繁に動いている。

「くそつ。 さげんなよ」

鉄の味の混ざる唾を吐き捨て、陸は木刀を構え直す。

もう一度正眼に。 呼吸を平静に。

失った空気を取り戻すように、ゆっくりと息を取り込む。

追い込まれているからこそ、思考だけは冷静に。

打破すべき敵を正面に見据える。

剣道の大会の時のように、否、その時以上に研ぎ澄まされていく精神。

「こなのーい？　今ーら——」

烈の口が滑らかに動いている。　だが、元より相容れない不快な相手だ。

烈の挑発は今の陸にとってなんの意味もなさない雑音にすぎない。

ただ。　鑑が必死に戦っているのを陸は感じる。

紫織が固唾を吞んで見守っているのを彼は感じる。

なのに、こんな所で自分だけが、

「——負けられるかよっ！——」

それしか知らないように陸は一直線に烈に疾駆した。

彼は考えもなく猪突猛進したわけではない。

鑑も言っていたとおり、格下のヤツが攻撃しなかったらジリ貧だと言うことは、陸も剣道の試合でイヤと言うほど分かっているからだ。

防御は二の次。　オレにできるのは攻めて、攻めて、攻めまくることだけだ。

「——しっ！——」

陸の木刀が、剣豪の如く苛烈に振るわれる。

それを烈は、嗜虐的な笑みを浮かべながら涼しげに応じる。

斜に切り結ぶように小手の一撃。

縦に叩き割るように面の一撃。

横に薙ぎ払うように胴の一撃。

更に中学では使用を禁じられている突きの一撃。

攻撃は最大の防御。　陸が知っている数少ない格言で一番好きな言葉だった。

それを実現するように怒濤の連撃が加えられる。

「うおおおおお!!」

軋む木刀。

次々と有効打が決まるが、烈の動きはまったく鈍らない。全身から吹き出る汗。

五十合を打ってから、その無意味さに数えるのをやめた。乱れる呼吸。

痺れて徐々にただの棒のように感覚の無くなっていく腕。

勝手に瓦解しそうになる身体。

歯を食い締めすぎて鉄の味に溺れてしまいそうだ。

限界を超えて繰り出される陸の攻撃は、さしもの烈の体にも鈍痛を蓄積させる。

しかし終ぞ膝をつかせることは叶わなかった。

陸の鈍った連撃の間隙を烈に突かれる。

「はっ。スポーツなんて遊びの剣術が、殺し合いに通じるはずないだろっ!」

もう飽きたとばかりに木刀の剣先が拳で弾かれる。

反撃に転じた烈のボディブローが、陸の腹にまた鮮やかに決まる。

「あがつ?!」

くぐもった呻き。たまらず、陸は腹を押さえてうずくまった。

……間違いだったのは、これが試合ではなく死合だったということだ。

例えばどれだけ面を決めようと、鮮やかに胴を薙ごとと戦いは終わら

ない。

それこそどちらかの体力が尽きるまで。

そして陸が打倒しなければならぬ相手の体力は、人外そのものだった。

第二十話 結・決闘（後書き）

というわけで結の話のスタートです。

自分の黒歴史を曝す砂を吐きたくなるような文章ですが、がんばりますので温かい目で見守りください^^ノシ

第二十一話 結・死闘

圧倒的な人外の力を前に、頽れる陸。

「まだ終わりじゃないよな。ほら、たてよ。第三ラウンドだ」
「……」

呼吸は荒く、ぼやけて滲む視界。 烈の言葉に陸はすぐに反応できない。

悪夢や冗談の方が救いのある残酷な現実には、陸は半ば心が折れかかる。

いくらなんでも反則すぎた。

手のマメが潰れるほど木刀で打ち付けたのに、たった二発腹を殴られただけの打撃に追いついていないなんて。

「陸くん——！？」

「——」

誤って酒を飲んだときより覚束ない足取り。

鉄塊のように重い木刀。

それでも陸は、紫織の泣きそうな声に無言で、気力だけで立ち上がる。

大切な、大好きな姉を守るために。

「もういいよ。もういいから無茶しないで」

今にも飛び出して来そうな悲痛な紫織の声。

「——っ。 まだまだ大丈夫だ。 安心して姉ちゃんは下がって

てくれ」

気に食わない。

その言葉に陸の視界がはつきりとした。

横目に、まるで自分自身が傷ついているように顔を歪めている紫織が見えた。

そんな顔されたら、死んでも引き下がるものか。

が――。烈風のような速度で滑り込む影。

「どこが大丈夫だって？」

「あがつ?!」

辛うじて立っていただけで動けぬ陸に、烈火の如く強力な烈の蹴りが決まる。

「う、ぐつ――!!」

攪拌される内蔵。嘔吐感に堪えられず、胃の中身を撒き散らす口。

血と胃液の味の気持ち悪さに、陸は頭が痺れて視界が定まらない。

三度目の攻撃に闘志は消えずとも、今度こそ陸の体が悲鳴を上げたのだ。

土と血糊の付いた学生服は、吐瀉物に更に汚れてもう二度と着られないだろう。

「ったく。借り物の力の分際で偉そうにすんнатての。

おまえさんはそうやって汚物まみれになつてゐるぐらいがお似合い

だぞ」

「――」

耳障りな声。悔しかった。ただ憎かった。

そして自分の弱さに陸は死ぬほど嫌気がさした。

オレはコイツをぶっ飛ばすどころか、この生意気な口を黙らせることもできないのか。

「だいたいなあ。俺のプライドが許さないんだよ。

おまえさん程度の人間。

圧倒的な力で蹂躪してやないと俺が弱いみたいだろ」

動けない陸に即座にトドメが刺されることはない。

烈は弱者をいたぶることで、先ほどの惨敗によって傷ついた自尊心を満たそうとしていたのだ。

「――お願い、もうやめて。大人しく烈くんに従うから、もう乱暴しないで」

目に涙を浮かべ、二者の前に飛び出す紫織。

陸の傷つく姿を見たくない一心で、震える身体で必死に言葉を紡ぐ。

「だってよ。もう立たないんなら、おまえさんの大切な者を攫っちまうぞ」

でもなにより、その言葉が陸は頭にきた。

その言葉が、彼の意識を辛うじて繋ぎとめる。

既に感覚のなくなった死に損ないの身体。

心臓だけが壊れたように鳴り響いている。

でも、まだ動いている。なら、壊れるまで動いてみせる。

溢れんばかりの激情のままに、陸は四肢に力を込めて這い上がる。落としてしまった木刀をもう離さないとばかりに強く握り締めて、前を睨む。

「——ざけんなよ」

吐き捨てるように、静かな言葉がどこから漏れる。

極寒の中にいるように、陸は自分の体の感覚が乏しかった。

でも、頭は炎のように熱い。そんなちぐはぐした状態。限界なんてとくに越えているのだろう。

立っているだけで嘘みたい な奇跡なんだから。

それでも、自分の感情を代弁する口は止まらない。

「ふざけんじゃねえぞ、姉ちゃん!!」

「え———?」

その思いの丈を向けるのは、当然姉の紫織に。

烈なんてクソ野郎がなにをどう言っても陸はどうでも良かったが、大好きな紫織がそんなことを言うことだけは許せなかった。

「さっきから人のコトばっか気にしやがって。

どうして一言も自分のこと助けてくれて言ってくれねえんだよ
っ!!」

鈍痛を憤怒に。 憤怒を力に変えて陸は声を振り絞る。

朦朧とする意識が、言葉を重ねるのと共に纏まってくる。

三発ぐらい殴られたのがなんだっていうんだ。

この程度の痛み、どうってことない。

一番つらいのは、理不尽にこんな場所に墜とされた姉ちゃんのはず
なんだから。

なら、オレはここで斃れるわけにはいかなかった。

「だつて…」

「なにがだつてだ。　オレはこんなヤツなんか絶対負けねえ」

だから安心して下がっててくれ。

そう陸は激痛を堪え、紫織に格好良く笑ってみせる。

「…。…わかったわ。　陸くんって昔から一度言ったら聞かないもんねー。」

わたしはまだまだそんな陸くんのこと放つとけないから、頑張つてね」

それに大粒の涙をきつく閉じた目から零し、そのまま紫織は笑ってみせた。

どちらもぎこちないながらも、それは自分の為の——本物の笑みだった。

「了解」

嬉しさを意地に。　意地を気合いに変え、陸は目の前の敵を睨む。

陸ができるのは白痴のようにただ攻めることのみ。

ただ負けられない以上、攻め方は変える。

日常を捨て、常識を破り、殺し殺されるという覚悟を決める。

卑怯な攻撃だつてする。

急所を狙うことさえ躊躇わない。

——そう思った瞬間、陸は地面に転がっていた。

烈に殴られた、と遅れて理解したのは陸の腹に鈍痛が走ったからだ。

「——っ！！」

本気を出したのだろう。陸には烈の動きがまるで見えなかった。だが、不思議とこれまでのような激痛は感じなかった。

それは体がもはや危険な状態に陥っている証だったが、今は好都合だった。

意識しなくても、闘争の本能のみで体が勝手に動く。

何事も無かったように起き上がり、眼前の存在を見据え陸は構えを取った。

紫織が信じて見守ってくれているのに、格好悪く倒れていられるわけがなかった。

「……氣にくわねえな」

不死鳥の如く再び立ち上がった陸を見て、烈は余裕を称える人を小ばかにした表情を見るからに不機嫌なモノへと変えていた。

「人間は人間らしく惨めに命乞いでもしろよっ！！」

再び烈からの攻め。疾い、烈風そのものの駿足。

二度目の攻撃に慣れた陸の目が、獲物を狩る猛獣そのものの動きを察知する。

だがそれだけ。人の体は反応できず、いうことを訊かない。

拳が今後は顔面に吸い込まれ、陸の視界を揺さぶった。

——されど、それだけだ。

見た目だけ派手に鼻から血が吹き出ただけで、大した痛みを感じない。

反撃に反射的に木刀を振るう余裕さえあった。

どうやら鑑のおかげで体が頑丈になっているのは本気のようなのだ。
なら――

「いい加減にしろよ。その目つき、気に食わないんだよ」

面の一撃を腕で払った烈が吼え立てる。

ただ狩られるだけの草食獣に抵抗された肉食獣のように、怒り狂う。鬼気迫る朱い瞳から放たれる鋭い眼光を浴びても、陸は怯まない。むしろその役者のような中身のない余裕げな態度を崩し、本心を曝させたことに、一矢を報いることができたと言葉を剥き出しにして獰猛に笑った。

「うつせえんだよ。オレはオマエのすべてが気に食わねえんだ。
今度こそ泣かせてやるから、覚悟しろ」

鼻から垂れる血を下品に舌で舐め取り、陸は再度木刀を構えた。戦いで高揚し、研ぎ澄まされる精神。

周囲の景色が色あせ、烈の姿のみを陸は捕らえる。

烈の瞳に映る陸の顔は、烈と同じく激しく獰猛に燃え上がっていた。

第二十一話 結・死闘（後書き）

今回はちょっと短め。
戦闘描写って難しい。

第二十二話 結・鬼神

[illegible]

地獄の巨人が吼える。

強靱な猛獣の肉体に、人間の器用さを併せ持つ獰猛な異形の番兵。全てを跪かせる瀑布の如き剛剣は、敵の急所を狙わずとも対象を容易く挽肉に変える。

大岩の如き巨漢を支える筋肉と魔鋼の鎧は、あらゆる攻撃をはね除ける。

それが一体のみならず、二体もいるのだ。

地獄の番兵——牛頭と馬頭は死者の浅はかな抵抗の意志を奪い去るには十分すぎるほどの暴力の具現だろう。

——その相手が、脆く儚い人間ならば。

1

二体一対の巨漢から阿吽の呼吸で次々と繰り出される、さながら空から降り落ちる隕石にも似た絶対的な暴虐の具現。

それを、鑑は悉く回避し続ける。

流れる黒銀の髪は幽玄に揺れ、
纖手に握られた玲瓏たる劔は死の幻
想と共に輝く。

妖艶の魔剣士は、あたかも神々に舞を捧げる天女のように流麗に体を捌く。

地形さえ改竄する攻撃の余波で飛び散る飛礫さえ、彼女には掠りもしない。

一歩隣に凄惨な死を孕んだ戦鬪を、鑑は舞踏でも踊るように優雅に演じてみせた。

压卷。羡慕。憧憬。

牛頭の巨体を構成する肉体が光と共に崩れていく。
致死の一撃を与えられ、元の座に戻っていく相棒を目に、残された
馬頭は嘶く。

「■■■■■■■■■■——！！！！」

人語を解さない奇声が轟く。
その暗く渦巻く怨嗟を浴びても、鑑は冷ややかに言い返した。

「煩いわね。無力な死者に歎きを与え続けた貴方達^{なげ}が、鬼哭啾々
たる怨嗟を漏らす権利なんてどこにも無いわ」

呪を囁くような小さな響きで、深い侮蔑の籠められた忌み詞が鑑の
口から淡々と零れる。

言葉が零れる。
言霊が零れる。

彼女の命が零れていく。

鬼神の如き業の冴えを魅せる彼女の輝きは燃え尽きる前の炎の煌め
きだった。

「■■■■■■■■■■——！！！！！！」

両者共々時間はない。相容れぬ二者の間に語り合うことなぞ初め
から存在しない。

憤怒さえ込められた馬頭の巨剣が、鑑の矮軀に振るわれた。
乾坤一擲の渾身の一撃に対し、反撃の紫電の閃光が煌めく。

柔よく剛を制す。

その詞が具現^{けげん}するように、牛頭の剛剣の剣筋が鑑の魔劔の絶技によ
って逸らされた。

追撃。流麗な銀の軌跡が、たたらを踏む馬頭の体に奇蹟のように描かれる。

泥を斬るかの如き斬れ味で、馬頭の胴は鎧ごと真つ二つに薙がれた。

馬頭の上下に乖離した亡骸は、寄り添うように牛頭の骸に倒れ、同じく風と共に去っていく。

数にして千を越える死の交叉（しじや）。

その終止符は静かに打たれたのだった。

劔が啜った血と共に拭い去れない穢れを浴びたことを感じ取りながら、体に籠もった熱を吐き出すように鑑はゆつくりと息を吐いた。

油断無く残芯するが、幾たびも人外の剛劔をいनाしたことも重なり、余力を失って自ら構成を解除しなくても勝手に瓦解する劔。

片膝を付く体。動悸が激しいまま収まらない。

冷たい汗が、玉のようにこぼれ落ちる。

長年の住み処を失い、力の供給がなくなった以上、この身の滅びは免れない。

幻想の存在は人の畏怖や崇拜によって威を増す。その逆も然りなのだ。

失われていくだけの力の行使は、そのまま真綿のようにゆつくりと確かに首を絞め、彼女の命を確実に縮めていく。

このような状態で更に穢れを浴びる行動までとればどうなるか。結果は火を見るよりも明かだ。

——それでもわたしがしなければならぬことはまだ残っている。既に開いておくことさえ辛いばんやりと霞む眼。

限界を訴える体を、鑑は使命感でねじ伏せて立ち上がった。

少年がどうなったか、様子を確かめようと視線を動かし、鑑は秀麗な柳眉を吊り上げた。

予想外の光景だった。

意識を失っていないほうが不思議なほどの重傷を少年は負っていた。加護を授けようと所詮人間である以上それは予測できていたが、未だ戦っていた——戦いになっている事に鑑は大いに驚いた。

人の恐怖の具現である妖怪を相手に、元服にも満たない少年が屈しないのだ。

それは前だけを見つめ、最後まで諦めない鋼の意志を持つ愚者。

されど、愛しい者を護ろうとする益荒男の瞳だった。

その久しく見ることもなくなっていた人の雄姿を見て、鑑は空虚な胸が疼いた。

「がんばれ、しょーねん」

自分の口から漏れた言葉が、鑑には信じられなかった。

自分の取る行動が、彼女には信じられなかった。

少年にはただの時間稼ぎ以上の役割は求めていなかったのに。

なにより捻れた負債の請求——蛮勇の代償を支払わせるつもりだったのに。

それこそ自分の命を繋ぎとめる糧にするつもりさえあったのに。

なのに——。一人の男にここまでの決意を魅せられたら、手を出すのはヤボというものだろう、といった考えが頭に過ぎってしまったのだ。

そんな思いは行動に変わる。

「勝ちなさい、陸」

慈愛を含んだ優しげな声。

初めて少年の名前を呼んだ唇にそつと手を触れ、鑑は戦いを見守ることにした。

己の内から出した言霊が呪として世界に染み渡り、現実になることを淡く希って。

誰かの声援が風に乗って届いた気がした。

それを追い風に、正面の猫妖怪に陸は対峙する。

ぶつかり合う木刀と拳。木刀の間合いの長さを武器に陸は若き妖怪に對抗する。

手負いの獣同士。苛烈に互いを食らい尽くそうとする。

火照る体。陸は興奮で血が沸騰しそうだった。

限界を超え、されど体が今の状態に馴染んでくるような感覚を陸は感じていた。

激しく激突する両者の意地。えもの

爪が折られたとはいえ、烈の巖のように重い拳は人を殺すのに十分過ぎるほどの兇器だ。

それなのに、陸は相手が怖いとは思わなかった。

感情の針が振り切れた、いわばキレた状態。

なのに、逆に陸の頭は明晰で、心は波紋の立たない泉のように静かだった。

陸は一流の剣客ではなかったが、剣を交えて判ったことがあった。

今相手が木刀に当たってくれる場所は、最初と違って有効打——つまり攻撃を受けても比較的危険の低い箇所のみとなっていた。

尻尾と耳があっても、人型である以上弱点も同じなのだろう。

顔面や喉仏などといった急所への一撃は、一度食らった以降はさり気なく防御したり攻撃を逸らしている。

避けなくてはマズイという事だ。
ならば、オレにも勝ち目はある。
相手は体力馬鹿だが、決して不死身ではないのだから。

一方、陸の不敵な態度が、地面を這いずるだけのはずの人間を容易に仕留められないことが、烈を苛立たせ、彼の冷静な判断をかき乱だしていた。

地面を蹴り穿ち、疾風のような烈の疾走。

大地の砂さえ天高くに舞いあげる烈の呐喊は、されど直線的。
頭蓋を打ち砕くはずの烈の拳は、鼻先で陸に見切られ、反撃の打突が逆に鳩尾に決まる。

「ぐっ?!」

堪らず、妖猫は大きく跳ねた。

肉食獣らしい軽やかな動作で後方に着地して、陸と距離を取る烈。
自分の行動が理解できないといった間の抜けた表情で、ぽかんと烈は自分の体を見つめた。

「ちっ。　なんで、俺が人間相手にっ!!」

自ら後退してしまった事が認められず、爆発的に間合いを縮めて陸に襲い掛かる。

しかし、その動きは陸が訳もわからず殴り飛ばされた頃と比べると随分鈍くなっている。

経験上、体への攻撃は確実に蓄積して後で響いてくることを陸は経験上知っていた。

今までの陸の愚直な攻撃の積み重ねはムダではなかったのだ。

唇を噛みしめ、余裕を失った真剣な表情が陸の目の前にある。

相手は本気だという危機でもあったが、もう後がないという好機でもあった。

全身が軋み瓦解するような激戦の交叉。未だ力も速度も烈の方が断然上。

だが、妖怪故の生まれ持つての圧倒的な身体能力は烈に恩恵ではなく仇をもたらす。

焦りだけが一人前に攻撃が単調化。

一方的ななぶり殺しは経験していても、戦いというものを経験していなかった烈の攻撃は動きこそ速いものの、子供の駄々そのものだった。

陸の、人間の技量と知恵が、烈に鎌首を向ける。

「はあああああ！！！！」

「うおおおおお！！！！」

疾い。赤い旋風が通り抜けるような速度で烈の拳が唸る。

でも今なら見える。十字に繰り出された打撃を陸は焦らず正確に迎撃する。

そこから——木刀を再度鳩尾に突きだす。

「二度も食らうか…よ…お？」

しかし、陸の繰り出した木刀はあくまでも囷。

今まで死力を尽くして握り締めていた、間合いという優位性を与えていた木刀をここで陸はあっさりと手放した。

抵抗のなさに烈は体勢を崩し、たたらを踏む。

その隙を逃さず、陸は更に一步踏み込んだ。

今まで入れなかった零距离の間合いに詰める。

そして絶えず好戦的に揺れていた相手のシッポを、踏み千切る勢いで踏みつけた。

これで相手の素早い動きを封じる。

「みぎいつつ!!?」

猫特有の弱点を付かれ、堪らず烈も悲鳴をあげる。

だが、陸の攻撃の手は緩まない。

むしろこれからが本番だった。

本命は、陸自身の握り締めた――

「くられ。 奥義・一重の極み」

それは陸が伝説の技を習得すべく厳しい修行を重ねた結果、編み出された必殺技。

次に繰り出す右の一撃に己の全身全霊をささげ、相手を打破する捨て身の秘儀だった。

……ようするにただ単に思いっきり本気で殴るだけなんだけど。

コイツ自身、答えを言っていたじゃねえか。

人の恐怖から妖怪は生まれたって。

木刀よりも、体のほうが頑丈になってるって。

なら、オレがすることは決まっている。

恐がらずに目の前のむかつく野郎を、ただ思いっきり拳でぶん殴る。

答えはそれだけで十分だ。

「あがつ?!」

火花の散るような強力な衝撃に、口から血と唾液を零す烈。

顎に打ち砕くほどの鮮やかなアッパーが炸裂する。

喧嘩するときは割と容赦がない陸と悠也の二人の間でも禁じ手にな

った攻撃だ。

体力馬鹿である悠也を失神させて紫織にシコタマ怒られるハメになった凶悪な一撃は、妖怪相手でも確実に有効打だった。

シッポを踏んだまま繰り出したことが、威力を強めているのだろう。

「もいつちよ」

「~~~~~っ!!」

浮いて動けない烈に陸は追撃の手を緩めない。

型も技もない力だけの喧嘩拳法。

力を溜めて腰を落とした状態から足を鋭角的に突きだし、男しか知らない壮絶な痛みを味合わせる。

「おまけ」

「■ ▼全@ 、 、 、 ! ?」

堪らず崩れ落ちた烈の体に、更に追い打ち。

陸は左腕を折り畳み、全体重を乗せた肘を烈の鳩尾に落とし体当たりを加えた。

そこからはもう一方的だった。

肘打ちからマウントポジションを取った陸は、徹底的に烈を連打する。

眼球、顎、喉仏、急所だろうと容赦しない。

これまでの憤怒や憎悪を爆発させるように徹底的に烈に攻撃し、体力を反撃の意思ごと根こそぎ奪う。

最終ラウンドで見事、陸は逆転勝利をもぎ取ったのだった。

第二十二話 結・鬼神（後書き）

くそつ。 あと少しだけでいい。 たのむ、持ちこたえてくれ、俺の指。

…

……

………

はい、調子に乗ってごめんなさい。 深夜にバトルシーン書いていたら、なんかテンションがおかしくなってしまった作者です（笑）
中二病は諦めるとして、腱鞘炎にならないように焦らず落ち着いてやっつてこうと思います^^;

こんな作者の小説ですが、アドバイス、評価感想、誤字脱字のご指摘等ございましたらお待ちしてます。

作者の病気の悪化と共に物語の質があがるかもしれませんw

第二十三話 結・勝利

「——はあ、ああ、ふう」

「あぐつ。いたい、いたいよう……。ぐすつ、ひつく」

獣よりも荒い息を口から漏らし、陸は連打する拳を休めた。

彼の目の前には、弱々しく耳を垂れ下げ、大粒の涙を零す烈の顔。

陸の徹底した容赦の無い攻撃に、烈は衆目構わず泣き出してしまったのだ。

それを見て、陸は握り締めた拳を解いた。

この程度で手を休めるのは、この妖怪の行いを顧みるとまだまだ甘い気がした。

しかし気力も体力もとくに限界を迎えていて、ろくに拳を握り締めることさえできなかったので、陸は仕方なくマウントポジションを解いたのだった。

「——はっ。どうだっ、猫妖怪。人間の意地を思い知ったかっ！」

口の中の鉄錆びた味の気持ち悪さを紛らわすように、陸は威勢よく勝ち鬨を上げる。

お世辞にも綺麗な勝ち方だとは言えなかったが、宣言通り烈を泣かせることができたことに陸は満足した。

「——！ あ……れ……？」

「陸くん！？ だ、大丈夫っ？」

気がゆるみ傾く視界。

駆け寄って体を支えてくれた紫織の姿が陸には霞んで見えた。

昂ぶっていた精神が収まってくるのと共に、忘れていた痛みがぶり返したのだ。

全身が焼けるように痛い。特に腹の内側が、じくじくと気持ち悪い。

鑑に貫かれた時の痛みよりマシだったが、内臓がどうにかなってしまっただろう。

すぐ目の前なのに、陸にはぼんやりとしか紫織の顔が見えない。

彼女が泣いているように見えるのはなぜだろう？

せつかく勝ったんだから笑ってほしいのに。

「ちょ、しつかり！ いやーっ?!」

「ひどい怪我。よくこんな状態で動けたわね」

「あ、あなたは…。と、とにかく救急車を呼ばなくちゃ。

あうー。でもでも、ここはどこー?! ねえここっていったい

何番地なのー」

「!?! ぱー。しょーねん助けたければ、下手に動かさないで」

騒がしい声を耳に陸は瞳を閉ざし、本日三度目となる闇の世界に旅立つのだった。

でもそれは、今までと異なり不思議と心地よいものだった。

温かい。

あやふやな夢と現の中をたゆたう中、陸が感じたのは心地よさだった。

まるで母親の胸に優しく抱かれるような安心感。

遠い日の安らぎを懐古させる至福の感覚に、陸は思わず頬を緩ませる。

似たような感触はついこの前もあった。

あれからどうなったのか。 あれから？
曖昧にぼやけた意識をはっきりさせようと、陸はゆっくりと目を開く。

「！——よかった。 気がついた」

涙を目にいっぱい溜めた表情。

目の前に泣かせないと誓ったはずの彼女がいた。

「……ねえちゃん……？」

言葉を発するのと共に、だんだんと陸の意識が纏まってくる。

——オレがんばったんだから、笑っててほしかったな。
だがそんな思いは一瞬で消え失せる。

「もう、陸くんのかー！。 無茶ばかりしてー、わたしがどれだけ……っ」

「うぐえええ？！」

紫織は感情のままに思いつきり両手を乗せた。

ご丁寧にも何度も攻撃を受けた陸の腹に。

腹が、パンの生地を捏ねるみたいにいい感じに押し潰されて彼の意識が遠のいていく。

「あれ？ ちょっと、ちょっと陸くん。 ど、どうしたのー、まだ痛いところあるのー？」

「ふぎゅっ！ むぐゅう？！」

丁度そこだ。 ぐいぐい押されてる所が半端なく痛いっす。

抵抗しようにも、体にまったく力が入らず、指一本動かせない。

まさかこのままオレ、かつこ悪く死んじまう…のか？

あれか。これが強敵をなんとか倒したと思ったとたん、いきなり次の強敵が現れて手も足も出ないっていうマンガでよくある例のあれか。

その相手が実の姉だなんて、王道もここまでくれば笑えないぞ。

あまりの激痛に混乱し混濁する意識さえ失せて、天に昇天しそうになるのを――

「けが人よ。下手にさわったら傷にさわるわ」

――冷静で平坦な声が引き留めた。 鑑だ。

「?! ご、ごめんねー。わたしそんなつもりじゃー」

慌てて手を離す紫織。 申し訳なさそうに項垂れている。
どうやらまた気を失ったオレを、今度はふたりで看病してくれていたらしい。

「……へへっ。 ね、猫妖怪に比べれば、へっちゃら…だぜ…?」

強がってみたが、情けないことに疑問系になってしまった。

……言葉に出してみても陸は思い出した。

「っ！ そういえば、あの猫野郎は？」

体が思うように動かなかったので、視線だけを黒い雨が降り出しそうな曇り空から果てのない地平線に落とし、ゴツゴツした大地を見渡し…。

「火車猫ならそこ」

おそらく鑑がやったのだろう。　光る縄のようなもので猫妖怪は岩に縛られていた。
尻尾と耳は情けないまでに弱々しく垂れ下がり、まだぐずぐずと泣いている。
その光景に、なぜかはわからないけど、陸はほっと息が漏れて胸の
もやもやが晴れた。

「今は余計なこと気にせず、ゆっくりなさい。」

新陳代謝活性化させて、自己治癒能力強化するから」

「鑑ちゃんってすごいよねー。」

ここまで陸くんを連れてきてくれたもこの子なんでしょー」

陸が気を失っている間に、ふたりはある程度の自己紹介を済ませたらしい。

でもあの鑑相手に堂々とちゃん付けで呼べるとは流石だな、と陸は感心する。

「あー。　回復呪文ってやつか？　マジで魔法万歳だな」

鑑にそつと手を当てられた箇所が、不思議な仄かな光を放っている。
羽毛で包まれるような温かさと共に、じんわりと痛みが引いていく
のを陸は感じた。

気持ちよくなってまた眠くなってくる。

ならお言葉に甘えて、この役得をしばらく満喫しよう。

「…そーでもないわ。　奇跡には代償がつきものよ」

「へ？　どうゆうことだ」

「一生のうちに細胞が分裂できる回数は決まってるのに、それを無理やり強制的に早めるのだから」

肉体にかなり負担がかかるから、それだけしょーねんの寿命が縮む」

「ってうおおい?! ちょっと待てやこらっ!!?」

衝撃の事実には陸は跳ね起きた。

体が動かない?

そんなのこのデタラメバカが相手ならどこかにぼーいだ。なにも抵抗しなかったらいつの間にか殺されている。

「じゅ、寿命が縮むって、どういうことだよつ、鑑。

そんな話、オレ聞いてねえぞ!」

「だって言ってないもの」

「ははは。そりゃあそうだよねえ!」

「あのまま死ぬよりマシでしょ。若いんだから文句言わない」

「若いからなにしてもいいなんて間違いだっ!」

「その通りよ。若いからって非行に走るのはよくないわ」

「その通りだ。若いからって暴力はよくねえ。…あれ?」

鑑に振り上げていた拳を陸は自分から引っ込めてしまっていた。なぜ?

「仲いいんだねー。二人ともー」

そんな彼らのやり取りを見ていた紫織が、くすりと楽しげに笑みを零す。

「どこがよ(だ)?」

「ほらー。息ぴったりじゃないー」

「「……」」

青汁を飲み干したような苦々しい陸と鑑の表情とは異なり、ますます紫織は相手を見守るような優しい笑みを浮かべるのだった。

「陸くんもう大丈夫ー？」

「ああ。なんとか普通に動く分には問題ねえよ」

「そう。よかったー」

心配げに覗き込む紫織に、陸は力こぶを作ってみせて応じる。

……本当はまだ鈍い痛みと共に他人の体を動かすような違和感が残っていたが、早死にしたくないので傷の治療は必要最低限だけにしてもらったのだ。

「でもびっくりね。」

時間稼げばそれでよかったのに、勝てちゃうなんてすごいじゃない

い

「——う」

陸は驚いた。

淡々としている鑑が誉めてくれたのもあったけど、その声が本当に優しいだったからだ。

照れくさくなつて、陸は彼女の顔を真っ直ぐ見ていられない。

「あ、あつたり前だろ。剣道部期待の新星を舐めるんじゃないぞ」

「その割に最後は素手で殴ってたけど……斬新で実戦的な剣道部なのね」

「むぐつ。……そ、それは言わないでくれ」

涼しげな声で皮肉を言う鑑。

こっちの方が妙にどきどきしなくていい…のかな、と陸は鑑に対する感情がよくわからなくなってきた。紫織が言うように仲がいいとは思わなかったが、だからといって同じ目的のために共に戦った絆はけっして脆いものだとは思えなかった。本当に自分のこの気持ちがよくわからない。ただ胸がとても温かく心地よかった。

「今回は目をつぶるけどー、もうこんな無茶しちゃめーですよー」

「…よくわかってるよ」

「約束よー？」

陸と紫織の間に指切りげんまんが交わされる。

紫織の忠告が陸は身に染みた。

死にそうな目に遭うのは自分だってゴメンだった。

でも姉を護れたのならこのぐらい安いものだ、とも思うあたり、陸の楽観的な思考は現金なものだった。

そんな微笑ましい姉弟愛の姿を鑑はじっと見つめていた。

…まるで、もう二度と見られないものを忘れないようにするよう

に。

「さて…と」

体に付いた砂粒を落として陸は立ち上がる。

もう逢えることはないと思っていた紫織と再会でき、後は家に帰るだけとなった。

あの堅物なオヤジでさえアゴを外すほどびっくりするかもしれないな、と陸は慎一の驚く顔を想像して自然と笑みが漏れた。

…いや。 もう一個、大事な問題があったか。

ちらりと、陸はそちらに視線を向ける。

「チクシヨウ。 あんなコトまでやったのに…。
やっとなんか前だって…。 やっと誉めてもらっコトができると思
ったのに…」

すべての元凶、岩に縛られた猫妖怪をどうするかだ。
まだメソメソと泣いていて女々しいにもほどがある。
またなにかされたらたまらなかったが、この様子なら…

「あなたの穢れ、わたしが引き上げるわ。 だから安心して散りな
さい」

「——ひえっ！」

情けないまでにうわずった悲鳴を上げる烈。

鑑はまた鋭利な刀を作り出して烈を殺す気満々だった。 しかし—

「ちょ、ちょっと待った。 もういい。 もういいよ、鑑。
なにも殺す必要ないじゃないか」

そう陸は引きとめる。

やはり妖怪とはいえ生きている者を殺すのは気が引けたし、ここま
で情けなく泣かれたら気が削がれてしまったのだ。

なにより、感情を押し殺したような無表情の鑑の手を汚させるのは
なぜかイヤだと感じてしまった。

紫織も同意見のようで“ そうだよー ”と頷いている。

「——」

その冷たい紅い瞳が揺れ、言葉よりも雄弁に理由を問い正す。

「……だって命は無闇に奪っちゃダメだろ？」

それは人として当たり前の考え。

純粹だからこそ絶対の強さを持っていた。

「それにこのまま殺しちゃったら、烈くん何も反省できないよ？」

それは人が背負うべき罪のあり方。

高潔だからこそ無二の強さを持っていた。

「ちつ。　こんな甘いヤツに……負けるなんて……」

酷い言われようだったが、陸はこの判断に後悔はなかった。

……むう。　でも確かにオレもあんまり勝った気がしないな。

まだまだ修行不足だな。　毎日の素振りの回数もっと増やそう。

うーん。　できれば鑑に指南してもらえないかな。

——そんなこれからの事を考える余裕さえ陸にはあった。
だから忘れていた。

「しよせん畜生。　過去を反省し教訓として未来に生かせる人ほど
賢いとは思えないけど、裁く権利あるのはあなたたちだからね」

鑑は孫の成長を見届けたように莞爾に笑った。

鑑の凍れる瞳が苦笑と共に融解し、劔が振り下ろされる。

縄だけが斬り裂かれ、解放され自由になる烈。

「——いやいや。　泰山府君に劣らぬ寛大な恩赦。

あたしとしてもそうしてもらえるとありがたいさね」

そこに、風に乗って冷厳な声が陸たちに届いた。

命さえかけた戦いが終わり、緊張がゆるんでいたから重要なことを忘れていた。

鑑でさえ一瞬忘れていた。

ここがまだ地獄の入り口という非日常の世界だということを。

第二十三話 結・勝利（後書き）

…あれ。なぜかまだ話が綺麗に終わらない^^；

第二十四話 結・艶姿

「——あたしとしてもそうしてもらえるとありがたいさね」

突然、どこからともなく女性の声が空間に染み渡った。

周囲の薄闇が集まり濃い影になったかと思うと、人の形を象る。

「う、右大官吏様！」

縄から解放された烈の耳と尻尾が、敬礼するようにピンと立つ。

その視線の先に、黒い着物を妖艶に着崩した妙齡の女性が、何も無い錆びた荒野の中に騙し絵のように現れた。

黒曜石のような深い瞳。

着物よりもお漆黒の黒髪が肩まで届いている。

彼女の存在全てが黒一色に染め上げられているようだった。

ひどく美しい。

同時に、ひどく人間離れた存在だった。

烈と、…そして鑑と似た冷たい気配を放っている。

黒い女性は悠然とただそこに佇むだけなのに、陸はすべてを悟った。
桁どころか次元が違うのだろう。

相手が、人に似た人からかけ離れた存在だということ以外なにもわからない。

自分には震えるという原始的な抵抗をすることも。

恐怖を抱くという愚かな思考さえ働かない。

だから陸には、なにもできずにただ立つだけしかできなかった。
せつかくここまで来たのに、悔し涙を流すことさえできなかった。
鑑が、そんな無力な子供を庇う母親のように、汗を滲ませる手で劔

を構えた。

「そう身構えなさんなって、お姫さん。

あたしは別にあんたと戦いに来たんじゃないのさ。

だいたい、そんな下らないことに命を枯らすもんじゃないだろう？」

「——っ！」

しかし、予想と異なり黒い女性は、面倒そうに頭を掻いて場を取りなした。

否。 気さくで気楽げな声だが、その表情は鋭利な八重歯を唇からこぼし、魂まで凍り付きそうな冷笑を称えている。

この女は、自分の気が変わらないうちにふたりを置いて立ち去れと言ってるのだ。

力の差は歴然なのだろう。 武器を持つものに身構える必要がないまでに。

「…わたしはもう逃げたりしない。

喻え下らないと映ろうと、この子たちには手を出させない」

それでも鑑は劔を握り締めた。 後ろにある者たちを護るために。

「…鑑ちゃん」

「鑑…オマエなんで…」

陸はわからなかった。

鑑はどうしてここまでしてくれるのだろうか？

ただ傘を貸してくれた。 本当にそれだけのために？

「……本気で信じてくれていたのに。

本気で願ってくれていたのに。

わたしはその気持ちに答えてあげられなかった。

その償いを今ここでする。――ただそれだけのことよ」

その後ろ姿からは、彼女の感情がわからない。

だからその言葉の意味も気持ちも陸にはわからない。

ただ早く逃げて、とその華奢な背中が語っていた。

だがしかし――

「……いやごめん。決死の覚悟を決めているところ非常に申し訳ないんだけどさ。」

あたしはただこの馬鹿を迎えに来ただけなのさ。

だからそっちの坊主や嬢ちゃんにもなにかする気は更々ないって」

黒い女性は慌て気味に手を振り、そんなことを言った。

「……」

「……」

「……」

その言葉に妙な沈黙が蟠る。

ひとり早とちりした鑑が白雪のように白い頬を朱に染め、陸と紫織も微妙な顔をする。

やっちゃえやっちゃえと尻尾を機嫌良く振っていた烈も「……え？」とその動きを止めた。

「……もしかして友好的に笑ってたつもりなんだけど、ちつとばかり怖く見えた？」

顔色を伺うように細々と問い掛ける黒い彼女からは、敵意というものがまるで感じられない。

苦笑しているつもりなのが、敵意と見えて見えない以外。

「……………悪鬼羅刹の具現かと」

「……………食べられちゃうかと思ったよー」

「……………うちの叔母さんより」

顔を見合わせた後、遠慮のない意見が鋭く告げられる。

少なくとも鋭利な八重歯は見せない方がいいと思った三者だった。

「……………そっか。その様子だとチャージミングには見えなかったみたいだな……………」

しよばんと、このまま闇の中に消え失せてしまいそうなほど悲壮感を漂わせて、黒い女性は力なくうな垂れた。

「こらあ。おまえら右大官吏様に謝れっ！

毎日こっさり笑顔の練習されているんだぞ。

鏡の前でがんばられておられるんだぞ」

「よ、余計なことというな。この馬鹿」

彼女の事をよつぽど心酔しているのか、烈は歯を剥き出しに烈火の如く怒る。

栗色の肌を朱に染めた本人からはありがたがられず、頭に拳骨を浴びせられていたが。

「あらー。琴音おばさんといっしょだわー」

「マジかよっ?!」

衝撃の新事実だった。

「……。 ……地獄はいつからこんなゆかない場所になったのかしら……」

そんな光景を見て、お決まりのように蝶が羽ばたくような小さな吐息を漏らす鑑だった。

「ははっ。 どうせあたしの笑みは“ムンクの叫び”より呪われそうですよーだ。

“シャ。ク”も“デ。ペル”も効果ありませんよーだ」

体にカビが生えてきそうなほどどんよりと落ち込む黒い女性。

陸たちの強烈な意見が、彼女のトラウマを掘り起こしたようだ。それにしても、地獄なのに妙に世俗的な言葉だった。

というより、鑑を含めてみんなどこか人間味があつて妙に親しみを持てる。

「あ、あのー？ それであなたはどなたなんですかー」

微妙な場の雰囲気を変えようと、紫織は努めて明るく言った。

が、聞かれた本人はいじけて地面に“ムンクの叫び”の絵を描き続けて反応がない。

描き慣れているのかムダに上手かった。

「地獄のヤマ——閻魔大王直属の部下で地獄の番犬。

ヘルハウンドやケルベロスって言えば分かりやすいかしら。

右大官更なら確か姉の魅^み耶^やだったはずよ」

代わりに鑑が黒い女性の正体を告げる。
謎の少女はなぜか物知りだった。
が、その言葉に陸は首を傾げる。

「へ？ 余計わからねえぞ。 漫画とかで出てくるソイツって頭が三つもあるすげえ凶暴な狂犬じゃん。 いやまあ確かに笑顔はアレだけど…」

すごくきれいな人だ。 きれいすぎて怖いぐらい。
あれ？ けっきょく恐いのか。

「おまえっ。 右大官吏様になんてこと言っんだ」
「別にいいさ。 未熟者は黙ってな」

再び戦いを始めそうになるほど烈は激情に身を任せ陸に突っかかるが、それを黒い女性——魅耶が沈む声で戒める。

「ですが…」

「だいたいあたしはどう指示したのさ？
そもそもおまえが勝手なことしなければこんな間違いは起こらなかったはずだろうに」

「むぐっ。 …も、申し訳ございません、右大官吏様」

右大官吏とは彼女の役職の名前だろうか。
様付けだし、あの不遜な猫妖怪が敬っているし、見かけに似合わないとても偉いみたいだ。

でも、そんなことより陸は気になる事があった。

「…えっと。 間違いってどういうことっすか？」

たとえ相容れない関係にあっても、偉い人には基本敬語なのは体育会系の性だった。

「ん？ ああ。 そうさねえ……」

魅耶は思案げにあごに手を当て、子供にも伝わるように言葉を吟味した後、

「火車っていうのは本来死者の魂を運ぶものであって、生者に死を運ぶもんじゃないのさ。」

なのにこいつと来たらまだ見習いでひとりで仕事させてもらえないからって、ひとりで勝手に現世に行って馬鹿なことをしでかしゃがってさ」

躰をするように烈をつねりながらそう魅耶は告げた。

引っ張っていたのは頬ではなく三角形の耳だった。

……そういえばちょっと気になったけど耳が四つあるってどういうことなんだろう？

普通の耳は飾りなのか？

魅耶の話の内容はよく頭に入らず、ふとそんなどうでもいいことを陸は疑問に思った。

難しい話になると脱線するくせが直れば、彼の成績もよくなるだろう。

だが流石に今回ばかりは、違うことを考えるわけにはいかなかった。

「…へ？ はあ？！！ じゃあなんだ。 姉ちゃんがひどい目にあったのって全部こいつが悪い…いや、悪いのは元々だけど、勝手にバカやってそれに巻き込まれただけなんですか？」

なんだそれ。 信じられなかった。 そんなの迷惑どころの話じゃ

ないぞ。

オレはともかく、平和主義の姉ちゃんまで死にそんな目に遭わせた理由。

それが、そんな背伸びをしたいガキみたいな下らない動機だったなんて許されていいのか？

悪戯の加減を間違えて未だに怒られる自分でも、ここまでバカなこととはしないのに。

「本当にすまなかったね。謝ってすまされる事じゃないがこの通りだ。」

——ほら、おまえも」

そう言つて、ふて腐れている烈と共に頭を下げる魅耶。

魅耶の姿は子供の不始末を謝る母親そのものだった。

その姿に陸の胸はちくりと痛んだ。

寒さで古傷が痛むような不快な感覚。

「……いや。謝るなら姉ちゃんに言つて下さい。」

一番の被害者は姉ちゃんです」

魅耶から顔を逸らし、石ころに足を乗せて転がしながら、陸は気のない返事をする。

間違いだったからごめんなさいで許せるほど、陸は大人ではなかった。

「……ここまで助けに来たことを含めてホントにできた弟さんだね」

陸は暗い思考の海に沈む。

——そんな事を言われる資格があるのだろうか。

「わたしの自慢の弟ですからー」

彼女がそう優しい笑顔で微笑んでくれるのなら、真実なのだろう。たとえその微笑が、中学生の少女に相応しくない慈愛に満ちたものだったとしても。

「こんな怖い目に遭わせて悪かったね、嬢ちゃん。

どんなことをしたって償わせてもらうよ」

「……。……う。ご、ごめんなさい」

「はい、よくできましたー。ちよつと貴重な経験ができたし、別にもういいよー」

「……っ」

ぎちり、という磨り減る音。不快感に歯が悲鳴をあげた。

なぜこのクソ野郎は姉ちゃんには謝るんだろう？

なによりどうしてたったそれだけのことで彼女は許せるのだろうか？
なにがあっても許し続けて、ずっと損をしてきたのに！

「でも陸くんは謝ってもらってないし、簡単には許さないわよー」
「へ？」

そんな不満を陸が心の中で悶々と思っていたとき、紫織は陸の心情を見透かしたように矛先を変えた。

「川でもここでも危ないことばかりして、帰ったらたくさんお説教だからねー」

「うぐっ。お、お手柔らかに」

「ふふっ。だーめっ」

紫織が本気で説教した場合、本家の祖母の長話より疲れる。

なのに、その身内には少し厳しい姿に——陸を身内として特別扱いすることに——彼は少しだけ溜飲が下がるのだった。

第二十四話 結・艶姿（後書き）

あれえ… もう一度戦闘シーンがあったはずなのに…どうしてこうな
った^^；

第二十五話 結・審判（前書き）

多少トラブルが発生して三日に一回の予定より少し更新が遅れてしまいました。ごめんなさい；w；
…皆さんは地震大丈夫でしたか？

第二十五話 結・審判

「あの。お尋ねしますが、ほんとになんのお咎めもないのですか？」

これまで黙って話を聞いていた鑑が、魅耶に様子を窺うようにそつと問いかける。

ゆるい判断に納得がいかないという怪訝な表情。

どうやら陸の知らない内に、彼女も色々と危ない橋を渡っていたようだ。

本当に感謝してもし足りないと思つた。
帰つたら、なにかお礼をしないと。

「んー。うちの門番だつて座に送り返されただけで完全消滅したわけじゃないし。

現世と常世の境界に勝手に穴開けたことを含めて全部目をつむるさ。

今回ばかりはこつちが全面的に悪いんだからね。

それこそ、坊主たちがここに乗り込んでこなかったら、嬢ちゃんには謝罪の後、望み通りの来世を過ごさせてやろつて思つてたぐらいなんだ。

……だから、後の判断はあんたの裁量に一任するよ。
必要があれば大抵の無茶な要求も飲んでやるさ」

全面的に非を認めつつも、魅耶はそう胸を叩いて豪気に笑つた（？）。

……実際は薄い唇を？んだ姿が、決死の覚悟を決めた落ち武者のように見えて凄まじく恐かった。

美人なのに笑顔が残念なのは本当に残念だ、と陸は思わず苦笑いし

た。

「…心づかい痛みいります。　なら、地上への帰り道をおねがいます」

「うっん？　帰り道？　それにそれでいいのかい？」

「…とりあえずは」

「むむ？」

なにか含むところがある大人な会話に陸は唸ってみて…さっぱりわからなかった。

他になにが必要なだろう。

菓子折とか罰金とかかな？　…それは欲張りだよな。

でもあの鑑までもが敬語って意外だ。

本当に魅耶さんってすごい人なんだな。

それに望み通りの来世…って剣と魔法な異世界にもいけるのだろうか？

なんかすつげえ懂れる。

「…ふーん。　なら、ほいさ」

目を輝かせる陸をよそに、魅耶はつまらなげなかけ声と共に手刀を下ろした。

だが、たったそれだけの動作で空間が斬り裂かれる。

空間が湾曲し、亀裂が広がり、見渡すかぎり不毛な大地の一角に穴が浮かんた。

闇までも塗り潰しそうな昏い穴。

先が見えずどこに繋がっているかもわからないそれは、地上ではなく地底に繋がっていきそうだった。

しかしそこから、久しく感じるもののなかった生暖かい風が吹き込んでくる。

「これでいいかい？」

「…ええ」

「まったく。ちつとは話せると思ったけどあんたって他のヤツら同様お堅いねえ…」

努めて必要最低限に短く受け答える鑑に、魅耶はため息混じりに頭を掻き耑った。

「えつと…本当にありがとうございます、魅耶さん。」

陸くと喧嘩して烈くに怪我までさせたのに…」

「…ありがとうございます」

行儀正しく一礼する紫織に習い、頭を下げる陸。

烈と喧嘩したことに悔いはなく、陸は謝る気はなかった。

だが、川原の時のように鑑にまた腹を貫かれるのはゴメンだったのだ、出口を作ってくれたことには素直にお礼を言っておきたかったのだ。

「ははっ、いいのいいの。こいつにもいい教訓になっただろうよ」

「……い、痛いです。右大官吏様」

ぽかぽかと烈の頭を叩きながら破顔する魅耶。

やはりそれは、悪巧みをするようなどこか不気味な笑みだった。

でもその声は温かく、地獄の住人の癖に結構いい奴なのかもしれない、と陸は会って間もないのに不思議と信じてきたのだった。

「ああでも坊主。一応出しとくものは出しといてくれ」
「出しとくもの？」

魅耶がなんのことを言っているか陸にはわからなかった。

ここは見逃してくれって悪いヤツが隠して袖の下から出すアレかな？

「悪気はないようだからとがめはせんけど、ズルしちゃいかんよ。
女から渡された冥銭は渡してくれ」

ずっと目を細め、今までの砕けた表情とは異なる真剣な面持ちで魅耶は陸に語った。

その冷徹な黒曜の瞳は嘘偽りもすべて見通していると錯覚するほど透き通っていた。

「えええっ？ お、女？！ 陸くんお姉ちゃんの知らない内にいつの間に……」

……ちなみにぼやんとした紫織は紫織なにか盛大な勘違いをしているようだっただ。

「え？ あ。なんか紙のようなものは貰ったんですけど、オレまだ持ってるんすか？

瘴気を浴びた時に使ったとかなんとかって言ってたけど……」

射すくめられて萎縮する中、道中出会った一人の女性を陸は思い出す。

ぎこちなくポケットを探てみると、胸ポケット黒ずんだ紙が何枚か出てきた。

……先ほど見たときと色が違ってボロボロだ。

「ん？ 何だ、持ってたの知らなかったのか」

気まずげに頬を掻き、黒ずんで文字の見えなくなっていた冥銭を受け取る魅耶。

顔に近づけて眺めるのではなく、鼻をすんすんと鳴らしている。

匂い…を嗅いでいるのだろうか？

そのあたりは犬っぱいかな、と陸は思った。

「ふーむ。 本来三途の川の瘴気を抜うために発揮されるはずの加護をここで全部引き出すとはやってくれるねえ。 その上一時的にお姫さんの眷属化までされたら流石に未熟者の攻撃は殆ど通らないか…」

「……………」

詳しいことはよくわからないけど、オレは少し会っただけの名も知らない女の人に、二度も助けられたらしい。

陸は、ひとりだけの力で勝ったような気でいた自分が恥ずかしくなった。

「で、こっちは元々坊主のものだったものか。

およ。 その年で既に十銭も持つてるとはやっぱり君も相当な善人さね」

「えつと…すごいんですか？ 女の人のもっと持っていましたよ」

感心するように目を見開く魅耶に、陸は自信がなさそうに小さく呟く。

「その人を思う人の数だけ、そのお金は多くなるっていうのは話したでしょう？ なら、子供は人生が短いぶん、必然的にそれだけでもらえるお金は少なくなるのよ。 だからこそ、賽の河原で幼子が石

積みをする…なんて悪しき風習が未だに残っていたりする」

「悪しき…ねえ。まあ今ここでそのことを議論しても仕様がなし、概ねそういうことさ。渡し賃である六銭も持てない人間が五万という中、坊主は立派なもんだよ」

淡々とした鑑の説明に魅耶がつけ加えて陸を誉める。

頭を撫でられて完全に小さい子供扱いだったが、陸は不思議とイヤだとは思わなかった。

その手つきが、遠い昔の日の母親を回顧させるとも優しげなものだったからかもしれない。

「へー……って、えええっ?!」

自分のことを大切に思ってくれている人。

それがこの紙の数だけ確かにいる。

そのことがちよっぴり誇らしくて、陸は自分の分の紙のお金をじつと眺めていたが、突然冥銭がばらばらと崩れ去ってしまった。

「あはは。ただの人間が肉体強化の術なんか生意気にかけるから、呪詛対価として一気に劣化しちまったみたいだな。

一生をかけて培うものをたった一度の戦いで全部消費しちまった訳だけど、ま、気長にためなおせよ」

癪に障る馬鹿笑いをして、烈が衝撃の事実を語る。

「なっ。これってそんな大事なもんだったのか？

鑑っ。オマエ勝手になんてことしてくれたんだ?!

どうしてオレの分だけでも使った分の金くらい請求しなかったんだよっ!」

「〜」

「ええい、ムダに上手い口笛吹いて誤魔化すな」

聞き惚れて怒れないじゃねえか。

欲張りだと思っただのは訂正。　お金は大切だ。

「でもホントに、坊主たちのようなここにくるべきじゃない善人を巻き込んで悪かった。

しっかり教育しとくから、こいつの事もできれば嫌わないでやってくれ。

畏れられるのと嫌われるのでは違うからねえ」

「はあ……」

恐れられるのと嫌われるとの違いがよくわからなかったので陸はとりあえず生返事をした。

というより失ったものがわりと洒落にならなくて気分が沈んでいた。みんな慰めるだけでお金を分けてくれなかったんだ。

姉ちゃんなんか一円（100銭）以上持っていたくせに、こういうところ妙に厳しいんだよなあ、と陸は悲観する。

「なにか勘違いしてないかい？　これは坊主のためでもあるんだよ」
「え？」

陸の陰鬱な表情になにか感じ取ったのか、魅耶が忠告する。

「死ぬまで答えがわからないはずの冥銭の額がわかってるのはあんまりいい事じゃないのさ。　変な慢心は身を滅ぼしてしまうだろ。

それこそ善行を心がけることに終わりなんてないんだし、川を渡った後にこっわい裁判が待ってるんだからさ」

幼い子供を脅かすように意地悪げに笑う魅耶の顔は、やはり恐かった。

でもそれは相手を思いやり訓示を与えるためのもので、陸には温かく感じられた。

「嘘つきくんは閻魔さまに舌を引っこ抜かれちゃうって話ですねー」

「ひでつ。地味に痛そうだな、それ」

「誰も楽しくてそんな事やってるわけじゃないさ。」

でも罪を裁くものがいなくなれば、人は簡単に墮落しちまうだろう？

縛られることのない本当の自由を与えられたら、人っていう軟弱な生き物は大抵とんでもないことをやらかすからねえ」

拳げ句の果てに人に訓戒を与えるはずの妖怪まで決まりを破るとは困ったもんだよ、と疲れた表情で魅耶は肩を竦めた。

「むぐう。地獄も色々と大変なんすね」

なんだ、悪人を裁くやつまで悪人じゃないということか、と陸は納得する。

考えてみればそれも当然か。

「さて…と。じゃあ反省会も込めてちよっくら飲みに行くかな。」

坊主もそろそろいるべき場所に帰りな」

地図には載っていないだろう場所での数奇な世間話も終わり。

年寄り臭く肩を鳴らして魅耶は伸びをした。

陸は魅耶があんまり地獄に相応しくない人に見えた。

でも、こんな人が地獄にいたら楽しいとも思えた。

「じゃあな、坊主。死んだときにまた会おうさ」

鑑、陸、最後に紫織を、身を案じるように真剣な表情でしばらく見つめた後。

まず聞くことのない別れの挨拶と共に、魅耶は闇に溶けていった。潔い姿。お酒がよく似合いそうな人だった。

「おい」

「——なんだ？」

続いて仏頂面の烈が同じく仏頂面になった陸に話しかける。

「おまえさんも、死んだらその時は俺が責任持って運んでやるからありがたく思えよ。」

抜けてるおまえの姉も、賽の河原で石積みしないでいいようしっかりと送ってやる。

次は絶対負けないからな」

早口でまくし立てると、突風と共に烈は姿を眩ました。

「……どういう意味なんだ？」

というかオレは死んだらまたアイツと戦わなくちゃいけないのか？

「……。さあ？　しょーねんに輪をかけてばーな畜生の思考なんてわたしにはわかりかねるわ」

「うーん。きっと裁判が終わった後、順番待ちに関係なく、優先的に運んでもらえるのよー。よかったじゃないー」

気のない返事の後に、本当に嬉しそうな気の抜けた返事が続く。

「よかった…のか？ あいつのことだから運ぶだけで、たぶん行き先は天国とは限らないのか？」

「きつと行けるだけいいわよー」

「……。そうね…。しょーじよの言うとおりかもしれないわね」
「…むう。 そうなの…か。 よくわからねえな」

赤錆びた景色が横に見えるほど更に首を傾げる陸。

ただ。 捨て台詞を残し走り去る烈の姿に昔の悠也を思い出した陸だった。

迷惑なやつだったけど、すべてが終わって振り返ってみると、なぜか不思議と胸に怨みや憎しみは残らなかった。

だから高揚した気分の中、 陸は鑑の歯切れの悪い様子の理由には気づけなかった。

第二十五話 結・審判（後書き）

一応これで地獄編の話は一区切り。
でも…？

第二十六話 結・帰路

何度も死にそうな目に遭いながらも、鑑の協力もあってようやく紫織を取り戻すことができた陸。

魅耶が作ってくれた地上への出口を見つめ、達成感に自然と笑みが零れる。

まるで底の見えない夜の海のように真っ暗な穴。

けれど、その先には光が広がっているのだと不思議と信じられた。だってそこから吹く風は優しく——そして温かい。

不思議な少女の話に賭けて異世界に乗り込んだ時は、未知の存在に對して脅えさえあったが、今の陸には恐いものなどなにもなかった。

「よし。じゃあそろそろオレたちも帰ろうぜ」

これから遠足にでも出かけるように、陸は元気よく提案した。明日からは夏休み。

また悠也とバ力をやったり、部活に精を出したり、それから…今度こそ勉強をがんばったりと、また何気ない楽しい日々が過ぎせる。その隣には、ちゃんと姉ちゃんがいる。

陸はそんな今まで当たり前だったことが、ただ嬉しかった。

一度失いかけたからこそ、今度はしっかりと彼女を護れて誇らしかった。

——だから忘れていた。

遠足とは家に着くまでが遠足だということを。

「まって。その前に…」

「ん？」

「——あの時は傘を貸してくれてありがとう。」

あなたにとっては些細なことだったかもしれないけど、その想いにわたしはほんとうに救われた」

鑑は、長い黒銀の髪が地面に付くほど深く頭を下げてお礼を述べた。

顔を上げた時に見せた顔はまったくの不意打ちだった。

童女のはにかみのように、とても嬉しそうに彼女は口許を緩めていた。

陸は、自分に向けられたものではないのに、思わずその顔に見とれてしまった。

「いえいえ、どういたしましてー」。

可愛らしい猫さんが濡れずに済んだんだもんー」

「……。……。へ？ ネコさん？」

紫織のよくわからない発言に現実に戻ってくる陸。

どうしてそこでそんな可愛い言葉が出てくるんだろう？

いやまあ今の鑑は正直可愛いと思うけど、傘は鑑が貸してもらったんじゃないかったつけ。

「……さ、さまつなことだから聞き流しなさい」

そんな陸の探るような視線に、珍しく感情も露に視線を泳がせ鑑は口ごもった。

「んん？ なんだよそれ」

仏頂面大会ダントツの一位に輝きそうなあの鑑がこんな顔するなんて怪しい、と陸は訝しむ。

「もう。女の子同士の話を聞いちゃめーですよー」

「ずるっ。オレが隠し事したら姉ちゃん怒るくせに」

「それは悪いことを隠すからよー」

「…むう（鑑の猫に貸したのかな。鑑が動物飼ってるなんて激しく想像できないけど）」

紫織は意味深に笑うだけで答えてくれなかったので、陸は鑑と紫織の間になにがあったかよくわからなかった。

「ま。いつか」

だがそのような疑問も、慌てる鑑と微笑む紫織の顔を見ていたらどうでも良くなる。

紫織のどんなことも優しく包み込むような柔和な笑顔を見て、やっと大切な人を護ることができたのだと、陸は実感したのだった。

——だから彼は忘れていた。

まだ我が家には辿りついていないということ。

微笑を浮かべる彼女がなぜいつも一緒に彼と離れ離れになったのかを。

元いた世界に戻るため、陸と紫織と鑑は荒んだ大地に浮かぶ穴へと入った。

魅耶が用意してくれた闇さえも呑み込むほど昏い穴は、正規の道のためか境界に触れても静電気のような痛みを覚えることはなかった。

その代わり、その道のりは古城の回廊のように果てしなく長く、暗いものだった。

足下がまったく見え、そのまま足を踏み外して真つ逆さまに落ち
そうな錯覚さえ覚える。

その暗く頼りない道に、もう恐いものなどないと思っていた陸もさ
すがに不安を覚えたが、鑑が松明のように暖かな光を指先から出し
て周囲を照らしてくれた。

魔法使いさまさまだ。

これなら細く狭い道も昼間のように安心して歩ける。

明かりに照らされた道は先ほどのように不気味ではなく、地獄への
道のりには似合わない凹凸の少ない緩やかな上り坂だった。

なんでも、それでも徳の高い人用のかなりいい道らしい。

「——でさ。 悠也のやつが…」

明るい道中では、身振り手振りを交えた陸の元気な話し声と、テン
ポよく相づちを打つ紫織の笑い声が絶えず賑やかだった。

非日常な体験をしたからこそ、平凡な話が恋しかったのだろう。

陸の話す内容は、陸の今学期の成績のことや、友人の悠也と喧嘩し
たこと、今日学校であったこと、そしてこれからの夏休みのことな
どだった。

鑑はそんな仲睦まじい姉弟に遠慮したのか、一歩後ろを静かに歩い
ていた。

晴れやかな二人の表情と異なり、平静な美貌が白く浮かび上がって
いた。

童話の中の姫君のように長く美しい髪が明かりを吸って神秘的に煌
き、対照的に彼女の背後には暗い影ができる。

「あれ？」

順調に道を進み、丁度折り返し地点に差し掛かった頃。
突然陸は立ち止まり、目頭を押さえた。

「どうしたのー？」

「いや。なんか目にゴミが入っちまったみたいだ。
姉ちゃん、ちょっと悲しいこと言ってくれねえか」

「んー。 そうねー。」

そーいえば最近陸くんが一緒にお風呂入ってくれないのが悲しいなー」

いきなりの無茶ぶりにものんびりとマイペースで答える紫織。

「あれ、そだっけ？　じゃあ家に帰ったら一緒に入る……って、ば、ば、ばか。　ばっかじゃねえの。　い、いきなりなに言いだすんだよ！？　前、もういつしよには入らないって決めたじゃねえか」
「ぶー。　けちー。　たまにならいいじゃないー」

幼い駄々っ子のようにごねる紫織だったが、一五歳になり、その体つきは一段と女性らしいものになっていた。
弟であるうと陸も変に意識してしまう。

「ばかつ、ダメに決まってるだろうっ！」

顔を真っ赤にして顔を逸らす陸。

仲睦まじい姉弟愛も、気難しいお年頃の問題には勝てないようだった。

「……ばか。　わたしだつてーずかしーのにこーな時ぐらい……」

「ん？　ゴメンなんて言った？」

「何でもないもん。　もう陸くんなんて知りませんー」

拗ねたように紫織は頬を膨らませ、ずんずんと先に歩いてしまった。

「へ？ なに怒ってるんだよ、そんなに急いだら危ないぜ。

…って鑑までさり気なく一歩後ろに距離開けんなよ！

中学生になつてからはさすがに入ってねえって」

「ぎゃくに言えば中学生になるまで入ってたんだ。 …… けどもの」

氷点下のように冷たい目と言葉で鑑に蔑まれた。

「むぐつ。 ……。 …… ああ、でもゴミは取れたか」

今は目に光る心の汗だけが陸の友達だった。

主に陸と紫織が喋りながら、また彼らは出口を目指す。
とても仲のよい姉弟だ。

あの程度のことならごめんの一言ですぐに仲直りできるのである。

生暖かくも淀んでいた今までの空気が、風の流れと共に新鮮さを帯びてきた。

出口が近いのだろう。

夏独特の蒸し暑さを肌で感じられるようになった。

長い間薄闇の中にいたため、地上の自然の光が恋しい。

おのずと、彼らの足取りも早くなる。

だが——それを阻むものがあつた。

「きゃっ」

鈍い音。

紫織が短い悲鳴を上げ、チェックの黒い傘を落とす。

「どうした、大丈夫か？」

隣を歩いていた陸が後ろを振り返り、紫織を気づかう。

「ううー、いひゃい。 なにかにぶつかったよー」

涙目になりながら、紫織は鼻をさする。

「ぶつかっただって…なんもねえぞ。 ったく姉ちゃんはドジだなあ」

「そんなはずないよー。 だってほら、ここに変な壁が…」

紫織がドアを叩く仕草をすると、なにもないはずの場所で硬質な音がした。

彼女が触れた箇所にアクリル板のような透明の膜ができていたのだ。

「んなバカな。 ど、どういうことだ？ オレは普通に通れるぞ」

陸が触れようとしても、なんの問題もなくそのまますり抜ける。

その見えざる壁は紫織だけを頑なに拒んでいた。

見えざる境界が紫織と陸を隔てる。

「鑑。 オマエはこれ通れるか？」

陸はこれまで幾度も窮地を救ってくれた存在に、助けを求めるように視線を送った。

視線の先には、さきほどのはにかみが嘘のような色のない鉄面皮があった。

透き通るような白い美貌の中、冷徹な知性を匂わせる紅い双眸だけが、彼女の手に灯った光を吸って妖しく輝いている。

「通れるわ。でも少女は通れない。

だってそれは生者の世界と死者の世界の境界線だもの」

鑑はこの不可思議な現象の原因に心当たりがあるようだった。

——しかし、これまでと違い救いの手が差し伸べることはなかった。

紫織を見捨てるように、鑑は二人の間を素通りする。

「陸。　　ここでお姉さんにお別れを言いなさい」

「…………え？」

背を向けたままその表情を窺わせず、鑑は感情の乏しい冷たい声で言った。

初めて鑑に名前を呼ばれたためか、陸はその言葉にすぐに反応できなかった。

第二十六話 結・帰路（後書き）

さて。 次回で地獄編も本当の佳境を迎えます。
今しばらくお付き合い戴けると幸いです。

第二十七話 結・微笑

「姉を取り戻し、再び皆で平穏に暮らす。
今回の件はそんな風に全てが丸く収まるなんてことはありえない
わ」

流れるような幽玄の長髪をなびかせて後ろを振り返り、今まで言葉
数少なかった鑑が滑らかに舌を転がし始める。

「いきなりなにを…？」

陸は鑑がなにを言いだしたのか理解できなかった。
さっぱり理解できなかった。

ただ、ぼんやりと眠たげな瞳が今や伶俐に眇められ、無機物の美が
結晶化したような永遠に溶けることのない輝きを誇っていた。

少女の外見とは異なり、永い年月を生きた者だけが持てる冷厳な面
持ち。

この状態の鑑はどこまでも美しく、そしてどこまでも恐ろしかった。

「あなたの姉は既に死んで靈魂だけの状態なの。

死者は死者である以上、生者の世界には戻れない」

「ば、バカなこというなよ、冗談きついで。

姉ちゃんはここにいるだろ？」

困惑気味に口を噤んでいる紫織を陸は見つめる。

すぐ近くにいたはずなのに、触れ合えるのに、温もりさえ感じられ
るのに。

なぜか陸は紫織との距離が絶望的なまでに遠く感じた。

彼女の笑顔がただ遠い。

「冗談？ そんな淡い幻想を抱くことこそ冗談にして欲しいわね。
貴方はそもそも一体何処で私に会ったのかしら？」

「——っ！」

鋭利な刃物で斬り捨てられるような冷淡な言葉に、陸は声もなく呻いた。

眩暈がした。初めはあの川原。その次は通夜。そして——
鑑の言うとおりだった。

大切な人の死という絶望の中で、この不思議な少女と自分は出会ったのだ。

「……ど、どういうコトだよ。鑑、言っただじゃねえか。

オレの願いを叶えてくれるって」

突然の出来事に、陸はわらにも縋り付くような思いで、鑑に手を伸ばす。

彼女の胸倉を乱暴に掴み、激しく訴える。

確かに彼女はそう言ってくれたはずだ。

物騒だけど、無表情だけど、それでもやっぱり本当はいいヤツだった、味方だって思っていたのに、どうして今さら——。

「……。貴方、酷い勘違いをしてるわね。

私はもう一度姉に逢わせてあげるとは契約したけど、姉を黄泉返してあげるだなんて世迷い言は一度も言っていない。

死とは絶対。その負債を一体誰が支払えるの？」

「マジで今さらなに言い出すんだよ。

魔法でオレを治してくれたときみたいに……」

「全ての嬰兒を抱く原始の母君は、同時に死さえもその胸に抱き込

む。

でも貴方は人の子。

安易に死を取り返しが付くものだと考えることそのものが罪だと知りなさい」

およそ逆らえない超然とした冷厳な声で、鑑は陸の言葉を遮り、彼の手を払いのけた。

オマエの望みは叶わないと、鋭利な言葉や冷淡な行動よりも雄弁に、その感情を帯びていない透徹とした目が静かに語っている。

陸の手が弱々しく彷徨う。

超然とした態度の彼女からは頼りない藁さえも差し出されることなく、彼はただ力なく膝をついた。

「なんで……だよ。　なんでなんだよ！」

鑑だって弱いヤツが酷い目にあうのは嫌いだって言っただじゃねえか。

ヒデエよ。　嘘ついたのかよ。　オレのこと騙したのかよ」

陸はわけがわからなかった。

唐突に訪れた今の状況が理解できなかった。

ただ悔しくて涙が溢れた。

鑑が悪いんじゃないということはある。

彼女が言うとおり、本来死とはそれだけ絶対のものなのだ。

どれだけ寂しくても、悲しくても、大変でも、陸たちの母親は帰ってこなかったのと同じぐらい絶対のもので、誰にも覆すことはできないのだ。

だから鑑を咎めるのは間違っている。

でも、それでも、陸は誰かのせいにせずにはいらなかった。

自分の無力さを呪うより、初めて目の前にいる彼女のことを怨んだ。

「……人聞きが悪いわね。死別した姉にもう一度逢わせてあげただけでも、人間には身に余るほどの奇跡でしょう？ あなたが支払った代償でこれ以上のことを望むなんて強欲よ」

「——っ！ なんだよ、それ。 なんなんだよ。 そんなのって、ありかよー！」

ここまで希望を与えてくれて。　ここまで協力してくれて。たとえなに考えてるかよくわからない物騒なヤツでも目的と心だけは同じだと思っていたのに……。

どうして……そんな何事にも無感動な冷たい顔で、いきなり平然と突き放せるんだ。

こんなのただ裏切るよりもあんまりだった。

なら最初からなにもしてくれないほうがよかったと、陸は幼子のように涙を零し喚く。

「………。　……。　怨み、憎み、蔑んでくれて構わないわ。

勝手に幻想されて担がれ、勝手に幻滅されて廃れる。

それが私の在り方だから」

「マジでなんだよ、それ。　ばっがじゃ……ねえ……のっ……」

嗚咽の混じる陸の切実な訴えに、鑑は真っ直ぐ視線を逸らさず受け止めた。

それがせめてもの償いのように。

だが彼女がしたことはそれだけだった。

みんなが幸せになれることはない。

誰もに救いの手が差し伸べられることはない。

だからこそ人は叶わぬユメと知りつつも、祈り、願い、希い続けるのだ。

「別れの挨拶をすませなさい。　納得がいくまで待ってるから」

そう小さく言い切って、鑑は物憂げに壁に寄りかかり目を瞑った。
完成された彫刻のような美を持つ彼女は、目を閉じることで更に作り物めいたものとなる。

「もういいよー、陸くん。　何となくそんな気はしてたんだー」

力なく泣きはらす陸に、紫織は優しく語りかける。

「——っ！　もういいって、姉ちゃんまでなに言い出すんだよっ」

陸は嗚咽まじりに声を荒げた。

誰にでも優しいくせに、自分には厳しい紫織が許せなかった。

紫織はそんな幼子のように泣く陸を撫でようとして、透명한境界に弾かれる。

目に見えないそれは、されどどこまでも強固に死者を拒絶する。

「気がついたら知らない場所に独りぼちですごく心細かったけど、陸くんはこうしてちゃんと助けに来てくれたんだもん！。　ならもう十分よー」

だから紫織はただ静かに微笑んだ。

その微笑みは切ないほど儚げで、どこまでも本心を“偽”わった優しげなもの。

一人の少女である前に一人の姉であろうとする、陸の大好きで大嫌

いな笑顔。

「まだ助けてなんかねえよ！　ここまで来たんだぞ。
なら、姉ちゃんもいつしよに家に帰らねえと。
オヤジも、琴音おばさんも、悠也だって、みんな悲しんでるんだ
ぜ」

陸は諦められなかった。

そんな笑みを見せる紫織のことを諦められるはずがなかった。

「無理だよー。　だってわたしは……もう死んじゃったんだから」
「——っっ！」

決定的で、致命的な言葉が、静かに微笑む紫織本人の口から漏れて、
陸は息がつまる。

「それなのに、陸くんはわたしのためにたくさん怪我までしてがんばってくれたんだからねー。　ならもうそれだけで十分だよー。
だからもう泣かないでー」

たまらず陸は境界を越え、自分から紫織に飛びついた。
こんなにも頬に朱が差しているのに。

こんなにも温もりがあるのに。

紫織は陸が簡単に通れる壁を絶対に越えられない。

これが触れられる壁ならば、陸は木刀が折れようと身が碎けるまで
体当しようつぶち壊すのに、自分はあまりの無力だった。

「わたしねー。　昔は陸くんのこと大嫌いだったんだ」
「——え？　なにを……」

紫織は陸の頭を愛おしげに撫でながら、思い出話をするように懐かしげな顔で、ゆっくりと語り始めた。

「陸くんが三歳の時。お母さん心臓の病気で死んじゃったでしょー？」

「…そうだったっけ。母さん心臓の病気で死んだんだ」

唐突な話だが真剣な話をしているのだと感じ取り、陸も真面目に受け答える。

おぼろげな記憶。陸は母親のことを写真でしか知らなかった。だからそんなことはどうでもよかった。

たとえ母親がいなくてどれだけ悲しくても、寂しくても、大変でも、今ここにいる紫織に変えられるものはなにもないのだから。

「ほら。やっぱり陸くんお母さんのことほとんど覚えてない」

「…ごめん」

そんな陸に紫織は頬をふくらませて、彼のおでこを指先で突く。

「それでも今でもかなり怒ってるんだよー」

お母さん、あんなに衰弱した状態でも思いつきり陸くんのことを愛してくれていたのに。

わたしのこと全然構ってくれずにずっと陸くんにかかりつきりだったのに。

どうして忘れられるのって。

どうして忘れてそんな風に楽しそうに笑えるのって」

穏やかで静かな声。

しかしそれはなによりも陸に深く響いた。

「——違うって。そんなの母さんの分も姉ちゃんがオレのこと

を愛してくれたからじゃねえか」

突然の紫織の糾弾に陸はただ怯える。

陸が震えながら声を絞り出すように言ったのは、批難の言葉が聞き取れなかったからではなく、この先に見える結末に恐怖したから。

「ううん。わたし、陸くんのとこなんか全然好きじゃなかったよー。無理して陸くんを産んだせいで、お母さんの体がさらに弱っちゃったって知ってたからむしろ憎んでいた。それでもお母さんに、陸くんのことお願いねって最期に頼まれたから嫌々面倒見てたの」

ちつとも楽しそうには見えない顔で、それでも紫織はくすくすと乾いた声を漏らす。

「わたしはお姉ちゃんだからっていろいろ我慢した。

そして自分の思ったことをそのまま素直に行動にうつせる陸くんがただ羨ましかったー。羨ましくって、眩しくて、憎いつて思うぐらいにねー」

「——やめろよ」

そんな顔が見ていられずに陸は止めにはいる。

もう忘れていた記憶。原因さえ忘れてしまったが、昔一度ひどい喧嘩をした時の顔より恐ろしくて、陸は紫織の顔を正視できない。

「昔の陸くんはちょっとしたことですぐ泣くし、目を離したらすぐどこかに行っちゃうし、何度そのままいなくなっちゃえばいいって思ったと思う？」

「やめろって」

陸の静止に構わず紫織は言葉を続ける。

「でもね、いつの間にか陸くんの面倒をみるのが楽しくなってきた。いなくなったらすごく不安になって体が勝手に陸くんを探してた。」

陸くんがわたしを頼ってくれるのがとっても嬉しくなってた。

陸くんがいてくれるだけでわたしはこんなにも幸せだった」

「やめてくれっ！！　“だった”ってなんだよ。」

これじゃあ、もうまるで二度と会えなくなるみたいじゃねえか！」

たまらず陸は声をはりあげた。

せっかく会えたのに、せっかく取り戻せたと思ったのに。

どうしてそんな風に哀しそうに笑うんだ。

どうしてちゃんと笑ってくれないんだ。

「家に帰ってからいくらでも説教ぐらい聞いてやるから、ここではやめてくれっ！」

「お馬鹿さんねー。家に帰れないからここでいったのよー。」

…うん。　ずっと言いたかったこと言えてよかったわー」

「っつ！　一緒に風呂に入りたいって言ったじゃねえか。」

もう絶対入ってやんねえぞ」

「さすがにちよつと恥ずかしいかなー。」

いい機会だからそろそろ姉離れしようー」

そう紫織は小さく嘘を言っではにかみ、陸の頭をもう一度大きく撫でた後、小鳥が啄ばむように優しく彼にそつと口付けをした。

「わたしを助けにきてくれてありがとうー。　大好きだよ、陸くん。」

わたしの代わりにお父さんのことお願いね。

ほっつておくとお父さんってだらしないとこあるからー」

呆然とする陸を真っ直ぐに見つめながら、紫織は別れの挨拶を告げる。

母から弟のことを頼まれた娘が、今度は弟に父のことを頼む。それは清くとも呪いの言葉だった。

第二十七話 結・微笑（後書き）

あとがきは次回まとめて。

第二十八話 結・泡沫

「——わたしの代わりにお父さんのことお願いね。
ほつつておくとお父さんってだらしなないとこあるからー」

紫織の別れの言葉。

それに陸は——

頷けなかった。 頷けるはずがなかった。
でもそれだけで、彼はなにもできなかった。

情けなく滲む陸の視界。

——自分は姉のそばにいて、彼女の本物の笑顔を護りたかった。

でも傍にいても意味がないほど、悲しいまでに自分は弱かった。
泣きたいほど弱かった。

今も昔も、記憶の中の自分はいつも泣いていた。
いつも姉に助けられ、護られてばかりだった。

結局自分はただ背伸びをしていただけで、今までなにも護れていないのではないか。

ただ彼女の優しさに甘えているだけで。

ただ彼女に負担をかけているだけで。

ただ泣いていたあの時と、なにも変わらないのではないのだろうか。

ならもう諦めたって……

「つつ！ ばつかじゃねえのっ。 クソくらえ!!」

今は情けなく泣いている時じゃない。

陸は負けじと涙を擦って齒を食いしばった。

違う。ここで諦めたらダメだ。それじゃあ前と同じだ。彼女はもういいと言ったけど、オレは妥協しない。諦めてやるもんか。

だって、こんなのオレの願いじゃない。

オレの願いは何も叶っていない。

こんなバカみたいなお人好しが損をするなんて嘘だ。

そんな話、オレは認めない。認められない。認めるはずがない。

「鑑！」

後ろを振り向き、陸は胸に渦巻く激情を言い放った。

「鑑っ！！ 頼む、一生のお願いだ。オレの願いを叶えてくれ。

姉ちゃんを、—— 久遠院紫織を助けてくれ」

目を閉じて彫刻のように動かない鑑に、陸は恥も外聞もなく拝み倒した。

これまで何度も窮地を救ってくれた存在に、望みを託した。

「人の子が安易に死を取り返しがつくものだと思うなって言わなかった？」

ゆっくりと彼女の瞼が開かれる。

魔性の美貌を彩る紅玉のような瞳が、魂の奥底まで見透かすように陸に注がれる。

麗艶な彼女の言葉に彼の心臓が凍りつく。

血液が巡らなくなり、脳が思考を放棄しかける。

ともすれば目の前の愚者へ死の審判さえもが下されているのだと、

陸は感じ、覚悟した。

「……知ってる。でもあんいつて簡単につてことだろ。
じゃあオマエなら——オマエなら、難しいけどできないことも
ねえんじやねえか？」

それでも陸は言の葉を紡いだ。

それは屁理屈のほうがまだましの強引な論法だった。
されどたった一つしかない突破口だった。

瞬きもせず真っ直ぐ互いを見つめ合う陸と鑑。

そんな彼らを紫織は驚きと共に交互に見つめている。

それは今までで一番永い一瞬だった。

——果たして返ってきた鑑の小さな嘆息だった。

しかし、その顔は冷たい美貌ではなく真実を見破られ観念したよう
な気まづげな顔。

「……ええ。大きな代償が必要だけど確かに可能よ」

希望を見いだせる言葉を、しかし辛らそうな微かな声で鑑は言った。

「ホントかつ！」

簡単には言ってくれなかった以上なんらかの問題があるのだろう。
だが、それでも現れたただひとつの希望に陸はすがりつく。

「肉体はまだ失われてないから反魂の術と……」

「難しいことはいい。オレにできることはなんだ？」

「……天秤と同じ。ひとりを黄泉返したいなら、ひとりを黄泉送
りにしないといけないわ。その覚悟があなたにある？」

試すように静かに陸の瞳を見つめる鑑。

「――」

その眼差しに陸は喉を鳴らす。

禁断の黒魔術つぼく人の命が必要になるのか。

言い出しにくいわけだ。

でも彼の答えは初めから決まっていた。

ここまで来て、途中で投げ出すはずがなかった。

「――鑑。　オレの心臓だろうと魂だろうとなんだろうとくれてやる。」

一個しかないものでも全部やる。

だから姉ちゃんのことを生き返してやってくれ」

震える身体に渴をいれ、渴いた唇を舐めた後、陸は掠れる声をはりあげた。

死への恐れを強引に払拭するためではない。

魔性の妖姫の要求する代償は、自分でも支払えるだけむしろ安いほどだ。

彼が望むのは愛する姉の幸せだけなのだから。

ただその隣にもう己がいることができないのが残念で、頬にまた雫が流れ落ちる。

「……。　本気？」

「おう。　当ったり前だ」

「……。　……。　正気？」

「……。　いや……。　姉ちゃんが大好きで狂ってないとできないかもな」

「……。　……。　そ。　いいわ。　最低の男になる覚悟はあるみたいね」

……確かに鑑の言うとおり最低だろう、と陸は思う。
姉ちゃんが助かってオレは死ぬ。
ならばこれも妥協。

根本的に問題が解決するわけでもなく、ただの自己満足だ。
それでもオレは姉ちゃんに生きていてほしかった。

紫織が助からない話より陸は納得できた。
無力でなにもできない自分に打ちひしがれるよりも満足できた。

「ちよつ。 何言い出すの、陸くん？ 鑑ちゃんまで」

そんなことを紫織が認めるはずがなく、声をはりあげる。
そんなことを紫織が望むはずがなく、声をはりあげる。

「……ごめん。 でもオヤジのような頭堅いヤツには姉ちゃんのほうがいいだろ。」

「だいたい溺れた時に助けてもらった命を返すまでじゃねえか」
「なっ……。 いや、いやっ。 そんなのだめよ。」

陸くんだけ、そんなのずるいよ」

自分が死を迎える時でさえ穏やかだった紫織が、目を見開き、声を荒げ始める。

…… 本当に、ただの自己満足だ。

「ほんとにごめん。」

でもオレは、それでも姉ちゃんに生きていてほしいんだ」

陸の決意は紫織の表情を見ても変わらなかった。
そう照れくさそうに笑った後、陸は卑怯にも鑑のいる方向に跳んだ。

死者と生者の境界が阻み、これで紫織にはもう手出しはできない。

「ばかつ。 やめなさい。 やめてっ。 陸くん」

境界を破るべく振るわれた傘が紫織の手を離れ、陸の足元に転がった。

見えざる壁を必死に手で叩く紫織の声は最早金切り声。

そんな悲愴感を漂わせる声を背に、陸は鑑を見た。

その怜悯な瞳が今は揺れていて、本当にそれでいいのかと静かに問いかけている。

陸の脳裏にこれまでであった様々なことが思い出される。

その傍にはいつも自分の姉がいた。

それに一瞬迷い、陸は静かに頷いた。

だからこそオレはここまで来たんだ。

そして姉ちゃんのためにできることがあるなら、なんだってしてあげたい。

……たとえ嫌われて、怨まれることになっても。

「姉ちゃんにもう一度会わせてもらったし、こんなきれいなヤツに殺されるんだ。」

別にこんな終わり方も悪くねえよ」

これから死ぬというのに、陸は自分でも驚くぐらい穏やかに言いきってしまった。

「あら、ナンパ？」

それに、鑑は彼が安心できる清涼な姿で応じる。

「…こんな時まで変なこと言ったって。
決意が揺らいじまうだろ」

その意外な優しさに苦笑し、陸は振り返りそうになった足をぐっと固定する。

「そ。残念。

奢ってくれるならお茶ぐらいしてあげても良かったのに」
「…悪いな。イヤな役押しつけちまって」

それが本心なら本当に少しだけ残念だ。
最後に鑑にも謝り、陸は静かに身構えた。

「ぱーね。こんな時まで変なこといわないで。
しょーねんに謝られるようなことはなにもしてないわ」

鑑は静かに目をつぶった後、彼女の手が慰撫するように静かに陸の胸に当てられた。

ゆっくりとその手は陸の体の中に吸い込まれていく。
身構えていたからか、陸は不思議と痛みを感じなかった。
ただ。溢れ出す血いのちと共に力が抜けていく。

色づく世界が失われていく。
護りたかった彼女の悲鳴が消えていく。

神秘的な彼女の手の意外な温もりが消えていく。
でも結局この本当はどうしようもなくお人好しな少女はいつたい何者だったんだろう？

そんな疑問さえも闇に飲まれ、すべては泡沫のユメと消えていった。

第二十八話 結・泡沫（後書き）

むう、スランプ…というより完全に実力不足ですね…。

今はこれで精一杯。

人物の心理描写ってどうしてこんなに難しいんでしょう。

これがわたしの三人称モドキの文の限界かな^^；

いつか某怪盗さんのように心を盗めるような文章を作れるようになりたいなあ；w；

精進しますので、アドバイス、批判、感想どーんといいです。

…

…

…

まだ続きますから、あんまり厳しい評価はやめてもらえるとありがたいです。 小生、打たれ弱いから；w；

閑話・追憶

陸の意識が沈んでいく。

なのに、思考だけははつきりとしていた。

真っ暗な暗闇の中に自分が独りだけいる。

周囲に誰もいないせいか、陸はとてもさびしく、そしてかなしかった。

一筋の光。 闇の中に姉の紫織の姿が浮かんだ。

必死に手を伸ばしたが、届かずその姿は闇に呑み込まれていく。
オヤジの叱責の声が聞こえたが、どこにいるかわからない。

最後に母さんの温もりを感じたが、冷たい闇に奪われていく。

いつも己の傍には姉がいた。

だが逆を言えばいつもいたのは姉だけだった。

家族みんなが揃ったなにげないありきたりの生活。

それは、自分にとって目を反らしたくなるぐらい眩いものだった。

遊園地に行く親子。

プールに遊びに行く家族。

みんなで一緒に食べるご飯。

周囲が当然のように過ごしているそれが、どれだけ羨ましかったか。

だからこそ、今あるものは絶対護ろうって思ったんだ。

剣道を始めたのだって、そんなちっぽけな理由からなんだから。

なら、忘れてしまったなんて嘘だ。

心のどこかで、ちゃんと覚えている。

景色が変わる。

白黒の世界が広がり、どんどんどんどん遡っていく。

……昔、商店街の神社に家族四人揃って出かけた事があった。

姉ちゃんどころか、オヤジも、そして死んだ母さんまでも一緒だった。

今までずっと忘れていたずっと昔の話だ。

七五三に詣でたのだろう。

一人だけ晴れ着姿のオレは、とてもはしゃいでいた。

病氣だった母さんが珍しく体調のよかったその日は、すごくいい天気だった。

長い長い石の参道。 たくさんの階段。

小さな子供の足で、頂上を目指して姉ちゃんと競うように駆け上がった。

頂上になにがあるかも分からず、ただひたすら胸のわくわくと共に階段を上っていった。

自分の年である三ずつ数を数えながら上り続ける。

遠のく姉の背中を必死に追いかけてながら上り続ける。

そうしてたくさんの階段を上った後、いつの間にか独りぼっちになっていた。

後ろにも、前にも、横にも誰もいない。

葉っぱだけがざわざわと踊っていた。

木の枝の揺らめきが「こっちにおいでおいで」しているように見える。

木々に連れ去られそうだと不意に怖くなって、オレは縮こまって泣き出してしまった。

——後もう少しだ。 男の子だろう——

ふと、オヤジの声が後ろから聞こえた。

——早くこないと置いてっちゃうよ——

昔はわんぱくだった姉ちゃんの声が引つ張ってくれた。

——がんばって、陸くん——

最後に母さんの優しい声が背中を押してくれた。

その日は応援するだけで、誰も手を引いてくれなかった。
だから涙でグチャグチャになりながら、オレは意地になって一人で
上を目指した。

転んで、泥だらけになって、やっとの思いで頂上に辿り着いたのだ。

白黒の世界が鮮やかに色づく。

寂れた神社の大きな大きな赤い鳥居をオレは見上げる。

あれだけ怖かった木々のざわめきがよくやったと拍手しているよう
に聞こえて。

振り返って見えた、高くから望む景色がとてもとてもきれいで。

悲しさや悔しさとは違う涙が出た。

——ああ。　ひとりでできたんだ——

ちっぽけな自分には石の階段を上りきったことが大冒険のように感
じたのだろっ。

オレは胸のときどきが止まらなかった。

いつまでもいつまでもその美しい景色に見とれていた。

その後、いつまでも泣いているオレにみんなは謝ってきたんだっけ。
よく覚えていない。

でも、家族四人揃って神社の神さまにお祈りしたことは覚えている。

—— おかあさんのびよーきがよくなって、また“しちごさん”にくるときも、みんなげんきでここへこられますように——

家族みんな揃って、そうお願いした。

そんな昔の話。

欠けているものなんてなにもなかった頃の大切な思い出。

でも、その小さな願いは叶わなかった。

どれだけ神さまにお願いしてもずっと。

その冬、体調を悪化させて母さんは死んだのだ。

酷く裏切られた気がして、その日、「かみさまのうそつき」と神社へ罵りに行った。

あれだけ感動した神社からの景色も、木々が枯れて全然きれいじゃなかった。

でも寒さで震えていると、彼女に会って、その後姉ちゃんが捜しに来てくれた。

今度はその姉ちゃんまで……いや、結局死んだのはオレだっけ。

……考えがぼやけグチャグチャに混ざっていく。

どんな綺麗な思い出も、色々な絵の具を混ぜたらそうなるように真っ黒に染まっていく。

でも、すべてが黒く染まってしまう前に。

——どうか。 なんでもないありきたりな毎日をまたみんなで過
ごせますように——

そう闇の中、静かに陸は願った。

ちっばけな思いが現実になることをこいねがって。
なによりひとりの美しい少女の言葉を信じて。

閑話・追憶（後書き）

次回よりエピソード。

起承転結のルールを破った“末”の話がスタートです。
今しばらくお付き合い頂けると幸いです。

第二十九話 末・明日（前書き）

悪いユメを見た。

ひどく辛かったのか。 ひどく怖かったのか。 ひどく悲しかったのか。

よくわからないけど、とにかく何度も泣きたくなるような悪いユメを見た。

いいユメを見た。

とても幸せだったのか。 とても嬉しかったのか。 とても楽しかったのか。

よくわからないけど、とにかく何度も泣きたくなるようないいユメを見た。

第二十九話 末・明日

あたり一面まっくらだった。

……そんな中、闇を抜く清廉な鈴の音が、聞こえた気がした。

「――」

寝苦しさにその者は寝返りを打った。

暑い。そしてうるさい。

ミンミンという大合唱が暑苦しくって寝てられない。

「んっ……。朝……？」

不快げに目尻を擦った後、その者は瞼を開いた。

目やにがひどい。

おじいさんの横顔のような木目のある和風の天井がぼんやりと目に映った。

よく知っている天井。

気だるげに視線を横に移す。

窓から差し込む鮮烈な夏の陽射し。

眩しい。なんだかそれがとても懐かしかった。

見慣れた部屋。

比較的きれいに整理整頓された六畳半の部屋がそこにはあった。

「オレの部屋……」

当たり前のことのはずなのに、彼は口にしてみて、そのことにひど

く違和感を覚えた。

当たり前のことのはずなのに、それが信じていなかった神さまに感謝したくなるほどすごいことに思えた。

だが寝起きの頭はぼんやりと霞がかり、その正体が掴めない。

この部屋の持ち主——陸はまだ休息を訴える体に鞭を打って上体を起こした。

筋肉痛のような全身の痛みに顔を顰めつつ、習慣的に枕元の携帯を手にとった。

日付を確認してみる。

七月二十五日の午前七時三分。

あれから一日経った夏休み初日。

「あゝゝゝ、くそつ。マジで体痛え。

制服着たまま寝ちまったせいかな？」

大きな欠伸と共に両手を背中側に倒し、陸は伸びをする。

そもそもどうしてオレはそのまま寝てしまったんだろう？

いくら面倒だろうと自分はそこまでだらしないつもりはなかったし、制服にしわが寄るから絶対にしたらいけないときつく注意されていたのに……。

——途端、激しい飢餓感にも似た不安が陸の胸を襲った。

「……姉ちゃんっ！」

姉の紫織のことなら毎日見飽きるほど見ているはずなのに、陸はなぜか無性に今彼女の顔が見たくなった。

あののんびりと穏やかな顔を見ないと、この胸の焦燥感は収まらない。

陸は着替えもせずにドアを壊す勢いで蹴破ると、下の階に雪崩落ち

た。

急いで一階に下りると、茶の間で新聞を読んでいる陸の父——愼一がいた。

「……おはよう」

騒々しい陸に若干眉をひそめるも、いつも通りの平凡な朝の挨拶を彼はした。

「——っ」

ならいつも通り、彼女も台所にいるはずだ。
いてくれるに決まっている。

父親に返事もせずに、陸は突風のように部屋を横切った。

でも包丁を刻む安心する音も、食材を調理するいい匂いも、なんにも感じない。

……まるで誰もそこにいないかのように。

——違っっ！　今はちよっと休んでいるだけだ。

「姉ちゃんっ！！」

不安で歪む視界で陸はドアをこじ開けた。

——果たして台所には人の温かみはなかった。

小奇麗に整理整頓されていて、彼女はどこにもいない。

「ははっ。　まったく。　珍しく寝坊しやがって。　しょうがねえ

なあ」

認められなかった。

陸は慌しく階段を駆け上り、紫織の部屋にノックもせずに入った。

——誰もいない。

慎一の仕事部屋、客間、トイレ、風呂場。

家中探し回ったが、追い求める彼女の姿はどこにもなかった。

整然と片づいている部屋は、彼女がいた痕跡そのものがなくなってしまうているかのようにだった。

「そんな……」

陸は激しい雷雨に打たれたように、力なく項垂れた。

そして、昨日のことをすべて思い出した。

同時に無力感に打ちのめされ、片膝をついた。

「ははっ。ほんと、ばっかじゃねえの。

中学生にもなって、バカなユメ見過ぎだぜ」

ちつとも楽しくないのに、乾いた笑みが陸の口から勝手に零れてくる。

強くつねった頬は、絶望的なまでに痛かった。

——オレがこうして今生きているなら、不思議な少女も、地獄での壮絶なやり取りも、最後のあの会話も、なにもかも、昨日のことはすべて都合のいいユメだったのだろう。通夜を行ったこと以外。

だって姉ちゃんはいない。どこにもいない。

なら姉ちゃんはやっぱ死んだんだ。

もう戻ってこない。戻ってきてくれない。

その温もりを感じることはずっとない。

その笑顔は遺影の中だけに久遠にある。母さんのように。

「どうした？」

抜け殻のように呆然と茶の間に戻った陸に、慎一が訝しげに新聞から顔を上げて短く問いかけた。

「今日は……」

――昼頃に告別式があり最後のお別れになる。

しかしそのことを認めてしまうのが怖くて、陸は言葉を途中で呑み込み、

「……準備とかはもういいのか？」

致命的な単語を抜かして父親に確認した。

「ん。とつくにすませてある」

「……オヤジはいつも通りなんだな」

「ああ。社会人はいつだろうと怠けていられないものだ」

「っ！ どうしてオヤジはそんな平気な顔してんだよ?!」

「まだ時間には十分余裕がある」

陸の悲痛な声に腕時計を一度見た後、慎一はまた静かに新聞へ視線を落とした。

いつも通りの堅物な慎一の態度が救いのようで、同時にひどく理解できず陸を苦しめた。

「…で。いつ行けばいいんだ？ できるだけ早めに行った方がいいだろ？」

あんまり遅いと、体裁にうるさい親戚にいい顔をされない。陸はこれ以上イヤな気持ちになりたくなかった。

「？ それはそうだが、何故陸がそこまで気にするんだ？」

眉間に深いしわを刻み、慎一は本当に怪訝そうに陸を見上げた。

「は？ なに言ってるんだよ。オレも行くからに決まってるだろ」

「私の職場に来られても困るのだが…」

「職場って、こんな日まで仕事に行くことねえだろっ！」

「私はまだ休日じゃないんだ」

「つつ！ 休日も何も今日は十二時から告別式じゃねえか」

慎一の態度があんまりだったので、陸は言いたくなかった言葉をつい言ってしまった。

「告別式？ 一体誰が死んだんだ？」

されど、返ってきた反応は予想外のもの。

そしてなにより望んでいたもの。

「誰ってそんなの……。……ん？」

覚悟を決めてその言葉を口に出そうとして、陸は慎一との会話が微妙に噛み合っていなかったことに気がついた。

父親とここまで長い会話が続いたのは久しぶりだったせいかな、今ま

で気付かなかつたのだ。

「全く何を寝惚けているんだ。

今日から夏休みだからといって気が緩んでいるぞ」

ひいきにしている野球のチームが勝つて、長い年月を共にしてようやくわかるぐらいほんの少しだけ嬉しそうに頬を緩めているその姿は、本当にいつも通りの父親の姿だった。

そこに悲愴的な面持ちはどこにもない。

なら、姉ちゃんはいったいどこに……？

そこに――。

「ただいまー」

陸の疑問を解消するのんびりと間の抜けた声がした。

陸の不安を解消する明るく温かい声が玄関から聞こえた。

熱病に魘されたように、陸はふらふらと玄関に向かうとそこに求める姿があつた。

「姉ちゃん……どこ行つて……？」

「んー？ お味噌切らしちゃったから、ちょっと近くまで買いに行つてたのよー。お腹空いたかなー？ すぐにご飯にするから待っててねー」

ふんわりと朗らかに笑って紫織は靴を忙しげに脱ぐ。

常に弟のことを思いやるその様は夢でも幻でもない、変わらぬ彼女の姿だった。

ただ――疑問は増すばかり。

「あれ、どうしたのー。」

まるで外れたはずの宝くじが実は当たってたみたいな顔してー」

宝くじなんて買ったことがないから陸には自分がどんな顔をしているかよくわからなかったが、今の状態の方がもつとわけがわからなかった。

陸は悩ましげに首を傾げる。

ユメじゃなかった？

確かにユメにしたら昨日の出来事は血の味まで鮮明すぎた。

でも…オレはこうして生きてる。

最後の部分で記憶のつじつまがあわない。

「あのさ、姉ちゃん。昨日ってなにがあった？」

陸は確認のために、一緒に不思議な体験をしたはずの紫織に問い掛けた。

「んー？ 終業式でしょー。」

夏休みはいっぱい遊んでいっぱい勉強しようねー」

小動物のように小首を傾げた後、紫織は鼻唄を歌いながら家の中に入っていた。

……この様子だと本当になにも知らないようだ。

困惑するように周囲に視線を漂わせると傘立ての中に、チエツクの黒い傘が整然と並んでいた。

最近無くしたはずの紫織のお気に入りの傘がそこにはちゃんとあった。

白い少女が借りていた傘がそこにはちゃんとあった。

「どうなつてやがるんだ？　まさか本当に全部ユメだった…とか？」

嬉しかったが、まるで見知らぬ土地で独りだけ置き去りにされた感覚。

わけがわからず傘を手にとつてみると一枚の紙切れが滑り落ちた。拾ってみるとそこには文字が書かれていた。

——川原での一件はなかったこととして歴史を修正しておきました。

試すようなマネをしてごめんなさい。

貴方たちの無私の願いの美しさは本物でした。

よつて恩恵を与えるに相応しい心を持っていると判断します。

本来少女が生きられるはずだった分の命は、

少年にはなく火車猫に支払わたので、

安心して貴方は元の生活に戻ってください。

限りある生を後悔のないよう健やかに謳歌できますように——

その丸みを帯びた意外と女性らしい筆跡には見覚えがあつた。

「……ホントにありがとう」

その優しさに陸は涙を滲ませる。

そして三度読み直した後、宝物のように大切に紙を折り畳んだ。

直接ではなくわざわざ手紙で伝えたのだ。

陸は今度こそもう彼女と会うことはない気がした。

「……むぐう。でもあの猫妖怪がオレの肩代わりをしてくれたのか。……まあ、いっか。妖怪って長生きそうだし、元々アイツが悪いんだからな」

一瞬あの生意気なヤツのことも気にかかったが、陸は首を振る。

「陸くんー。ご飯できたわよー」

「おう、わかった。今行くぜ」

紫織の呼びかけに、現金にも陸の腹の虫が空腹を訴える。

やっと元通りの生活をつかみ取ったんだから、喜ばないと嘘だ。

陸は今、物足りない身体に、紫織の料理を腹いっぱい詰め込みたい気分だった。

第二十九話 末・明日（後書き）

さてお待たせしました。

エピソード、末の話のスタートです。

意外と長くなりそうなのでいくつかに分けて投稿させてもらいます。

読者の想像を（いい意味で）裏切る話を創造できればいいなあと思います。

第三十話 末・夏空（前書き）

…ジャンルにキーワードをいくつか追加したいけど、ネタばれだからできない；w；

第三十話 末・夏空

「……はあ」

朝ご飯を食べ終わり、陸は自分の部屋で一服する。

計画的に勉強する気にも健康的に体を動かす気にもなれず、彼はただベッドに寝転んだ。

ふと、ベッドの横に置かれていた黒皮の木刀入れを手取る。

中には愛用の虎鉄丸。

よく手入れが施されたツヤのある木目に、力強く神秘的な気配の残り香があった。

それは不思議な少女がいた証拠。

でもそれも直に消え、彼女がいた証はこの紙だけになるだろう。

「……………はあ」

あれほど望んでやまなかったいつもの生活を取り戻せたのに、陸はなぜか物足りなさを感じていた。

紫織の料理をお腹いっぱい食べても、それはさらに増すばかり。

もう一度、深いため息と吐くのと共にその文章を読みなおした。

何度読み直しても文面は変わらない。

歴史さえも変えられるほどのとんでもない存在。

今まで謎だったが、今ならその正体に臆けながら心当たりがついた。

と。携帯から剣客アニメのオープニングの音楽が鳴った。　　メールだ。

の意地だった。

今度は即座に返信がきた。

“——なんだ　そのひよっこイングリッシュっぷりは本人か——”

どういう認識のされ方をされているか、陸は一度真剣に語り合いたくなった。

…主に拳で。
命を懸けた戦いを経験した今なら、悠也ぐらい片手で勝てる自信があった。

「ったく」

姉ちゃんは誘えば絶対来るだろうから、とりあえず出かける準備をしないと。

ハンカチに、ティッシュに、財布、それから…帽子かな。

今日は本当にいい天気。

外出するのには少し暑そうだ。

予想通り陸の誘いに紫織は二つ返事で頷いた。

慎一も仕事に出かけたため家の鍵を閉めて、二人は商店街の奥を目指す。

青の絵の具で染めたように真っ青に澄み渡る夏の空は、まだ日が昇りきっていないこともあってとても心地いいものだった。

「なんか今日はご機嫌だな、姉ちゃん？」

清々しい夏空に負けないぐらい元気なスキップに合わせてハミングをしている紫織は、見ている陸まで幸せな気分になりそうなほど楽しげなものだった。

二人で出かける時はたいてい機嫌がよかったが、今日は五割増しだ。

「んー？ えへへー。 あんまりよく覚えてないけどー、昨日夢を見たんだー」

「ユメ？ へえどんな？」

この様子だとすごくいいユメだったのだろう。

「ええつとねー。 最初は、知らない場所で独りぼっちですごくさびしくってー。 途中で陸くんが迎えに来てくれてー。 でも最後には陸くんがわたしを置いて消えちゃうんだー」

記憶に思い出すように順番に指を折りながら、紫織は陸の予想に反することを喜色を隠さぬ明るい表情で言った。

「え？ ええつ？ じゃあなんでそんなにご機嫌なんだよ？」

驚きは二度。

おそらく昨日のことを彼女も夢として覚えていたこと。

そしてそのことを喜んでいること。

……情けないことに二つ目のほうが、陸ははるかに驚いた。

普通逆なハズだ。 逆じゃないと困る。

勝手に命を投げ出すようなマネしておいてマジで身勝手かもしれないけど、実はオレがいなくなってくれたほうがいいと思われてたなんて、軽く死にたくなる。

—— 本当はオレのことが嫌いだった。

別れ際言われた告白が思い出され、陸は表情を曇らせる。

「だってー。夢でよかったなーって。

こうやって今は陸くんがちゃんと隣にいてくれるんだもんー」

「あ…」

それは想像をはるかに上回る不意打ちだった。

そう朗らかに言って紫織は本当に嬉しそうにはにかむ。

影のない本物の笑顔。

陸がなにより護りたかった笑顔。

「——そっか」

どんな物事も良い方向に考える紫織の性格を陸は甘く見ていた。

たまに紫織のことを芯の強い女性だと表現する人がいるのが改めて納得できた。

「——でも陸くん。男の子だからって変に格好つけないでね。

わたしは陸くんが元気で一緒にいてくれるだけで、それだけで十分なんだから」

ふと締まりない表情を改め、紫織は真摯にお願いをした。

真剣ながらもどこか悲しみに彩られた影のある面持ち。

冷たい風に永く吹かれて震えているような、不安げな頼りない姿だった。

「おう。姉ちゃんもオレのそばから勝手にいなくなったりすんなよ」

もう絶対に放さない。こんな顔をさせない。

陸はその顔に静かに誓った。

「えへへー。じゃあ迷子にならないように腕組んでー」
「ったく。しょうがねえなあ」

まるで場を弁えない若い恋人。

見るものがいたら胸焼けを起こしそうなほど甘々な二人だった。

「ん？」

そんな二人の前を茶色の毛玉が軽快に横切る。

「にー」

それはどこか見覚えのある仔猫だった。

こちらに一度視線を向け、呆れたように小さく鳴いた。

「なっ。オマ……」

「おーい、陸ー。紫織さーん」

「あー、悠也くんー。おはよー」

「グッドモーニングです」

「……。」

二人の横から悠也が元気よく走ってくる。

陸がもう一度前を振り向いた時には、仔猫は見間違いのように跡形もなくいなくなっていた。

「どうかしたのか？」

「……いや、なんでもねえ。ただ、誰かさんが中途半端になんちゃって英語を使うのにイラってきただけだ」

幾分表情を柔らかなものに変えて、陸は軽い皮肉を言った。

「おいおい、なんか今日はいつにもまして好戦的だねえ。でもそれはお前もじゃん？ どっか遊びにいかないかって誘ったら、イエスなんて一丁前にアダルトぶっちゃってさ。マジでおまえは誰ですかって思ったぜ」

悪友の悠也が言われたままにするはずがなく、即座に反論する。

「あ。あれってそういう意味だったのか」

「もっとスタディしろよ。夏休みは遊んでる暇ねえんじゃね？」

やれやれと大仰に首を振って、悠也は陸を小馬鹿にする。

「オマエだって英語と算数以外そんなに得意ってわけじゃねえだろ。この平均男が」

「算数じゃなくて数学だ。まだ小学生気分の抜け切らないユーは知らねえだろうけど。だいたい3の成績が一個もないヤツに言われたくねえんだよ。このアンバランスが」

優秀な学生とは言えない似たもの同士の二人だった。

「こら、二人とも喧嘩はめーですよー」

「……う。ご、ごめんなさい」

「はい、よくできましたー」

言葉の応酬が拳の応酬になりそうになった絶妙のタイミングで、紫織が仲裁に入る。

それに陸と悠也は言い訳もせず素直に謝る。

それを紫織は優しく誉める。

いつもの光景なはずなのに、陸にはそれがとても眩いものと思った。

「——今日はあつついなー」

夏の暑い陽射しに目を細めて、もう一度だけ生意気そうな仔猫がいた場所を陸は眺める。

……ちらつとしか見えなかったけど、尻尾が下げられていて敵意というものは感じられなかったし、さすがにもう懲りて悪いことはしないだろう。

でも、案外すぐ隣に不思議な世界はあるのかもしれない。
なら、ちよつとした偶然でまたあいつと会うこともあるだろう。

「おう、早く神社って涼もうぜ」

「あそこって不思議なぐらい静かで涼しいからねー」

「そういえば三人で行くのって久しぶりだよな」

……仲良く神社に向かう三人を見つめながら、仔猫は塀の上で眠そうに欠伸した。

第三十一話 末・神社

「……いち、に、さん。 いち、に、さん」

神社に続く長い参道を、陸は一段一段上る。
追憶にふけるように三段ずつ数えながら上る。

梢から零れる木漏れ日が涼しげで心地いい。

昔は天国に繋がっているんだとさえ信じていた途方もなく長いこの石の階段も、成長した今では足腰の鍛錬に丁度いいぐらいだった。
中間地点の趣さえ感じられるくすんだ朱色の鳥居を潜る。
今聞こえるのはセミの鳴き声だけ。

街中の喧騒から離れ、人気のない場所独特の気の安らぐ静けさを感じ取ることができる。

……静けさを感じ取ることができる？

「？ って、あれ？ なんか騒がしくねえか？」

上に近づくにつれてそれは顕著になる。 セミではなく人の気配。

「そういえば下にも何台も車あったよねー。

なにかお祭りでもあるのかしらー」

「あれ、知らなかったんですか？ 元々古かった上に、前の大雨の時に落雷が落ちたとかなんとかで、あの神社ブレイクしちゃったそうすよ」

「え。 うそ」

悠也の言葉に、紫織は目を丸くして足早に階段を上る。

カツコつけのカタカナ語の意味がよくわからず首を傾げながら、陸

もその後を追った。

麓から数えて三本目の朱い鳥居を潜ると境内に辿り着いた。

濡れた落ち葉の他にお菓子のお菓子や空き缶などが所々に散らばる小汚い石畳。

その脇には水の止められた苔むした手水場。

少し進んだところにセミの抜け殻がくつついた無人の社務所。

その向こう側にはほこりの被って少々頼りない狛犬。

鳥居に彫られた猫のぼうが、躍動感がある。

鳥居に施された彫刻が他とは違うこと以外、そこは典型的な小さな無人の神社だった。

それでも神社だけは立派だったのに、その奥にあるはずの建物は……

「……うわー、ひどい」

「……マジでももの見事にブレイクしてるな」

「……ブレイクって壊れたって意味だったのか」

社は無残な瓦礫の山と化していた。

落雷で火災が発生したのか、真っ黒な木片が哀愁と共に乱雑に散らばっている。

そこには古いながらも歴史を感じさせる荘厳な建物の面影はどこにもなかった。

開いた口がふさがらないとはこのことだろう。

「……陸くんや。一応聞いてやるけど、ブレイクのこと、なんだと思ってたんだ？」

現実から目を逸らすように悠也が重い面持ちで陸に問い掛ける。

「……いや。誰がこんな神社を買ったろうって思ってた」

「はあ？　なんだそれ」

「なんとなくどんな間違えしたかわかるけど…」

陸くん、夏休みは英語がんばろーねー」

……Break をBlakeと陸は勘違いし、“急に人気が出た”の意味を“売れた”と解釈したために起きた間違いだった。ややこしい。それがわずかもわかった紫織はすばらしい。

「お。　紫織ちゃんたちも神社の様子を見に来たのかい？

ご覧の通りこの有様だけど」

陸たちの存在に気づき気さくに手を上げる一人の男性。　肉屋の主人だ。

他にも古本屋の店主。　酒屋の女将。　八百屋の若大将などなど。子供の秘密基地にされてしまいそうな大きな木の下に、腕を組んで真剣に話し込んでいる商店街の大人たちがいた。

議論は白熱しているようで時折声を荒げ、肉屋の主人以外、陸たちに気づいていない。

「おはようございます。

あの、この神社つてもしかしてこのままなくなってしまうんですか？」

三人を代表して、一番親交のある紫織が肉屋の主人に疑問を投げかける。

「いや、その心配はないよ。　こうして地元の有志が集まって、再建されることはちょうど今決まったから」

「——そうなんですか。　よかったー」

「ああ。　私たちにとってもこの神社は思い出深い場所だからね」

そう言つて肉屋の主人は優しげな眼差しで神社を見回した。

そのまま世間話を始めた紫織を置いて、陸と悠也は神社の残骸に近づいた。

奇跡的に賽銭箱だけは焼け残っていた。

陸は徐にポケットから財布を取り出し、五円玉を投げ入れる。

チャリンという金属音ではなく、カコンという木にぶつかる貧相な音がした。

……どちらにせよ久しぶりに聞いた音だ。

なにを願えばいいかわからなかったので、この神社が元通りに直りますようにと陸は手を合わせておいた。

思い出のある場所がなくなってしまうのはやはり悲しいことだから。

「……陸が賽銭を入れるなんて珍しいな。

お前つて神さまなんて信じてなかったはずだろ？」

「今日は特別だ」

流石に可愛そうすぎる。　それに――

「……そういえばこの神社の神さまってどんなヤツなんだ？」

「さあ？　商店街だからエビスさまみたいな商売繁盛の神さまじゃね？」

「えっとねー。　わたしが聞いた話だとー。　昔偉い祭司さんがおまじないに使つてた銅鏡が祀られてるそうよー。　ここは神社の門前町として栄えたつてわけねー」

世間話を切り上げて戻ってきた紫織の説明に、陸は心臓が跳ね上がった。

「どうきょうって鏡のことだよな」

モンゼンマチがなんなのかわからなかったが、陸が気になったのはそちらのほうだった。

あの少女と同じ発音のものがまつられている。

偶然だとしたらそれはできすぎだろうか？

ずっと昔。おぼろげな記憶を辿ると、なぜかオレはここでも彼女を見た憶えがあるのだ。

泣きじゃくるオレの前に彼女は現れた。そんな記憶が。

「ええ。そうよー。それであと奥社のほうでは祭司さんが飼っていた猫さんも守り神として崇められてるんだってー」

「へえ、そうだったんすかぁ。全然知らなかったな。」

だからここの神社って鳥居に猫が彫られているんすね」

「わたしも知ったのはつい最近だけだねー」

タイムカプセルは確かその辺に埋めたはずだし、いつてみましようかー？」

「うへえ。まだ上るのか…」

紫織の問い掛けにイヤそうな悠也と異なり、陸は半ば自然と頷いていた。

ろくに整備されていない獣道に近い参道を、息を切らしながら更に上ること数分。

陸と紫織と悠也の三人はこぢんまりとした社に辿り着いた。

セミの鳴き声さえも遠く、静謐で神秘的な雰囲気を感じだしている。地元の者でも訪れることの少ないそこは一種の聖域だった。

「あー。思い出した、思い出した。」

“ 恐き銀の猫見つめる木の下に財宝は眠る ” だっけか
「そういえばそんな暗号を作ったりもしたわねー」

懐かしげに周囲の鎮守の森を見渡す紫織と悠也。

二人と異なり陸は、背の高い大人なら通れないような小さめの鳥居に視線が釘付けとなった。

鳥居の上の部分に、社を護るように掘られた一匹の猫の彫刻。

雨風にさらされ塗装が剥げ落ちた色が、あまりにもあの不思議な少女の髪の色に似ていたのだ。

「……可愛らしい猫さんって…まさかな」

小さく呟き、陸は首を振る。

獲物を狙うような鋭い目付きの猫の下に名前らしきものが彫られていた。

——三咫鏡美禰袴比売

「えーと。さん…かがみ、び…ひ、ばい？ むずっ。」

——なあ姉ちゃん、あれってなんて読むんだ？」

「んん？ えーとね…。 たぶん“みたかがみのみねこひめ”かな
」

難しい。舌を噛みそうな名前だ。それがきつと…

「二人ともなにやってるんだ？ 早くトレジャーハントするぞ」

「おう。今行く」

まるで生きているような猫の彫刻に静かに手を合わせた後、陸は先

に木の下で待っている悠也の元に駆け足で向かった。

交代で土をスコップで（陸は忘れたが、準備よく紫織が用意していた）掘り起こすこと数分。

土や石とは異なる澄んだ金属音が鳴った。

「おっ！」

「ビンゴじゃね？」

期待を胸に手で土を退けていくと、緑色の金属製のクッキーの箱が出てきた。

タイムカプセルにしては貧相なものだが、小学生が用意できるものとしては上出来だろう。

「わー、そうそう。これこれー。どんなもの入れたっけー」

土のこびり付いたお菓子箱を払いながら紫織は懐かしげに微笑む。

「さあ。覚えてねえや」

だからこの胸の高鳴りと共に箱を開けてみるだけだ。

「――」

牛乳瓶の蓋。 蝉の抜け殻。 折り紙で作った手裏剣。

ビー玉。 花の冠などなど。

箱の中身は一見ガタクタばかりだった。

でも陸は不思議とがっかりはしなかった。

手にとってみて懐かしさと共に色々な思い出が込み上げてくる。

お金にして遊んだ牛乳瓶の蓋の中でも特に珍しい種類のもの。

よく飛ぶお気に入りの手裏剣。

子供の宝物。それはきつと本人にしかわからないものだ。

「わっかんねえな。俺はあの頃はなにが大切でこんなもの埋めたんだよ？　というかそもそもなんでタイムカプセルなんか埋めたんだろ？」

――訂正。　本人も覚えていない場合がある。

「えー。覚えてないのー？　悠也くんが親の都合で転校することになって、みんなで思い出を作ろうってやったんじゃないー」

「ああ、そういえばそうだったな。でも結局あれってオマエのただの勘違いだったんだよな。ははっ。あん時の悠也ってばマジで笑えたよなあ。ベソかきながら僕のこと絶対忘れるんじゃないぞ、なんて言ったその翌日に気まずそうな顔して……」

「うわっ、うわあああ！！？　忘れてた俺のダーククロニクルをよくも掘起しやがったなっ！！」

思い出の品を前に昔話に花が咲く。

埋めたものを掘り起こすのではなく、その時の思い出を掘り起こすことが楽しいのかもしれない。

そんなことを陸は悠也の赤らめた顔を見て思うのだった。

第三十一話 末・神社（後書き）

冒頭部分の伏線をちゃんと回収できました^^；
でもやつちまった。

調子に乗ってあれこれやったせいで伏線全部回収しきれそうにない
です；w；

ホントにごめんなさいorz

第三十二話 末・希望

「あ。 オレ、もしかしたらすつげえこと発見したかもしれない」

タイムカプセルに埋められていた牛乳瓶の蓋を手に、陸が唐突に叫んだ。

「まあた始まったよ。 陸のすつげえこと発見したが。 今度はなんだ。」

袋についたスナック菓子のカスを残さず全部食べきる方法か？
それとも氷の上を滑らずに歩く方法か？

せめて暑い日も快適に過ごせる方法を教えてくれよ」

大袈裟に手を叩いた陸に対し、悠也は冷めた反応を返す。
からかわれて形勢が悪かったからでもあつたが、何度その下らない
すつげえ発見に付き合わされたか察してあげて欲しい。

「あいにくもつとすげえことだ。 ほら、あれだ。 前社会で習つた大海なんとかってモーゼが発見したヤツあるだろ」

「モースさんが発見した大森貝塚ね」

長年付き合いがあるだけあつて、弟、陸の少なく誤った情報からも正確に言いたいことを把握する優秀な姉、紫織だった。

「そう貝塚だ。 こうしてタイムカプセル掘ってたら、あれって実はゴミ捨て場じゃなくって子孫のために残したお宝なんじゃないかなあつてさ、ふと思つたんだ。 これってもしかしたら歴史的な発見じゃね？」

「は？ なんだよ、それ。 埋蔵金が貝がらってロマンの欠片もね

えぞ」

「んー。 そうかなー？ わたしはそれってすごく素敵だと思うよー。」

貝殻は昔のお金だって話聞いたことあるしー、案外そうかもねー」

どうだつと得意げな顔をする陸に対し、賛否両論。

「ほらな。 今回は二対一。 お金は残るけど残せないものだぜ」

「なに決め顔して矛盾したこと言ってるんだよ、馬鹿」

「む。 バカって言ったほうがバカだぜ」

「へん。 ならお前のほうが“馬鹿”って一回多く言ってるじゃん。

お前のほうが馬鹿だ」

「残念。 今でオマエのほうが一回多くなった。 やあ、い、ばっかじゃねえの」

タイムカプセルを前に小学校低学年並の醜い不毛な争いをする二人だった。

「——」

幼稚な言葉の応酬をする中、陸はでも…と思う。

お金は子孫に残せるけど、でもその思いまでは残せない。

残された者の幸せを願ったはずなのに、その価値は変わってしまい、争いの元にさえる。

宝物はきつと本人だけにしかわからないものなのだ。

だからこの世にお金を残すぐらいなら、思い出をみんなとたくさん残したほうがずっと楽しいだろう。

それは目に見えないものだろうとずっと、それこそあの世まで持つて行けるものだから。

あの世の風は冷たいし、この世のお金は使えないから、誰かとの温

かい思い出があつたほうが絶対安心できる。

だからこんな毎日のなにげないやり取りもきつと悪くないものなんだ。

地獄を冒険してみて、オレはそんなことを学んだんだ。 ……なんてな。

「よしつと。 ま、こんなもんか」

「今度開けるのは俺たちが中学卒業する時ぐらいにするか？」

「そうねー。 その頃には神社も直つてるといいわねー」

掘り返した土を元に戻し、男衆は額を擦る。

三人ともいい笑顔だった。

ただ、焼け落ちた神社の木片を拾ったのを加えたので、もう一度埋め直したタイムカプセルの中身はますます混沌としたものになった。

「さて。 じゃあ、いつちょアキヨシまでレッツ競争だ。

例の通り、負けたヤツが冷たいもんおごること」

神社に来たとき三人の間で恒例となっている商店街の雑貨屋までの飲み物を賭けての競争。

「じゃあ。 よーいどん——の三十秒後に陸くんたち来てねー」

そつ朗らかに言って、小動物が飛び跳ねるように参道を駆け下りる紫織。

昔取り決めた、男の子の矜持として陸たちが強引に提案した女性の紫織へのハンデだったが、その必要がないくらい軽快な動きだったのんびりしていそうで、陸の姉だけあって案外彼女も運動神経はい

いのである。

“ほわほわの実”を食べた癒し系の能力者だと噂されるほどの力ナツチだったが、ここは水辺からは遠い小高い丘。陸上部から何度も伝授をお願いされるほどの小鹿走法に勝つには容易ではないだろう。

でも望むところだ。

いつも遠慮して他人のことを考える紫織と本気で競争できるのは少ない。

部活や、友達の誘いといった自分の都合よりも常に家族を、弟のことを無意識のうちに優先してしまうから。

そんな姉が遊びとはいえ、自分のために本気で走っている姿は、陸にはとても輝いて見えた。

だったらオレも本気で走らないと。

「いち、にーい、さーん……」

「いち、に、さん……」

が。 思いと行動はなかなか一致しないものである。

同時に数え始めたが、悠也のほうが数を数えるのが圧倒的に早い。

陸の声は鬼ごっこをするときに用いるようなゆっくりとした数え方だった。

「……にじゆく、さんじゆ。 よしお先」

「……じゅーろく。 ずるっ！ おい待てよ」

別にさらに手加減をしているわけでも、ふざけているわけでもない。

この数え方が昔からの癖で直せない陸はもどかしげに唸る。

「金は残せないじゃなかったのか？」

お前の財布の中身すつからかんにしてやるぜ」

「意味違えよ、ばつかじゃねえの」

苛立たしげに一人地団太を踏みながらそれでも律儀に数を数えていると、大きな樹木も揺らす一陣の強い旋風が吹き抜けた。

「——んっ」

突然の風に思わず陸は瞼を閉じた。被っていた帽子が飛ぶ。

視覚を遮った闇の中、陸は生き物の気配を背後に感じた。

真夏の日に氷のように冷たい気配。

氷のように涼しげな心地よい気配。

振り返ると鳥居の下に人影が帽子を手に立っていた。

夏には多少暑そうな黒のワンピースという装い。

とてもとても長い髪が風に流れてなびいている。

幻のように美しい少女だった。

でも彼女は確かにそこにいた。

ここなら会えるかもしれないとは思っていたけど、まさか本当にまた会えるとは。

「よう。今日は暑いな」

気を許した長年の友人に対するように、陸は親しげに手を上げた。

「だからって、もう川に入っておぼれたりしないだね」

「ははっ。それはさすがにもう懲りてるって」

「そ。それはなによりだわ」

どこまでも変わらぬ涼しげな様子の彼女に陸は安堵した。

すでに悠也の姿は豆粒のようにはるか遠く。

紫織の姿にいたってはまったく見えなくなっている。

自分が冷たいものをおごるのは確定だろう。

せつかくの姉と競争する機会を失うのは惜しいが、もうちょっとぐらいゆつくりしてもいいか、と陸はうなずき、

「オレと姉ちゃんを助けてくれて本当にありがとう」

今までしたことがないほど深く長く、陸は幽玄の少女に対して頭を下げた。

彼女がしてくれたことはいくらお礼を言っても足りなかったが、せめて一度ちゃんとお礼を言っておきたかったのだ。

「しょーねんががんばったからよ。わたしはなにもしてない」

そんな陸に対して、彼女はいささか素っ気ない態度を取る。

「んなことねえよ。ガキの頃を含めてミタカガミなんとかって神さまのお陰だ。」

おかげでちよつとは強くなれた」

「…思い出しちゃったんだ。謎は謎のままのほうが楽しいのに」

少年の純朴な笑みに彼女は影のある笑みを零す。

人に化けた化身が、人間に正体を見抜かれ去ることで物語が幕を下ろす時のように悲しげに。

「…そんなことねえんじゃないか？」

わかんないことがわかったら嬉しいし、誰かのことを知ってそいつのことをもつと理解できたら、きつともつともつと仲良くなれて楽しいと思うぜ」

「あら。 姉弟そろって生意気なこと言うわね。
さすが、どこかの詩人を越える偉業を成しとげただけのことはあるわ」

陸の純朴な強さに今度は彼女も純粹な苦笑を漏らす。

この物語は確かに幕を下ろし始める。

だがそれは決して悲劇ではない。

彼が彼である限り。

「…オレはほとんどなにもやってねえよ。 オマエのおかげだ」

「いいえ。 神はそもそもゆづせんと座すだけで誰も助けたりはしない。 ただ上かみの者として導しるとなるだけで、人は己が力でその道を登りつめて救われるだけなのよ。 だから今までどおりの生活ができるのはしょーねんたちの努力のたまものすぎないわ」

「…それでも、やっぱありがとう。 オレはオマエがいてくれてすつげえ助かったよ」

「ぱーね。 お礼なんていいって言ってるのに…」

小難しい宗教の話は陸にはわからなかったが、彼女がどうしようもなくお人好しだということはよくわかった。

だってこいつはただ見ているだけではなく、ちゃんと手を差し伸べてくれたのだから。

「ねえ。 なら一つ聞いていい？」

「ああ。 オマエには大きな借りがあるからな。
ひとつと言わずなんでも聞いてくれよ」

「——いま少年が目に写す世界。

そこには願いを抱くだけの美しさがある？」

陸のことを静かに伺う彼女の眼差しと声。

それは真剣ながらもどこか脅えを含んだものだった。

——なら君にとって世界はきれいじゃないの？——

ああ……。こいつはずっと気にしていてくれていたんだ。
自分さえ忘れていたことを。

母さんが死んだあの日。

この場所で世界に絶望し泣き続けたあの時から、ずっと。
なら……オレはこいつを安心させてやらないと。
もう大丈夫だぞって伝えてあげないと。

己の思いを確信に変えるために、陸は周囲をゆっくりと見渡す。
燦々と降り注ぐ陽射しは元気で。

青々と生い茂る草木は風と共に踊り。

セミの合唱が賑やかに木霊する。

世界はこんなにも命に満ち溢れていて、こんなにもきれいだった。
なにより……

「当たり前じゃねえか。」

少なくとも目の前にすっげえ美人がいるぜ」

「あら、ナンパ？」

セミが鳴いていた。セミだけが泣いていた。

悲しくなくせに。

でも一生懸命泣いていた。

短い命だからこそ。命が大切だからこそ。

なら——

「おう。なんか冷たいもん飲みにいかねえか？」

いっしょに競争しようぜ、鑑」

もう一度手に入れたこの奇跡のような日々をみんなで大切に生きた
い。
そうオレは君にまたこいねがう。

R i k u s i d e e n d

第三十二話 末・希望（後書き）

とりあえず完結？

でも彼女の返事がまだですし…？

ですが、彼の誘いに彼女がどう答えたか。

それはそれこそ神のみぞ知る話にして皆さんの想像にお任せしたい

…とも思っているのでラストを公表するのは次回にしたいと思います。

終幕やあとがきはいつも通り三日後にアップ予定。

ではそのときまで^^ノシ

終幕・彼女もまたこいねがう（前書き）

終幕・彼女もまたこいねがう

——むかしむかし。もう忘れるほどのむかし。彼は彼女にあつた。

ほんの少しむかし。ずっとひとりだった彼女は彼にあつた。

「おねえさん？　いないのー？」

ああ。また変なやつが来た。

たった一度。うるさいのがイヤで声をかけたただけなのに。どうしてこの珍妙な幼子はまたここに来たのだろうか？

……いや、変なのはわたしだ。

目障りならもう来るなと追い払えばいいのだ。なのに、そんなことさえできず、その小さな姿をただ影から窺っている。

幼子は今日も声を枯らすまでわたしを探していたが、日が落ちると落ち込んでとぼとぼと帰っていった。

彼はなにがしたいのだろうか？

わたしはいつたいどうしてしまったのだろうか？

でも今度こそ、こんな寂れた場所にはもう来ないだろう。

だってあれだけ馬鹿のひとつ覚えのように繰り返していたお参りを、今日もしてくれなかったから。

「おーい。きょうもないのー？　ここにいるっていったくせに——」

……なのにもまた来た。 迷惑なものだ。

幼子は神聖なこの地に我が物顔でまるで遊びに来るような感覚でやつてくるのだ。

信仰が捧げられなければ、力も供給されない。
ならば、まったくもってムダで無益な存在だ。

なのに、どうしてわたしはほっと吐息を漏らしてしまうのだろうか？
これではまるで幼子がここに来ることを待っていたかのようなではないか。

……それは絶対にあつてはならないことだ。

わたしは平等であらねばならない。

縫るものが安心できるように、悠然と、超然と、あらねばならない。
それが久遠の昔からの神としての“私”という者のあり方なのだ。
だから特別な存在などいていいはずがない。

「きょうはあつたかいねー」

…

……

「今日はいい天気だね」

…

……

「最近寒くなってきたな」

それなのに、幼子は来る日も来る日も飽くことなくやってきた。

幼子は少しずつ遅しくなり、一緒に来た姉に手を引かれていたのが
逆に手を引くようになり、他の友人を連れてくるようになり、この
地で元気よく遊んだ。

そして時折、あの日雨宿りした場所を思い出したように振り返る。
わたしが一瞬前にいた場所を振り返る。

なぜか幼子の前に姿を現すことは躊躇われた。

人間の成長は早い。

迷っている内に、幼子がこの地に来る間隔は次第に長くなり、理由など忘れてただここに遊びに来るようになり、わたしを探すこともなくなり、ぼーやと呼ぶには相応しくない精悍な少年となった。

だからそれだけでわたしは満足だった。

ただ座すだけでなにも施さぬ存在に比べて、その姿は輝かしく、愛おしいものだから。

満足？

そこで胸の内に巣くう不安の正体を認めざるをえなくなってしまった。

きつとわたしは怖いのだ。

わたしの正体を知られ、あの純粹で真っ直ぐな声で糾弾されるのが。

憎悪の目を向けられるのが。

どうしようもなく怖いのだ。

たまらなく怖ろしいのだ。

だってわたしは無力だ。彼の期待を裏切ったのだ。

それなのに、この身さえ案じてくれたことに礼のひとつも言えない。声をかければ、この子はもう二度とここには来てくれないのではと怯えているのだから。

一介の人の子が怖ろしいなど、神として有るまじき無様さだ。そんな醜悪な姿を見せることなど、とてもできなかった。

……わたしは逃げていた。

戦火に燃え上がった建物に驚き慄き、ひとりだけ逃げ遂せた昔と変わらず。

わたしは昔から何も変わっていない。

罪滅ばしにせめて、主人が愛して止まなかった人の子を見守ろうと決めたのに……。

そんなことさえ、わたしは満足に役目を果たせなかったのだ。

—— おかあさんのびょうきが、よくなりますように——

本気で信じてくれていたのに。 本気で祈ってくれていたのに。

わたしは幼子の当たり前の願いを叶えてあげられなかった。

その力がなかったのだ。

それは神として赦されるものではない。

人として償えるものではない。

だからといって逃げれば失うだけ。

ただ座すだけではなにも得られない。

それが世の道理だ。

…… ならばせめて、わたしは今わたしのできることをしよう。

祈らなくなった幼子の代わりにわたしよりも更に上のものへ祈り、希おう。

—— どうかこの幼き者につつがなく幸せな生涯を送らせたまえ。

そのための未だ明かされぬ力がわたしにあるのならば、

逃げずに一歩踏み出す勇気を与えたまえ——

それは誰かに願われるのではなく、わたし自身が願った身勝手な願いにして小さな決意。

誰よりも辛いはずなのに、それでも他者を案じてくれた優しい子へわたしができること。

そうして、上として相応^{かみ}しい存在になれるよう、神としては相応し

くない、たゆまぬ努力を積む日々が始まった。

——そして、悲しみにくれる彼のまえに彼女はふたたび姿をあらわした。

少したくましくなった彼とともに、彼女は彼のあねにあいにいった。

「…悪いな。イヤな役押しつけちまって」

そう震える声で、でもはつきりと彼はそう言った。

とても哀しそうに、とてもとても誇らしそうに。

濡れ輝く頬に小さく笑窪を作り、目をきつく結んだ。

だからわたしは決心した。

たとえそれが常に平等であるべき神に反する行いだろうと。

わたしは昔、泣いていた彼にただ坐しているだけではダメだと教諭したのだから、その言葉の責任ぐらいはとらないとすべてが嘘になってしまう。

裏切った存在の言葉をまたも信じてくれていた彼の無垢な信頼さえ嘘にしてしまう。

わたしが存在したことも、この胸に宿る思いも本当の幻想にしてみよう。

そんなのはイヤだから。

だからわたしは彼の覚悟に、彼の命ではなく自分の命を黄泉に落すことを決心したのだ。

信仰を住処と共に失い先の見えていたわたしの命を。

そうして蘇生の術の媒体に必要な肉親の血を彼から最低限取った後、このぱーな男をしつかり面倒見るように、と、わたしは少女に言った。

でも、人ははるかに強かった。

わたしが思っていたよりもずっと。

「——そんなのめーです。

後で陸くんが悲しむようなこと、お姉ちゃんは絶対に許しませんからねー」

少女は大人の眼差しで、ゆっくりと、だがきつぱりと言った。

彼はこの姉に育てられたのだと理解させられた。

静かに眠る彼を欠いての、地獄での延長戦。

右大官吏らの口添えがあったとしても、人の死への畏怖の具現たる地獄の主を相手に、その華奢な矮躯で一步も引かずに交渉した少女は、なるほど彼が怒らせると怖いと言ったのが頷けるものだった。

わたしは、彼の姉の思いの強さに二度も身を救われたのだった。

わたしは彼の変わらぬ思いの清さに心を救われたのだった。

そしていま——

ああ。　まただ。　また変なやつが来た。

もう会うつもりはなかったのに、どうして彼はここに来たのだろう。

どうしてわたしは彼の前に姿を現してしまったのだろう。
本当にこいつのせいで久遠の昔からただあり続けたわたしはおかし
くなってしまった。

思えば、すべてを他人のせいにして、自分はただ泣いているだけで
なにもしない彼が、わたしは氣に入らなかった。

思えば、深く傷ついた自分を放っておいて、それでも他者を気づか
う子供らしくない彼が、わたしは氣に入らなかった。

でも思えば、そんな彼だからこそわたしは氣がかりだったのだ。

上の者としての役目だと嘯き、ただ座すだけでなにもしてこなかつ
たわたし。

己の望みを省みず、他者の願望だけをただ聞き届けてきたわたし。

それはまるで出来の悪い鏡を見ている気分だった。

その思いは躊躇いもなく姉に命を捧げてみせたことで確信に変わる。
何度痛い目にあっても、誰かを助けようとすることを厭わない損な
男。

きつとわたしは、人としては聖人よりも尊いが傍にいる者としては
危なくて見ていられないこの男のことが……。

「おう。　なんか冷たいもん飲みにかねえか？
いっしょに競争しようぜ、鑑」

それなのに、上の者として、まだ若く幼い部分のある彼に訓示を与
えなければならぬのに、その言葉を聞いた時、わたしは嬉しかつ
たのだ。

畏れ敬われ、媚び諂われ、崇め奉られるのではなく、わたしの隣に
いようとしてくれる者がいてくれることが。

わたしの正体を知ってもなおそう言ってくれることが、なによりも
嬉しかったのだ。

だから歩み寄ってくれた彼に、わたしも一歩踏み出してこう答える。

高みから降り、彼と同じ目の高さになってこう答える。

「ええ。じゃあカフェオレが欲しいわ。ミルクたっぷりのやつね」

夏の暑さを抜くような涼しげな声で、それでもその言葉と胸の温かさ口許を和ませて。

君の隣に立って、これから君と共に紡ぎだす世界が幸いなものとなることを希う。

——『君にまたこいねがう』おわり
next is...?

終幕・彼女もまたこいねがう（後書き）

あとがきは別にわけて同日中に掲載します。

ここまで読んでくださり、本当にありがとうございました。

あとがきという名の蛇足（前書き）

注。 このあとがきにはいわゆるネタばれというものが含まれていません。

故に、文庫本を読むときのようになあとがきを読んでから読むかどうかと決めようなんて考えないでください。

最後まで読んだ方のみ、せっかくだしついでだと思って付き合ってくださいと嬉しいです。

その程度の駄文なので読まなくてもいいぐらいです。

（まあ書いた以上は読んでもらえると嬉しいですが）

あとがきという名の蛇足

前書きは読んでいただけましたか？
では……

ちゃんと警告したからね。

はい。 こんにちは、もしくはこんばんは、作者のみなだけです。というわけで“また君にこいねがう”どうにか無事に完結できました。

まず初めに、わたしの書いた拙い作品を最後まで読んでいただき、どうもありがとうございます。

プロットの段階では、最後は姉の死を乗り越え強く生きていくことを決める主人公を書く予定でしたが、作者はハッピーエンドが好きなので自然とこうなっていました。

本当はバットエンドだったので末の話での強引なご都合主義をお許しください。

でもラストのシーンのあたりはすらすらと書けて一番楽しかったです。

というより……

テーマは命。

起 夏の日主人公の姉が死んだ。

承 お葬式で不思議な少女に出会う。

転 地獄へ姉を取戻しに。

結 姉は取り戻せたけど、自分が死ぬことに。

末 全てはユメだった。ただ姉が死んだことだけは変わらず現実で。

姉にごめんなさい。そしてありがとうございましただけは真実で。

たったこれだけのプロットとも呼べない初期プロットからよくここまで話を膨らませた（電波を受信し混沌とムダに書き連ねたとも言う）と自分でも感心しております^^；

そしてこの後、陸の連れてきた鑑に紫織と雄也はいつたいどんな反

応を示したのか。

その後、彼らはどんな話を紡いだすのか。
さてさて。 物語というものは想像と共に本当に無限に広がって
いくものです。

そんな中、何とかひとつの小説を区切りがつくまで書き切ることが
でき、大きな自己満足に浸っております（笑）

……とまあただ単に自画自賛だけだと意味がないので、自分が投稿
した文章を時間を置いてちよつと読み直してみます。

一人反省会というやつです^^;

…

……

………

砂吐きたくなってきましたorz

でも、ここで憤死してほつたらかしたと進歩がない上に読者に申し
訳がたたない（本当によく我慢して読んでくださいました。 読ん
でくださった方、感謝です><）ので、文章に書いて少し分析して
みます。

反省点その？ 三人称と一人称が混ざっていて文章が読みづらい

一応主人公の陸の視点で物語は定まっていたと思いますが、作者の
未熟さがよくわかる悪文だったと思います。

これは、姉の死という重い傷を背負った主人公の心情を丁寧に表現
できるだけの技量がまだわたしにはない。 でもやっぱり主人公の
心情を書きたいなんて我が儘が生み出してしまったものです。

いつか実力がついたら、統一してみたいと思います。

反省点その？ 体言止めが多い

熱く臨場感が求められるバトルシーンでは、壮絶な戦いに酔ってもらうためにこういう手法もありかなあーと個人的には思うのですが、それが普段の文でも多いと明らかに逆効果だったと思います。

どうでもいいところでまで変な余韻、余剰が生まれて、小説の完結後自分が読み直してみるとウゼエと思うところが多々ありました。今からでも無性に修正したいのですが、反省の気持ちを忘れないためにも黒歴史はさらしておきます。

反省点その？ 伏線について

謎は謎のままのほうが楽しい。

マジックのタネや仕掛けのように、知らないことも、知ってしまったら途端につまらないものに思えることってありませんか？

…

…

…

はい。 言い訳してごめんなさい。 マジでごめんなさい。 たんに作者の実力不足です。

でもここはあえて言い訳しますw

この話では語りきれなかった未回収の伏線が多々ありますが、この作品、実は作者が昔書いた未完結の小説の序章を加筆修正したもので、なんですよ。

というわけでまことに勝手ですが、伏線は、作者の脳内で今も妄想として続いている続編でちゃんと回収していきますので、そのままにさせてください。

いつか日の目を見る機会はある…… かもしれませんので。

とまあ。 反省点はとりあえずこんなものかな。

本当はまだまだありますけど、これ以上反省してたら、筆を折りたくなるのでやめておきます（汗）

さて。 こんな未熟な筆者が悟ったように語っていても、つまらな
いと思う（……というより読むのをやめられた）と思うので、話題
を変えましょう。

登場人物について少し語ってみたいと思います。

主人公について。

久遠院陸。

久遠院は珍しく、かといって難しすぎず、かつ古風なイメージをと
いうことで選びました。

陸は三文字の苗字に合うように名前は一字にしようということか
ら考えました。

彼の性格は自分の感情に素直で天然の混じった熱血漢。

お姉ちゃんが大好きなシスコンです。

ただ、おバカなのは母親を喪った悲しみを深く考えない為に頭のネ
ジを自分から外したためで、色々と欠陥も抱えています。

完璧すぎる人間というのは、個人的に共感も持てず嫌いなので。

また、読者に想像を膨らませてもらうために、あえて主人公に対す
る描写は少なめにしております（野郎の姿なんて描写しても作者が
楽しくないという理由もありますがw）

自分の好みに合わせて彼の雄姿を想像してあげてくださいw

ヒロインについて。

鑑。

名前は神秘的で神聖なイメージがあるようにということで選びました。

神名はカガミとネコという言葉の部分以外は適当です。

難しくてももう覚えてないw

鑑は、よく小説で見かける、てへ 事故でミスして殺しちゃった的な神さまではなく（批難するわけではなく、愛嬌があつてそういうのはむしろ好きです）、本気で信仰したくなるような神さまを書いてみたいなーという欲望から登場しました。

老練で妖艶な魅力と清廉で神秘的な魅力が合わさった存在をイメージしています。

わかりにくかったかもしれませんが、“わたし”ではなく“私”と饒舌に喋っているときに、透徹とした神さまモードの鑑です。

日本の神さまはなにやら二面性があるそうなので、普段のぼんやりと舌足らずで眠たげな不思議少女と性格を使い分けています。

……決して邪気眼じゃないですからね。

また、彼女の身は滅びしかないと調子に乗って書いてしまいました。が、神社が再建され信仰を取り戻し、また彼女に感謝するある男の存在のおかげで事なきを得たようです。

今後、一生のお願いをしてしまった彼は本当に一生彼女に頭が上がらないでしょうw

真ヒロインという名の姉について。

久遠院紫織

彼女の名前はどこか優しく感じるイメージをということで発音から選びました。

ちなみに紫は作者の好きな色です（誰も聞いてない

普段はほんわかのんびりしているけど、大事なところではしっかりと
としていて芯の強い少女。こんな姉がいて欲しい。いたら全力
で手助けしたいという願望から登場しました。

彼女のことを一言で言うと、弟のことが大好きな重度のブラコンで
すw

ただ。紫織は幼い頃に母親を喪ったことにより、主人公同様一見
まともに見えますが、心の傷を負っています。

自分の為ではなく、人の為に笑う。陸の言うニセモノの笑顔です。

笑顔とは本来自分が楽しいからするものなのに、姉として責任感が
ら周囲を安心させようと自分でも気づかないうちにムリにする。

そんな彼女は陸に寂しい思いをさせたくないと努力してきて、これ
からも続けます。

主人公と共に、今後周囲の人間と時間が彼女を癒していつてくれる
でしょう。

友人について。

五十嵐悠也。

名前に数字がつくのって何かカッコよくないですか？
にのまえ

一とか二ノ宮とか三千院とか。

……そう思うのはわたしだけかな^^;

とまあそんな安直な理由から彼の苗字は選びました。

ちなみに、名前は知人のものをもじっています。

悠也は王道的に主人公の友人的な立場の存在が必要だということ
で登場しました。

でも悪友であつても親友ではない。永遠のライバルというヤツで
す。

悠也は実を言うと一番苦もなく台詞を書けたキャラです。

なんちゃって英語のルー語（古いw）ですが、キャラを作るのは今のわたしの筆力では限界があるのでこれで勘弁してください。まあ新しく習ったことをすぐに使いたがる子供だと思っていただければ違和感もなく読めるかとw

敵役について。

烈。

地獄に登場する妖怪の中で悪役をとということで自分の知っている妖怪から選びました。

悪行を積んだ死者を攫う妖怪らしいです。

火車猫だから火が関係あるものにしようということでこの名前になりました。

（一文字の名前って個人的に好きなんだよなあ。

姉も初めは紫織じゃなくて栞にしようと思ったぐらいだし）

—— 敵には敵の背負っているもの、譲れないものがある。

本当はそんな魅力のある敵役を作りかったのですが、わたしの力ではまだムリでした。

“自分を認めて欲しい存在に誉めて欲しくて無茶をした”

まあ狂人の意味不明な理屈ではない分、動機は単純でわかりやすかったかもしれませんが、浅いですね。

その分終盤が安っぽくなってしまいませんでした。

これも次の課題です。

彼もまた主人公の永遠のライバルでしょうw

EX 一応、それっぽい“敵には敵の譲れないものがある”も考えてはいました。

以下没プロットより抜粋。

妖怪とは人間の畏怖や畏敬の念から生まれた幻想の存在である。

←
しかし、科学が発展した現代を生きる人間は、彼らはその存在そのものが否定してしまっている。

←
そのため、妖怪たちは忘れられ、力を失い、ただ緩やかに滅びゆくだけである。

←
自分たちがただの妄想として消滅しないために、人々の思いをさらに集めるために、火車猫の子供は与えられた役割以上の悪行をつんだ。（思いを集めることで、この現代で自分という存在を新たに産んだことで身体の弱った母を助けたかったという理由も加える？）

なんて設定も考えてましたが、ちよつと子供の妖怪にしてはへビーすぎるし、なによりこの問題をこの話の中では解決することができないので修正、没にしました。

牛頭と馬頭。

セツトで語られることの多い地獄で亡者を苛む獄卒です。

草枕子などの文献や、漫画やゲームでもよく登場します。

人間の敵として登場し、退治される話が多いそうです。

その例の通り神さまモードの鑑に退治されてしまいました。

本当はもっと強いんだよ、きっと。 作者の実力不足なだけでw

魅耶。

地獄といえば閻魔様の次に有名な地獄の番犬。

ゲームや漫画など、様々な話で大活躍しているため、説明は必要な

いでしょう。

実は彼女は、作者の黒歴史満載の秘密小説からの特別出演です。公表できるレベルのものではないので、この話は封印しますw

大人たちについて。

子供の起こす失敗や、弱い部分を受け止め、見守ってくれる存在。死というものを子供よりも冷静にとらえ、正しく諭し導く。

でも人間である以上同じように脆さを持っていて、悩んだりもする。

そんな彼らを目標にし、反面教師にし、やがて自分も同じ大人になつていく。

そんなことをイメージして作りました。

ただ。作者はあんまり人生経験が豊富ではないので一番書くのが大変でした。

…… 洪くて魅力のあるキャラ作ってみたいなあ ; w ;
経験あるのみですね ^^ ;

とまあ。こんなものかな。

これ以上ごたごた書いても読む気なんてわかないでしょうし、そろそろやめにしておきます。

でも最後にこれだけは。

わたしの作品を読んでくださる読者の方が確かにいてくれて、感想や評価をいただけたことが、このわたしが最後まで責任を持って小説を書き切れた一番の原動力でした。

“小説家になろう”といった誰でも気軽に投稿できるウェブサイト

という場を用意してくださった方々を含めて本当にありがとうございます。

かなり時間も体力も使ったので、今後新たな小説を書いて投稿するかは未定ですが、また機会があれば是非とも投稿させて頂きたいと思います。

その時は温かい目で見守ってやってください。

でもまあ、小説は書くのも楽しいですが、やっぱり読むに限りますね^^;

みなさんの小説を読んできると自分の未熟さが改めてイヤになります；
w；

では、徒然なる駄文のあとがき、失礼しました。
ここまで読んでくださり本当に感謝感激です。

縁があればまたどこかでお会いしましょう^^ノシ

追伸。

勇気を出して、感想をユーザー以外からも受け付けてみることにしました。

多くの方々から、評価、感想、誤字脱字の指摘、次へのアドバイス等いただければ幸いです。

どうにか完結させられたので、厳しいご指摘もお待ちしております。

まだまだ未熟な文章で成長のないわたしの一番の栄養剤になりますのでw

あとがきという名の蛇足（後書き）

——この物語がわたしの世界を彩ってくれたあなたに届きますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8298p/>

君にまたこいねがう

2011年5月2日15時39分発行